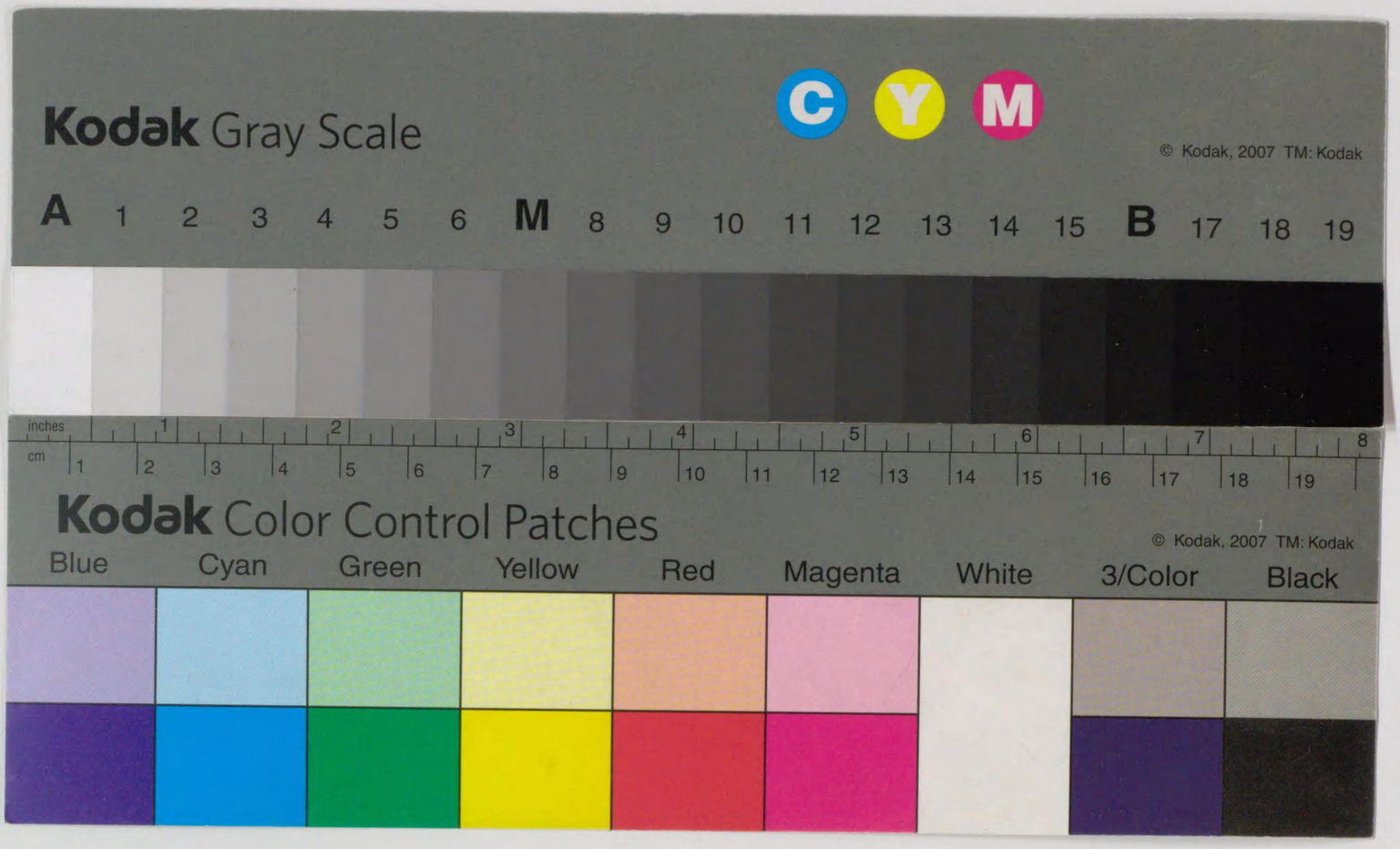


563
199
563-199
12005015131 83

9.11.30

家事教授研究會編

現代家事資料集成

東京　文光社發行

昭和三年 帝國圖書館

563-199

例言

國家には主權者があつて土地人民を統治せられて居る如く、家には戸主があつて家と家族とを管理統督して居る。一國と一家の間には大小の差こそあれ其の體制は一つである。而して我が國は總合家族制度の國であるから一家の榮枯盛衰は直に一國の治亂興廢に大なる關係を有するのである。齊家が如何に重大なる責務をもつて居るかは何人も容易に理解し得られるであらう。

家事科は齊家の途を攻究する學科であつて女子にとつては最も重要なるものである。然るに從來家事科が此の大なる責務を自覺して、此の大なる立場……家庭をとほして社會の改善をはかり、國家の隆昌を期する……例へば食物を調理するにも國家の食糧問題を考へ、衣服を調製するにも國家の貿易狀況を思ひ浮べて善處すると

いふ態度……此處に立脚して教材を取扱つて來たであらうか。

又凡ての科學は駸々として進み、社會の情勢は刻々に變遷しつゝある。此の文化的新時代に適應し、最新科學の基礎の上に經濟主義によつて吾々の生活を律して行かねばならぬ。從來の家事科は果して此の點について遺憾がなかつたであらうか。吾々は大に考へさせられるのである。

人或はいふ。『家事科は行きつまつた、何とかしなくてはならぬ』と。然しこれは單に一家の内的方面にのみ着眼し、外的方面卽ち國家社會との聯關を無視し、科學の進歩と沒交渉の經驗中心・技術本位の家事にとらはれて居る人々の喘ぎの聲ではあるまいか。吾々は之に贊意を表することは出來ないのである。眼界を廣くし、家事科を科學化し、社會國家化して行く時は、其處に未開拓の廣野は漠々として展開されるのである。新らしい家事は誠に多望であらねばならぬ。

研究はこれからである。決して行き詰つて居ないのである。

井上先生の現代家事教科書は此の新らしい立場に於て記述されて居られるやうにうかがはれる。吾々同志は此の傾向を高潮したいために先生の教科書の本文を中心に、之れが資料を輯集し教授者研究者の爲めに少しでも手引になるやうにとつとめ漸くにして本書を成すに至つた。當初は本文を解説する態度で記述しやうかと思つたがかくては先生の本旨をつかみ得ざるおそれがあるから資料は單に資料として羅列しておいた。故に本文と資料とが常に全然同一軌道を走つては居ない。又資料と資料との間に説を同じうして居ないものもある。學者各説のある所で其處にお互が研究點を發見し得る便宜もあるから其のまゝに掲げておいた。

資料は現代斯界の權威者竝に先覺者各位の著書中に求めた。其の重なるものは附録として掲げてある。何人の書にもあるやうな

事項を除くの外は各章節の資料の下に其の著者書名を明記しておいた。讀者は、其の原著を座右におかれて研究の資料に供せられなば得る所蓋し多からうと信ずる。參考に供した書の著者各位に對し吾々は玆に感謝の意を表する次第である。

昭和二年四月

家事教授研究會同人識す

現代家事資料集成　後篇　目次

第一篇　看護……一

第一章　看護と看護人……一

看護の意義・看護人の資格

第二章　醫師の招聘……六

第三章　病人の衣食住……七

病室・病褥・病衣・病人食物

第四章　介抱……一八

第一節　病狀の觀察……一八

顏貌・體溫・脈搏・呼吸・睡眠・便通

第二節　介抱……三〇

咳嗽・嘔吐・發汗・惡寒戰慄・腹痛・痙攣・虛脫・瘧・瘡・入浴

第五章　藥用……三九
内用藥・外用藥
第六章　應急手當……五七
打撲・創傷・火傷・咬螫傷・出血・溺沒・人事不省・中毒
第七章　日常罹り易き疾病の手當……八〇
消化器系統・呼吸器系統
第八章　傳染病及び豫防・消毒……八五
第一節　傳染病の種類……八五
傳染病の意義・傳染病の種類
第二節　傳染病の豫防……一〇一
飲食物・衣服・住居隔離消毒
第三節　傳染病の消毒……一〇六
消毒燒却・煮沸消毒・蒸氣消毒・藥物消毒・日光消毒
第九章　繃帶……一一一
繃帶の種類・用法
第十章　回復期・危篤者の取扱……一二六
第一節　回復期の注意……一二六
第二節　危篤者の取扱……一二七
危篤の徵候・確死・死後の處置
第十一章　養老……一三二
老人の生理上心理上の特徵・身體上の奉養・精神上の奉養

第二篇　育兒……一四四

第一章　婦人衞生……一四四
青春期・成熟期・更年期・月經・婦人衞生上の注意
第二章　姙娠……一五五
姙娠・身體的變化・精神的變化・姙娠の持續
第三章　胎兒の發育……一六六
姙孕卵・胎兒の發育
第四章　姙娠中の攝生……一七八
衣服・食物・居室・運動・入浴・睡眠・精神の安靜

第五章　分娩……一九一
第一節　分娩前の準備……一九一
産室必要なる用具用品身體上の用意
第二節　分娩……一九三
陣痛後産分娩の時間
第六章　復故作用と攝生……一九九
復故作用産婦の攝生
第七章　初生兒の取扱……二〇七
第一節　初生兒の身體情態……二〇七
第二節　初生兒の取扱……二〇八
臍帶入浴衣服襁褓寢具初毛抱き方
第八章　嬰兒の養育……二一九
第一節　哺乳……二一九
母乳乳母乳哺乳上の注意
第二節　人工哺乳……二四〇
牛乳牛乳稀釋法牛乳殺菌法牛乳代用品哺乳器
第三節　混合哺育……二五五
第四節　生齒……二五六
乳齒永久齒生齒と身體的異狀齒の衞生
第五節　離乳……二六三
離乳の時期隨乳期の食物
第六節　便通……二六六
完全便異常便
第七節　睡眠……二六九
睡眠の效果睡眠時間
第八節　啼泣……二七一
第九節　運動……二七五
啼泣の種類虛置
第九章　小兒の衣食住……二七六
第一節　小兒の發育……二七六
第二節　小兒の衣服……二八七
衣服附屬品
第三節　小兒の食物……二八九
第四節　小兒室……二九一

第十章　小兒病……二九三
鷄口瘡・消化不良・神經系統の障害・麻疹・百日咳・實扶的利亞
猩紅熱・疫痢・水痘・痘瘡
第十一章　感官の發達……三一一
第十二章　精神作用の發達と教育……三一四
第一節　精神作用の發達……三一四
精神作用發達の概說・本能作用
第二節　言語……三二九
第三節　玩具……三三〇
玩具の効力・選擇與へ方
第四節　繪畫・手工……三三六
第五節　童話……三三八
童話の種類・童話の選擇
第六節　德性の涵養……三四四
品性の陶冶・陶冶すべき主要德目・德性涵養上の手段
第十三章　就學・學校・家庭の連絡……三五五
義務教育學校と家庭との連絡方法・家庭の心得

第三篇　家庭管理……三六〇

第一章　財の管理……三六〇
第一節　生產と消費……三六〇
欲望・財貨・生產・生產の三要素・消費
第二節　合理的消費……三七三
消費の分類・合理的消費
第三節　消費と女子……三七九
經濟上に於ける女子の地位・消費と女子
第四節　一家の資產……三八八
資產・動產と不動產
第五節　一家の收入……三九八
收入の種類・收入の分類・一家經濟の基礎たる收入
第六節　一家の豫算……四一三
豫算編成の必要・豫算編成上の留意點・支出項目の選定

第七節　一家の支出……四二〇
支出の區別經常支出の項目と其の內容
第八節　收入支出の調和……四二八
收入の增減物價の高低不慮の支出收支の調和負債貯蓄
第九節　餘財の管理……四三八
現在消費と未來消費貯蓄投資保險
第十節　家計簿記……四五六
家計簿記の職責簿記帳の種類取扱上の注意
第二章　家務の處理……四七〇
第一節　家務の分擔……四七〇
家務の種類家務の整理方法
第二節　家務の處理と使用人……四八〇
家族の協力使用人の選擇待遇上の注意
第三節　物資の購入……四八三
物資の巧拙と家計物資購入の方法研究
第四節　交際……四九二
交際の本旨交際上の心得
第三章　家風の振興……五〇六
第一節　家庭の要素……五〇六
家庭生活の起源家庭成立の三要件
第二節　東西家庭の比較……五一四
家族制度と個人制度親子中心と夫婦中心我が國家庭の特色
第三節　家風の振興と主婦……五三七
家庭に於ける主婦の地位家風の樹立家風による子女の陶冶
夫婦相和
附錄……五五一

目次（終）

現代家事資料集成（後篇）

家事教授研究會編

第一篇　看　護

第一章　看護と看護人

一家の主婦は平素家族の衛生に注意して其の健康增進の途をはかり、疾病を未然に防ぐやう注意すべきも、然も家庭には全く疾病なきを保し難し。而して疾病を治するには醫藥と養生とによるは勿論なるも、其の經過の良否恢復の遲速に至りては、看護法の巧拙如何によること多し。

資料

看護　病者傷者の疾病創傷を看侍保護し、天然の良能と醫師の治療とを幫助し、患者

の經過を監視し、苦痛の減少を圖り、治療に向つて善導するをいふ。（長尾肱齋氏新纂看護婦學）

吾々の身體には、

(1)外界の狀況（寒暑の變化等）に良く適應する。
(2)損傷を生ずればよく、之を新生補綴する。
(3)毒物が入れば之を中和する。
(4)寄生虫・黴菌が入れば撲滅する。
(5)病原に對し免疫性となる。
(6)疾病を治療する。

等の特異の力がある。之を天然良能又は自然良能といふ。

看護は醫療をたすけて其の效果を完からしめ、兼ねて病人の苦惱を和らげ慰安を與ふることである。『一に看病二に藥』。『醫者三分看護七分』等の諺の如く合理的看護は治療に大なる效果があるものである。

日常攝生の大綱。

(1)常に規律ある生活を爲すこと。
(2)常に心身の欲望を節制すること。
(3)常に心身を爽快にすること。
(4)常に適當の榮養物をとること。
(5)常に清潔に留意すること。
(6)常に心身の鍛錬をはかること。

女子は元來同情・緻密・柔和・忍耐等の天性を有し、看護人としての適性を有す。されど看護上の知識に乏しく、其の技術の拙なる時は、如何に誠心を以て看護するも、醫療を輔佐して其の效果を收め、病人を慰安して其の苦惱を免れしむること能はざるのみならず、却つて方法を誤り容態に障害を與ふることなしとせず。故に女子たるものは看護法の一般に通じ看護人としての資格を備へんことを要す。

資料

女子と看護　女子は資性・柔順溫雅で緻密であり、よく艱難に堪へ、言語動作優婉であるから病者を慰安するに適する。然し看護に關する素養がなく、でたらめな親切ごかしの看護は却つて醫療を妨げるものである。

看護人の資格。

(1)身體の健康なること。

(2)献心的精神のあること。
(3)熾烈なる同情と忍耐に富むこと。
(4)看護法に通ずること。

看護人の心得は枚擧に遑あらずと雖も重なるものは左の如し。

(1)常に醫師の命に從ひ、決して我意を挾むべからず。
(2)萬事秩序清潔を守り、規律的に活動すべし。
(3)自己の健康に注意し、病室内にて飲食すべからず。
(4)身體を清潔にし、頭髪を整へ、衣服を正し、病人其の他の人々に不快感を起さしむることあるべからず。
(5)傳染病を看護する場合には、手指の消毒を嚴にすべく、又其の病室に出入する毎に衣服の外被の脱着を嚴守し、病毒を他に運ぶことなきやう注意すべし。
(6)病人は身體の衰弱に伴ひ、神經過敏となり、感情鋭くなるものなれば、看護人は務めて精神を安靜に保たしむるやう注意すべし。即ち同病人の不結果なりし經驗を談じ、又は周圍の人々と耳語するが如きことあるべからず。
(7)病人は其の身體の不自由なるが爲め、或は非理の怒を發し、罵詈(ばり)叱咤(しった)することあるも、看護人は顏色を和げ、言語を穩にし、其の意に悖ることあるべからず。

若し一家に人手不足し、看護行屆かざる恐あるか、重症にして看護婦を雇ふ時は、溫良にしてなるべく經驗に富めるものを選ぶべし。

資料

看護婦の資格

(1)身體强健にして精神堅實なること。
(2)機敏活潑なるべきも浮薄輕佻ならず、愼重沈毅なること。
(3)意志强固にして品行方正なること。
(4)親切と同情、慈愛心とを以て病人に接し、且つ忍耐力に富むこと。
(5)謙讓柔順にして醫師の命を守り、病人に對し不遜の擧動なきこと。
(6)正直にして多辯饒舌ならざること。
(7)看護法の知識を有し、且つ實地の經驗十分なること。
(8)清潔を守り消毒を嚴重にすること。

第二章　醫師の招聘

醫師は誠實懇篤にして德望あり、學術經驗共に優れたる良醫を選ぶべし。醫師には內科・外科・產科・婦人科・小兒科・眼科・耳鼻咽喉科・皮膚病科等の專門あれど、重症にあらざる限り、平素かゝりつけの身體の情態をよく知れる醫師を便なりとす。

醫師招聘の際には、必ず其の容態を詳細に記し、使にもたせ來診を求むべし。又電話にて招聘する時は、其の容態を精細に話すべし。此等の注意を缺く時は、應急手當の用意整はず、手おくれとなることあるべし。

一旦選擇したる醫師は大に之を信賴し、萬事其の指圖に從ふべし。病人の醫師を信賴すると否とは、疾病の恢復に大なる關係を有するを以て、病人の傍にて醫師の技倆を疑ふが如き言語擧動を愼むべし。萬一合診を要する時は主治醫にはかり、其の推薦によりて定むべし。

醫師の來診に際しては、病狀を明細に語り、病床日誌・體溫表等を示すべし。體溫・脈搏・呼吸・兩便等は、疾病の診察に必要なるものなれば、看護人は此等につき特に注意を要す。診察終らば醫師に手洗湯・石鹼・タオルを供すべし。

住みなれぬ土地に移轉したる時は、相當なる醫師の住所氏名を調べおくことは、主婦たるものゝ日常心得の一なるべし。家族の中に老人・小兒を有するときは殊に必要なり。

第三章　病人の衣食住

(一)病室　病室は閑靜にして空氣の流通よろしく、明るくして、濕氣を帶びず、夏は涼しく冬は暖かなる所をよしとす。廣さは六疊乃至八疊を適當とす。

資料

病室の選擇の條件

(1)病室は閑靜なる所を選ぶこと。離座敷の如き所がよい。臺所・玄關・階段・道路・客室・殊に店頭に近い所はよくない。

(2)正南・東南又は西南向の室がよい。但し發作性の病は北向の室を選ぶべきである。

(3)日光の射入よろしきこと。新陳代謝を盛にし、精神を爽快ならしめ、病症に好影響を與へ、殺菌の効がある。又室が明かで塵埃を發見し易く掃除行屆く。但し眼病

腦症には光線の射入を加減しなくてはならぬ。

(4)相當の廣さあること。少くとも六疊以上、副室あらば看護上に便なること。狹い室は空氣不潔になり易く、夏季暑熱を來し易く、看護人の動作に不便を感じ、所要の器具の置場に困る。

病室には如何なる條件がいるか。

(1)日光の充分に射入する室たるべきこと。日光が人の健康に資することは大なるものである。故に病室としては日光の十分に入り込む室を第一要件としなくてはならぬ。東側、南側の兩面が開いて朝から日中にかけて日光が十分入り込むやうな室であると都合がよい。日光の入らない室は陰氣で濕氣勝で不健康的である。

(2)相當の廣さを有し、換氣が適當に行はるべき室なること。室が狹いと炭酸瓦斯其の他有害瓦斯が蓄積し、短時間中に惡い臭氣を放つやうになつて來て、頭痛や嘔氣を催すやうになる。六疊乃至八疊位が適當である。副室があると看護人の控室、休息室に充てられて至極便利である。

(3)靜肅に安眠し得べき室なること。餘り騷々しくない所がよい。多數の人の出入する所とか臺所に近接した所はよくない。

(一)溫度　室内の溫度は華氏六十度乃至六十五度を標準とするも、貧血者、虛弱者には六十五度乃至七十度を適當とす。煖房法は煖爐を可とす。火鉢を用ふる場合には換氣に注意すべし。

空氣の乾燥を防ぐには、鐵瓶又は金盥に水を入れ、煮沸して水蒸氣を發せしむべし。夏時室内を清涼ならしむるには、(一)煽風器を設備すること、(二)氷塊を盆に盛りて臥床の近傍に置くこと、(三)庭前に撒水を爲すこと等種々あり。

資料

病室内の溫度　常に平均ならしむることにつとむべきである。一般に攝氏十七度乃至二十度が適當とせられて居る。夏季は涼しく、冬季は暖くするやうに注意しなくてはならぬ。老人、小兒、無熱性病人には少しく溫度を高くし、熱性の病人には少しく低くするを要する。

(一)溫室法

(1)火鉢又は煖爐を用ふ。空氣を汚し、乾燥せしむるにより適當に換氣し、火鉢又は煖爐上に茶瓶をおき水蒸氣を發せしめておくこと。

(2)煖爐は病人の頭邊に置いてはならぬ。病人との間に衝立樣のものをおくと室内

を一様に溫め得る利點がある。

(二)冷室法

(1)窓を開放し、庭に撒水し、板間の病室には床上にも撒水すること。

(2)室内に氷柱又は水盤を置くこと。

(3)窓際に冷水に濕せる布片を掛け、次室に煽風器を置き冷空氣をおくること。

(二)換氣　病室は其の空氣の清潔を保つため、適宜に換氣法を施さゞるべからず。少くとも一日數回其の窓戸を開放すべし。但し直接病人に風の當らぬやう窓又は入口の方に屏風を引き廻らし、寒冷の季節にありては窓戸を開かざる前に病人の被衾を增し、換氣後窓戸を閉ぢ然る後之を除くを要す。

資料

病室内の空氣は何故に汚れるか。

(1)呼吸、火焰、炭火等により空氣中に炭酸瓦斯が增加する。

(2)排泄物も亦空氣を汚染するものである。

換氣の方法

汚染せられた空氣を排除し、新鮮な空氣と交換せぬ時は、直接種々の中毒症狀を起す上に病症にも不良の影響がある。通常窓戸を開く。殊に上方の窓を開くがよい。

(1)病人に直接風を感ぜしめぬこと。次室の窓を開くか、風の方向と反對の窓を開くか、床邊に屏風を立つること。

(2)冬季は換氣の爲めあまり室を冷さぬこと。

(3)朝の掃除後十分換氣をはかること。

(三)清潔法　掃除は毎朝病人の覺醒したる後に行ふべし。病人を隣室に移し、十分窓戸を開きて清潔に掃除すべし。重病人は、他に移すこと不可能なるを以て、塵埃を避くる爲め、布片にて病人の顏面を覆ふべし。戸障子の塵埃は雜巾にて之を拭ひ、飛散せしめざるやう注意すべし。

資料

掃除

(1)朝夕二回づつ行ふこと。

(2)病人を副室に移すか布片により其の顏面を被ひ然る後之を行ふこと。

(3)塵拂箒を用ふるよりも濕布拭掃除がよい。

病室を汚さぬやうにするには如何なる注意を要するか。

(1)吐物・排泄物は特に檢査を要するものの外は速に室外に出すこと。
(2)覆蓋ある唾壺を備へ、唾痰は必ず之に吐かしめること。
(3)紙屑洗濯物を散亂せしめぬこと。
病室內の器具什器　病室內には必要な器具什器を除く外おかぬがよい。不必要なものは室外に出しておくべきである。

(二)病褥　病褥は病室の中央に置くべし。若し室狹き時は、左又は右或は足の方に空所を存すべし。病褥は清潔にして寢心地宜しき寢臺を可とす。床には藁布團を用ふべし。被衾は羽蒲團・毛布・輕き綿蒲團を用ひ、蒲團は上下共清潔なる白布を以て之を覆ひ、時々取換へ、其の清潔を保つべし。

資料

病褥

(1)普通室の中央とす。病室の狹い所では一側に偏せしめ、頭部を壁に近からしめるやうにするがよい。
(2)病人が横臥のまゝ庭園を眺め得る所がよい。
(3)窓の直下・煖爐・火鉢の近傍はよろしくない。
(4)西洋風の病室では寢臺を用ひ、和風の病室に於ては蒲團を用ふ。

寢臺　寢臺は木製よりも眞鍮又は鐵等の金屬製の方がよい。木製のものは安價なるも、不潔になり易く床虫蚤の附着するおそれがある。金屬製のものは清潔消毒に便で耐久力が大である。但し、高價なると重くて取扱に不便なる缺點は免れない。

蒲團

(1)蒲團や枕は白布を以て之を被ひ、蒲團には更に襟布を用ひ、敷蒲團には敷布を用ふること。
(2)敷布は敷蒲團に縫ひつけ、皺襞をつくらぬやうにつとむること。
(3)敷蒲團の汚染・濕潤せらるゝおそれある時は、敷蒲團の上にゴム布油紙・合羽を敷くこと。

(三)病衣　病人の衣服は輕く軟かなる地質を選び、ゆるやかに仕立つるを可とす。凡て衣服・寢具等の更新は、日中暖かなる時に於てすべし。冬季は之を暖めて後にすべし。

資料

病衣　柔軟にして輕く、薄く、寬濶にして白いものがよい。
更衣　病衣は汚染し易いから頻繁にかへることが必要である。又發汗・失禁・吐物等によつて汚された時は直に取かへなくてはならぬ。

更衣の心得。

(1)四肢に傷あるものは健肢を先にして脱がしめ患肢より着せしむること。

(2)冬季は室を溫くして更衣すること。

(3)發汗後の更衣は、乾布で汗を拭ひ去つて後にすること。

(4)衣服は乾燥したるものを用ひ、且つ溫かなるものを用ふること。

(5)更衣は靜に之を行ひ、病人に疼痛を感ぜしめぬこと。

(2)更衣後は皺襞をつくらぬやうにすること。

重病人の更衣法。　看護人は病人の右側に立ち、病人を左側臥位として帶を解き、右手の袖を脱がしめ半裸體として脱がしめたる衣服を病人の下に押し込み、新らしい衣服を右手に通さしめ、病人を右側臥位として舊衣を取去り、新衣を引出し、左手を通さしめ帶を結ぶ。

(四)病人の食物　適當なる食物は、病人の體力を維持し、病氣の回復を早からしむるものなれば、病人の嗜好、消化の難易、榮養價値等を考慮して調理すべし。然れども病氣の種類、容態の輕重等により、食品の種類、分量、回數等に差異あるものなれば、凡て醫者の指圖に從ふを要す。食欲缺乏し、食を欲せざる病人には、食品の選擇、調理法、配膳等に一層注意し、攝食せしむることにつとむべし。

これ實に看護人たるものゝ任務なり。

資料

病人の食物。　病氣の種類及び程度によりて食物を異にすべきで醫師の指圖に從はなくてはならぬ。

(1)流動食　牛乳、重湯、葛湯、水飴、羹汁等で重病人又は消化器病者に與ふ。

(2)易消化性食物　粥、半熟卵、刺身、細挫した脂肪少なき牛鳥肉、脂肪少なき魚肉、食パン、オートミール、豆腐、軟かなる野菜、煮た果物等で餘り重からざる病人又は輕き消化器病者に與ふ。

(3)常食　甚だしき不消化物を除きたる普通のものをいひ、輕き病人に與ふ。

病人の飲料。　冷水、氷水、サイダー、平野水、果汁水等がよい。

病人の種類と食物。

(一)急性熱性病人の食物　急性熱性病は、身體組織の燃燒盛なる故尿素、尿酸及び尿酸鹽類の排泄增加し、又胃液の分泌減却し、殊に其の酸類を減少するが爲め、消化力を減弱せしめ、又從つて消化器粘膜の吸收作用を減弱せしめ、或は又胃粘膜の感覺を過敏ならしめて嘔吐を催ほさしむることがある。

從つて熱性患者に食を與ふるには、蛋白質の消耗せるを補充するがよい。脂肪多き

ものを與へてはならぬ。含水炭素を與へる時は、脂肪及び蛋白質の燃燒を節減するの作用があれど、多量なるときは醱酵し易きにより注意を要する。鹽類はなるべく與へざるがよい。之れに反し水は殊に多量に與へるがよい。

熱性患者には、なるべく流動食を與へ、食物の溫度の如きも寧ろ冷かなるものがよいのである。攝食の回數なども三回と定めず少しづつを數回に分けて與へるがよろしい。殊に食欲は熱の下降せる時は昂進すれど、熱高きときは多くは食欲少なきものであるから、一日中熱少なき時に滋養多きものを與へ、之れに反し熱高きときには滋養分少なきものか、又は水を與へねばならぬ。

(二)慢性熱性病人の食物　凡そ慢性熱性病は、身體組織の消耗急性熱性病に比するときは其の消耗急遽ならざるも、疾病の全經過永續するがため、漸次消耗を來たし、衰弱に陷るものであるから、日常其の食養に注意を怠つてはならぬ

總て慢性熱性病患者は急性熱性のそれに比するときは、一般に食欲增進し、固形食をも欲求することあるにより、能く患者の狀態に注意するときは患者の欲求を滿足せしむることが出來る。且つ慢性熱性の病人にありては、蛋白質は勿論、脂肪と雖も之れを禁止するの要なく、又含水炭素にありては多量に與ふるときは、蛋白質、脂肪等の消耗を補足するものである。

慢性熱性病患者の食物は、なるべく消化易き、流動性食物或は軟食をよしとす。

(三)恢復期に於ける食物　總て疾病の恢復期に、身體組織の消耗を補給すること充分ならざるときは、遂に衰弱して恢復するを得ざることがあるから、周到なる注意を要するものである。

しかして恢復期に當り、其の食物を攝取する時期は、病症により一律に云ふを得ざれども、下熱して數日を經過し、消化機能が恢復し、食欲が昂進して來たときに初めるをよしとす。

快復期に與ふべき食物は、多量の蛋白質に富みたるもの、又脂肪を含み、含水炭素及びヴヰタミンに富めるものを與ふべきである。鹽類も組織の構成に必要なるものである故、之れを多量に與へ、殊に熱性病患者の恢復期に用ふる食物としては、牛乳、スープ、半熟卵、重湯、葛湯、カタクリ、馬鈴薯粥、梅漬、新鮮なる嫩菜等がよい。

飲食物の與へ方。

(1)患者起きて自ら食事をなし得るときは、背後に蒲團を積むか、又は椅子を倒にして座蒲團をかけ、これにもたれて食事をさせる。若し起きること能はざるときには看護人は之を助けて飲食せしめねばならぬ。即ち飲食物が過冷過熱ならざる樣にし、前に與へたる食物の未だ嚥下し終らざるに後ちのものを與へざるやう、又之

れに反し餘り間隔を置かざる樣に注意せねばならぬ。又流動食を與ふるに仰臥の儘で頭部を低く垂るゝ時は飲むことを得ざるものであるから、頭部を擡げて高くし、或は頭部を横にして後與ふべし。すべて流動食を與ふるときには長嘴を有する硝子製又は陶器製の吸ひ口を以て與ふるときは甚だ便利なるものである。

(2)食事の前後には必ず口を嗽がしむべきで、これを怠るときは遂に口内の炎症を起すことがある。

(3)食事の回數は、病症により六、七回或は三、四回に與ふものなれど、安眠中若しくは甚だしく食欲なきときには與ふるを要せず。但し間食は嚴禁すべきものである。

(4)食事に用ひたる食物は長く室内に留めてはならない。直ちに取り去るをよしとす。（原田醫學博士家庭看護法）

第四章　介　抱

第一節　病狀の觀察

看病人は常に病人の狀態を觀察測定し、之を病床日誌に記載し、醫師來診の際之を提示して參考に供すべし。觀察・測定すべき事項は左の如し。

(一)顏貌　病狀はよく顏貌にあらはる。赤熱・蒼白・苦悶の狀を呈する等異狀ある時は特に注意すべし。

(二)體溫　健康者の體溫は攝氏三十六度五分乃至三十七度を常溫とし、之を越えたる時は發熱の徵にして、又三十六度以下に下降せる時は虛脫の徵なり。病人の體溫は普通午前六七時の頃に最も低く、午後五六時頃に最も高し。

檢溫せんとする時は、檢溫器をよく振りて水銀を全く降下せしむべし。檢溫は腋下に於てし、其の時間は檢溫器によりて異り、二三分の短き時間にて測り得らるゝものあれど普通は五分乃至十五分間を要す。

測定の度數及び時刻は醫師の命に從ふべし。一般には一日二回にて午前八時及び午後五時とし、又正午を加へて三回とす。

體溫を測定したる時は之を體溫表に記入し、其の經過を通覽するに便ならしむべし。

資料

體溫。體溫が攝氏三十六度以下又は三十七度以上になるのは身體に異常あるを示すものである。體溫をはかることにより、身體の異常の有無を知り、其の高低により病

症の輕重及び經過を察することが出來る。

體溫の測定法

(1)通常腋窩に於て行ふ。腋窩の濕潤せる時は乾布にて拭ふこと。

(2)檢溫器の水銀柱を三十四度以下に振り下げ、消毒して後腋窩に挿入すること。

(3)挿入後同側の上膊を胸壁に密接し、前膊を胸前に來らしめ、手を以て他の上膊を握らしめること。

(4)回數は朝夕二回、一回の時間は十分間が普通である。

體溫の高低原因

(1)年齢による。

初生兒	三七・四五	五年乃至九年	三七・七二
十五年乃至二十年	三七・三七	二十一年乃至二十五年	三七・二二
二十六年乃至三十年	三六・九一	三十一年乃至四十年	三七・一
四十一年乃至五十年	三六・八七	五十一年乃至六十年	三六・八三
八十以上	三七・四六		

(2)飲食物攝取後は〇・二乃至〇・三分高く飢餓時は體溫は下降する。運動をした後は少しく體溫が上る。

(3)冬季寒冷の時は夏季溫暖の時に比し〇・一乃至〇・三分低溫である。

熱の名稱と區別　ウンデルリッヒ氏熱度標準は左の如くである。我が國の人は平溫は三十六度乃至三十七度である。其の心して見られたい。

(一)平溫　攝氏三十七度乃至三十七度四分。

(二)亞熱性溫　攝氏三十七度五分乃至三十八度。

(三)熱性溫　之を左の五つに小分す。

(1)輕熱　攝氏三十八度乃至三十八度四分。

(2)中等熱　朝攝氏三十八度五分乃至三十九度。夕攝氏三十九度五分。

(3)高熱　朝攝氏三十九度五分。夕攝氏四十度。

(4)最高熱　朝攝氏三十九度五分以上。夕攝氏四十度五分以上。

(5)過熱　攝氏四十二度以上に昇る。病人は多くは死に至る。死熱。

熱の定型　朝夕の體溫の差異によつて定めるものである。

(1)稽留熱　一日熱度の差異一度以內のもの。腸チフス・發疹チフス・丹毒等の熱の如きは之に屬す。

(2)弛張熱　一日間の熱度の差一度以上なるもの。肺結核の如きこれである。體溫が高いと惡寒盜汗を伴ふ。其の差三度乃度四度に至る時は消耗熱といふ。不良の熱

候である。

(3)間歇熱　發熱が數時間持續し、其の他の時間は無熱なるものをいふ。マラリア性諸病に之を見る。

虛脫　體溫下り、體力衰脫し、心臟のはたらきも弱り、皮膚は蒼白、精神朦朧となる症狀をいふのである。第二節介抱の所の(七)虛脫參照。

(三)脈搏　健康者は大人一分間六十五搏乃至七十五搏を平脈とし、女子は稍々多きを常とす。初生兒は百四十搏を算し、成長するに從ひ次第に減じ、五歲に至れば百搏となる。

脈搏は入浴、精神の興奮及び神經作用等によりて增加することあれど、普通ば發熱に伴ひて增加するものなり。

病人の脈搏は體溫と共に病症と極めて密接の關係を有するものなれば、精密に測定するを要す。脈搏を測定するには、腕關節の內面拇指側に於てするを常とす。

大人にして脈搏增加して百五十に達し、又は減少して五十以下となるか、脈搏不正なるか、微弱にして計へ難き時は危險の徵なれば速かに醫師に告ぐべし。

資料

脈搏　健康者は七十乃至八十。但し年齡、體質、性によつて增減がある。又精神感動、勞働、攝食後、喫煙、飲酒、熱性病、心臟衰弱、種々の中毒症等によつて頻數となる。

壯年の病人で六十以下百二十以上を算する時は注意しなくてはならぬ。

(1)頻脈　一分時間の脈數平素より多きもの。　遲脈　頻脈の反對。

(2)疾脈　搏動の速に消失するもの。　徐脈　疾脈の反對。

(3)硬脈　動脈壁硬固にして指により壓し難きもの。　軟脈　硬脈の反對。

(4)大脈　心臟力盛にして多量の血液を動脈に注ぎて之を擴張す。　小脈　大脈の反對。

(5)整脈　搏動規則正しきもの。　不整脈　整搏の反對。

(6)結代　脈搏不正にして一時休止するもの。

脈搏測定法　普通撓骨動脈を以てし、腕關節に近い所で示、中、環指の三本を並べて當てゝ檢する。脈數のみならず、强弱、整不整をもはからなくてはならぬ。二十秒間計算し、三倍して一分間の計測數とする。

脈搏數を異にする原因。

(1)年齢による一分間の脈搏數は概ね左の如くである。

初生兒	一三〇乃至一四〇	一年	一二〇乃至一三〇	二年	一〇五	三年	一〇〇
四年	九〇	十年	九七	五年	九四乃至九〇	十年乃至十五年	七六
十五年乃至五十年	七〇	六十年	七四	八十年	七九		

(2)女子の脈搏數は男子よりも多い。

(3)運動せる時、身體の或部に疼痛ある時嘔吐ある時は脈搏數が多い。

(4)直立せる時又は椅子に倚れる時は横臥せる時よりも多い。

(5)體溫上昇する時は、脈搏數も增加する。

(6)食物攝取後は暫時其の數を增加する。

(7)精神の著しく激動せる時は其の數を增加する。

(8)睡眠中は覺醒時に比し其の數が少い。

(四)呼吸　大人にありては一分間に十四回乃至十八回を常態とす。初生兒は三十五回乃至四十回にして極めて不規則なり。病人は其の症狀により四十回乃至八十回甚だしきは百回に及ぶことあり。檢息は靜に手を胸部又は腹部に載せて數ふべし。呼吸困難に陷る時は、鼻翼の顫動、胸肩部の甚しき運動又は喘音を伴ふものなれば、醫師に報告して手當を受くべし。

資料

呼吸式。

(1)腹式呼吸　男子に多い。

(2)胸式呼吸　女子に多い。

(3)胸腹式呼吸　呼吸困難の場合は此の式である。

呼吸數　大人は十五乃至十八。脈搏四に對し呼吸の一割合。熱性病、肺臟の疾患、勞働後、衰弱、飲食、浴後等には其の數を增すものである。

呼吸促迫　一分間に三十回以上となり、時には七八十回乃至百回に及び呼吸困難を呈することがある。之を呼吸促迫といふ。四十回內外が多い。

シヤイネストック氏呼吸現象　呼吸困難の一種で漸次增減する深呼吸困難と無呼吸狀態とが交互に來るものをいふ。危篤の兆である。

呼吸數變動の原因

(1)年齢　初生兒四五乃至三五。一年三五乃至三〇。二年三〇。五年二六。十年二

五。十五年乃至二十年二〇。二十年乃至二十五年一九。二十五年乃至三十年一六。三十年以上一八。

(2)溫熱　有熱患者又は炎暑の候には呼吸は增加する。

(3)動作　身體の運動時には呼吸數が增し、睡眠時には呼吸數が減少する。

(4)身體の體位　平臥せる時は起立せる時に比し呼吸數が少い。

(五)睡眠　睡眠は病人の爲め最良の休息なり。故になるべく安眠せしめんことを要す。卽ち病人就眠せば、其の周圍を一層閑靜ならしめ、夜は燈火を覆ひて室內を薄暗くすべし。若し睡眠中に服藥・檢溫・攝食の時刻となるも、强ひて覺醒せしめざるをよしとす。

資料

睡眠。睡眠は精神・身體の休養上缺くべからざるものである。心身の疲勞を恢復し、神經の亢奮を靜めるものである。

睡眠
- 生理的睡眠
  - 仰臥又は橫臥し、安靜にして顏貌柔和・眼と口を閉ぢて鼻呼吸を爲し、呼吸脈搏は緩徐である。刺戟により容易に覺醒す。
- 異常睡眠
  - (1)嗜眠……刺戟により覺醒するも直に睡眠し、長時間覺醒せず。
  - (2)昏睡……睡眠持續して人事不省の如く刺戟を與ふるも容易に覺醒せず。偶覺醒するも精神朦朧として人事を辨へず。
  - (3)不眠……睡眠不能なるか、眠に就くも深からず僅の刺戟により覺醒す。

不眠の看護

(1)臥牀を整頓し、褥布等にしわあれば、之をのばし、病人をして就眠に適應せしめ、室內を稍暗くすること。

(2)室內に於ける私語を禁じ、外圍を靜肅ならしむること。

(3)夏季炎熱の候は枕頭に氷塊をおき室內を淸涼ならしむること。

(六)便通　病人の兩便も亦病症の診斷に必要なるものにして、回數色分量異物の存在・臭氣・硬軟等に注意すべし。

重病にして上圖し能はざるもの、又は檢便の必要あるものには便器・尿器を與ふべし。便器には種種あり。使用・洗滌等に便なるものを選ぶべし。

使用終りたる時は直に室外に出して換氣法を行ふべく、決して便器を病室内におくべからず。傳染病患者の兩便は必ず消毒するを要す。

資料

便。通。

(1)普通　一日一回。大人は淡褐色、小兒は黄色を呈するのが普通便である。

(2)下痢　一日三回以上にして流動狀である。

(3)便秘　二三日以上便通のないのをいふ。

(4)異常排便　不隨意に排便すること(失禁)。頻回の疼痛性便意あることは、共に異常排便である。

便。に。對。す。る。注。意。

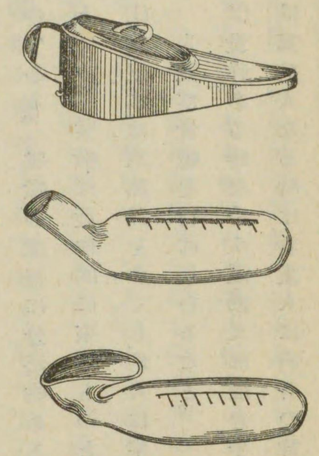
(1)回數・分量・色澤・硬軟・異物の有無を檢すること。

(2)便の性質及び混入物に異狀物あらば醫師の檢査を受くること。

(3)傳染病患者の便は消毒すること。

尿。利。(小便)

尿は身體中の汚物を腎臟に於て泌別し、膀胱中に貯へられ一定の時期に體外に排泄せらるゝものである。尿の分量・度數・色澤及び溷濁・臭氣の有無等は醫師の診斷上に必要なるものである。



挿込便器
男子用尿器
女子用尿器

(尿量の減少)

(1)熱性病を兼ねたる場合。

(2)下痢及び發汗後。

(3)心臟の衰弱せる場合。

(4)急性慢性腎臟炎。

(5)滲出物及び漏出物の成生する時。

尿の綠色若くは黑色に變ずるのは石炭酸中毒の徵候である。

尿の赤色・褐色・暗褐色を呈するのは腎臟・膀胱・尿道出血の疑がある。

(尿量の增加)

(1)糖尿病。

(2)萎縮腎及び尿崩症。

(3)大飲或は皮膚厥冷時。

(4)急性病の恢復期。

(5)滲出物の吸收期(肋膜炎の如き)。

第二節　介　抱

(一)咳嗽　喉頭・氣管・肋膜・肺等の疾患の爲めに發するものにして、咯出物を伴ふことあり。故に咳嗽(がいそう)を有する病人には石炭酸水を入れたる唾壺を備へおき、其の發作の時には、之を口前に保ち、他の手にて病人の前額を支ふべし。

咳嗽頻發する時は、稍〻枕を高くし、或は半臥の位置と爲すを可とす。若し痰(たん)に血を交ふる時は、其の狀態により醫師に報告して指揮を待つべし。

資料

咳嗽。　呼氣の變態で、通常喉頭・氣管・肺臓等より生ずる分泌物を咯出する爲めに發すものである。咳嗽の度毎に分泌物あるものを濕咳といひ、分泌物を伴はないものを乾咳といふ。咳嗽は發作的に來るものと持續的に來るものとがある。

(1)病室には水蒸氣を多くし、病人は半臥位とし、頸部又は胸部に溫罨法を行ひ、時々吸入及び含嗽を行はしむること。

(2)發作ある時は冷水・溫湯又は溫き牛乳を與ふること。

(3)重病人なる時は、看護人は病者の背後に跪坐し、一手を以て前額を支へ、他手にて痰壺を取り、口前に保つこと。

(4)時には手を以て背部を按摩すること。

咯痰。　喉頭・氣管・肺臓で出來た分泌物で咳嗽により排泄せられるものである。主として粘液であるが、時に血點・血線を混ずることもあり、又純血・膿汁を咯出することもある。粘液性痰・膿性痰・粘液膿性痰・漿液性痰・血性痰等に區別せられる。

咯痰は消毒藥又は水を入れた唾壺等に吐かしめるか、紙片にとらねばならぬ。傳染病患者の咯痰は消毒した後でなければ投棄してはならぬ。

(二)嘔吐　嘔吐を催したる時は速に受器を與へ、帶を弛めて身體を緩かならしめ、左手にて額を支へ、右手にて靜に背をさすり、十分に吐出せしむべし。氷片又は冷水は吐氣を醫するものなり。吐出し終らば清水にて含嗽せしめ、吐出物は速に室外に出すべし。

資料

嘔吐。　病氣により胃又は腸の內容物を吐出することをいふ。

(1)直立せる病者は頭部を前方に屈せしめ、臥位のものは座位をとらしめ、又重病人には頭首を側方に向けしむること。

(2)看護人は、病人の右側に立ち、右手を前額部、左手を後頭部に當てゝ頭部の垂下を防ぎ、介者をして大なる容器を口前に保持せしめて吐かしむること。

(3)病人の衣服の緊縛を解き、重病人に在りては褥の汚染を防ぐ爲めに頤部と肩胛との間に布片・油紙を布くこと。

(4)嘔吐の終つた時は含嗽せしめ、口圍を拭ふこと。

(5)嘔吐後は半日位絶食せしむること。渴を訴ふる時は冷水・氷片等を少量宛與ふること。

(6)胃部に氷嚢をあてること。

(7)嘔吐頻發する時は、清涼飲料水・珈琲・茶等を少量宛與ふること。

吐物の處置

(1)分量・色・臭・氣・混入物の有無を觀察すること。

(2)長く吐物を病室に置かぬこと。

(三)發汗　病人發汗する時は、往々被衾を脫し、又は臥褥を離るゝことあれば注意すべし。發汗後は身體を拭ひ衣服を更へ、感冒を防ぐべし。

資料

發汗　氣溫の高度・衣服及び被衾の過重・勞働・神經機能亢進・熱性病の場合に多く體溫發散の理によつて起る。睡眠中の冷汗は、之を盜汗といひ、呼吸器病患者に多く、衰弱せるものにも往々ある。發汗の際看護上注意すべきは左の諸點である。

(1)室溫を下降せしめず、病人に直接風を當てぬやうにすること。被衾を脫却せざらしむること。

(3)發汗止みたる時は乾布で拭ひ、溫い衣服と着更へしめ、感冒にかゝらぬやうにすること。

(四)惡寒・戰慄　激熱又は重症の爲めに發するものにして病人は震顫して寒を訴ふ。此の場合には病人を溫保し溫湯を飲用せしむべし。後發熱したる時は頭部又は胸部などを冷やすべし。

(五)腹痛　病人を褥中に溫保し、帶を弛め、身體を動かさぬやうにし、湯婆・懷爐等にて溫むべし。若し腹痛と共に下痢を生じたる時は、特に身體を安靜・溫暖ならしめ、食物は葛湯・粥汁の如き流動食を與ふべし。

資料

腹痛の原因

(1)胃腸の疾患及び食傷したるとき。

(2)消化不良の爲め、腸內に瓦斯發生したるとき。

(3)便通の初めに腹痛を訴ふることがある。

(4)寒冷によつて起る。(冷腹)。

腹痛の處置。

(1)冬期は勿論夏季と雖も平臥溫包すること。

(2)疼痛部に懷爐湯タンポを當て又は溫濕布を施すこと。

(3)痛み甚だしき時は速に醫者の治療を受くること。

(六)痙攣　痙攣を發したる時は身體の一部又は全部の筋肉硬くなり、無意識的に震動す。其の全身にわたる痙攣は多くは人事不省に陷るものなり。かかる場合には病人を柔かなる褥中に安臥せしめ、頭部を冷やし、舌を咬まざるやうに保護し、手先・足先を溫むべし。

資料

痙攣。痙攣は癲癇・腦疾患・ヒステリー・蛔虫・生齒困難・腸疾患發熱等によつて起るものである。其の處置は左の如し。

(1)衣服を緩解し、蒲團・毛布等の上に臥せしむること。

(2)齒列間に布片等を挿み舌をかむを豫防すること。

(3)頭に冷罨法を施すこと。

(七)虛脫　病人の生氣著しく沈衰するを虛脫といふ。病人は顏面・蒼白・眼窩陷沒・四肢冷却・脈搏急速微弱・體溫は攝氏三十六度以下に下降し冷汗を流し、精神昏迷す。かゝる場合には、病人の頭部を低くして安臥せしめ、湯婆を以て身體を溫め、濃き茶・珈琲・溫酒・卵黃にブランデーを混じたるもの等を飲ましむべし。かくして速に醫師の來診を求むべし。

資料

虛脫。俄然發する體力の衰脫と心臟麻痺とを以てする症狀である。頗る危險で往々死することがある。

(1)原因　重症なる外傷・大出血・大手術後諸種の中毒等によるものである。

(2)症狀　顏面蒼白色又は蒼藍色を呈し冷汗を出す。四肢厥冷・瞳孔散大・脈搏微細頻數・呼吸淺表なり。

(3)處置　速に醫師を招き救急法を行ふこと。咽嗌の場合には赤酒・日本酒・ブランデーを與ふること。ブランデーは西洋酒の一種である。

(八)褥創　重病人久しく臥床する時は其の衰弱と動作の不自由なるとにより、肩・腰・膝等の骨立ちたる部分が病褥に接し、壓迫・摩擦等の爲めに、皮膚は赤色紫色を呈し又は剝離す、之を褥創といふ。褥創は病苦を增し、疾病の經過を不

良ならしむるものなるを以て、看護人は病人の身體の清潔を計り、臥位を變へしめ、衣服竝に臥床に皺なきやう注意すべし。

褥創の徴候ある時は、其の局部を冷水又は冷水に少量の酢・酒精又は橙汁を和したるものにて拭ふべし。護謨製環狀褥又は綿を繃帶にて卷きたる綿製環狀褥を當つるも效あり。

皮膚既に破れたる時は硼酸軟膏を布片に厚く伸べ之を局部に貼るべし。

資料

褥瘡。俗に床ずれといふ。身體の一部が强度の壓迫を被り、血行障碍を受け、其の部の榮養を失ひ、局所の皮膚に壞疽を起し、潰爛狀を呈せる狀態をいふ。甚だしきは皮下組織を侵し骨に達することがある。

(一)原因

(1)久しく同臥位に在ること。永く臥床して衰弱甚しく、働作自由ならずして、身體の一部が壓迫を受ける時は褥瘡ができる。

(2)病人の不潔及び潤濕せること。

(3)臥床及び衣服の不良なること。質硬く凸凹あり平かならず、皺襞あり、汚染濕潤せること等は何れも褥瘡の原因となる。

(二)症狀　初め皮膚發赤し疼痛あり、次で潰瘍を生じ、時には骨に達することがある。容易に治せざるのみならず、病原菌が侵入し、敗血症を起し、死に至ることがある。

(三)豫防法

(1)病人の榮養をよくして衰弱を防ぐこと。

(2)病人の身體を清潔にし、失禁・發汗ある時は直に拭淨すること。

(3)臥位は時々變換し、衣服敷布は時々交換するの外皺襞を伸しおくこと。

(4)好發部位は時々檢査し、清洗乾燥せしむること。乾燥せしむるには、サリチール酸末・デルマトール酒精・醋酸等を用ふ。

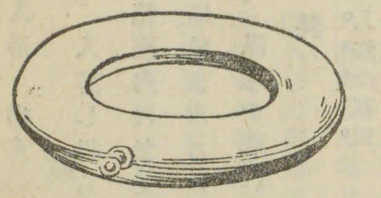
(5)壓迫を蒙り易き、所は空氣枕を用ふること。

(四)處置

(1)毎日數回溫濕布又はアルコールに微溫湯を加へたる稀酒精等で清拭すること。

(2)カンフル丁幾・酒精・醋酸水(醋酸一水三)を塗布すること。

(3)ゴム環狀襞(空氣枕・水枕)又は綿製環狀褥などを用ふること。



ゴム環狀褥

(九)入浴　病人の身體を清潔たらしむることは、看護人の主要なる任務の一なり。入浴し得らるゝ病人は醫師の指圖に從ひ、溫度を適當にし、定まれる時間の範圍内に於て入浴せしむべし。浴室は閉戸して風を引かぬやうにし、浴後には乾きたるタオルにて手早く身體を拭ひ、衣服を着せて臥床に復せしむべし。臥床を離れ難き病人は、熱湯にて手拭をしぼり、一局部づつ拭ふべし。

資料

入浴の區別

入浴 ┬ 全身浴
　　└ 局所浴……半身浴坐浴手浴脚浴等。

溫度による浴の區別。

(種類)	(溫度)	(全身浴の時間)
(1)冷浴	攝氏十度乃至二十度	五分以内
(2)半冷浴	攝氏二十一度乃至二十五度	八分以内
(3)微溫浴	攝氏二十六度乃至三十度	十五分乃至二十五分以内
(4)溫浴	攝氏三十一度乃至三十五度	二十五分以内
(5)熱浴	攝氏三十六度乃至四十一度	五分以内

持續浴　毎日二時間三時間それ以上時を定めて二三週間行ふものをいふ。不眠症・精神病患者等に應用せられる。

入浴の効果。

(1)汚垢を去り皮膚を清潔ならしむ。
(2)血行を盛ならしめ、新陳代謝をよくし、疲勞を去る。
(3)精神を爽快ならしむ。

注意。

(1)溫度は冷熱共に度を過ぎざること。
(2)入浴の際急に浴槽に入らず、入浴せんとする浴水を以て豫め身體を濕すこと。
(3)浴場に賊風の入らぬやうにすること。
(4)衰弱甚だしい時發熱せる時は入浴せざること。
(5)入浴後は乾ける布片を以て全身を充分に拭ふこと。

第五章　藥　用

藥劑には内用藥と外用藥とあり。其の區別を明らかにし誤用することな

く、醫師の示したる時刻・分量等を嚴守すべし。

内服藥には水藥・散藥・丸藥錠劑滴劑等あり。

資料

藥劑用法の一般的注意

(1)藥劑の用法は最も大切なものであるから、醫師の命ずる所に從ひ、適當の時期に於て適當の方法で服用せしめなくてはならぬ。

(2)藥劑は一定の場所に整頓し、他物と混在せしめてはならぬ。瓶口は密閉し、其の上部には白布を覆ひ塵埃のかゝらぬやうにしておかねばならぬ。

(3)藥劑に内用と外用とがある。用方箋には病人の姓名、用法等が記載してあるからよく之を熟讀し用法を誤つてはならぬ。

(4)藥劑によつては食前に用ふるものと、食後に用ふるものとがあり、或は臨時に頓服するもの(解熱劑・下劑・鎭咳劑・鎭嘔劑の如き)等がある。醫師の命に從ふべきである。但し重症者・衰弱患者等の熟睡して居る時は覺醒の時を待つて與ふるがよい。

藥劑の種類

(1)内用藥　口腔を經て胃・腸に達し、又は肛門より腸内に注入し、其の部の粘膜より吸收せらるゝものである。藥瓶には白色の用方箋が貼られて居る。

(2)外用藥　主として皮膚又は粘膜に塗布するものである。藥瓶には赤色の用方箋が貼られてある。

服藥の時刻　内服藥は、胃の空虛の時か又は充滿せる時か、指示された時刻を守らねばならぬ。

(1)空腹時　驅虫劑。

(2)食前(三十分位)　タンニン酸・オレキシン等。

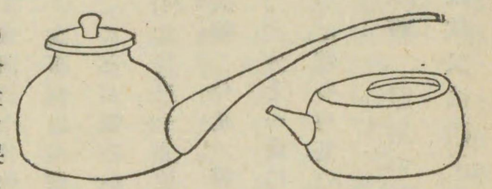
(3)食事直後　鐵劑・亞砒酸劑等。クレオソートや下劑の如きは胃の粘膜を刺戟することが強いから胃の内容の充實して居る時がよい。

(4)食後(三十分位)　消化劑・ペプシン・稀鹽酸・重曹等。

服藥の分量　醫師の示したる分量を嚴守すること。藥劑の効果を速かにせんとして二度分を一度に用ふるが如きことなきやう注意すること。ストリキニーネ・モルヒネ等は僅の用量の誤りで死ぬることがある。

(一)水藥　服用の際は必ず藥瓶を振蕩したる後盃又は藥匙にて用ひ、重病人には吸飲又は硝子管にて服用せしむべし。夏時は藥瓶を冷水に浸し腐敗を防ぐべし。

資料



吸飲器

水藥につきての注意。

(1)藥瓶の口は清潔な布片又は紙等で被ひ、塵埃のかゝらぬやうにしておかねばならぬ。藥瓶は冷かな暗い所に貯藏すべきである。

(2)水藥は藥劑を多量の蒸溜水に溶解せしめたものであるから沈澱する。故に之を用ふる時は振盪して用ひなくてはならぬ。

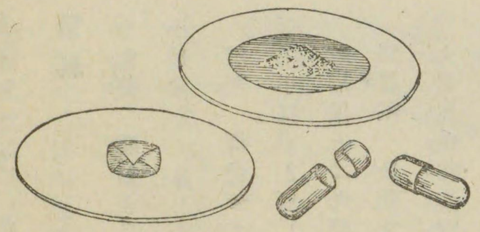
(3)水藥は盃又は藥匙に注ぎ然る後飲ましむべきである。藥瓶の口から直接飲用することは避くべきである。これ藥の分量を誤り、瓶内に殘れる藥は混濁し、腐敗を來す恐があるからである。

(4)服藥の時は、病人はなるべく坐せしむるがよい。重病人は仰臥せしめ、少しく頭部を横にし、硝子製、又は陶器製の細長い嘴管を有する急須狀の吸飲器又は猪口或は匙で少量づつ幾回も口中に流し込むべきである。一時に多量を注ぎ入れてはならぬ。

(5)服藥後は微溫湯又は冷水で含嗽せしめなくてはならぬ。苦味・酸味の强い藥劑を服用した時など十分に含嗽せしむべきである。

(二)散藥　藥を舌の上に載せ、水又は微溫湯にて嚥下すべし。飲み惡き藥はオブラート又は膠囊(にかうなうくわ)に包みて服用すべし。重病人・小兒等に散藥を用ふる場合には此の方法によるを便なりとす。

散藥は濕氣を受けざるやう保存するを要す。



膠囊とオブラート

資料

(1)散藥は濕氣を吸收し易いから、濕潤せざるやう注意して貯藏すること。

(2)少量の水にて口內を濕したる後、舌背に藥を載せ、微溫湯にて嚥下せしむること。

(3)苦味甚だしきものは「オブラート」を使用すること。

(4)乳兒は清潔なる指先にて少量宛舌背に塗り直に哺乳せしむること。

(三)丸藥・錠劑　舌の上に載せ、水又は微湯湯にて嚥下すべし。嚙むべからず。オブラートに包みて用

ふるも可なり。濕氣を受けざるやう保存すべし。

資料

丸藥　惡しき臭氣ある藥又は稍多量の藥を一頓に服用せしむる際、賦形藥を加へて小球圓形となしたるもの。

錠劑　揮發せざる固形藥物に乾きたる粉末狀の賦形藥を加へ研磨して之を壓搾し扁平小圓形と爲したるもの。

膠囊劑　散藥又は油狀の藥品を膠囊中に入れたるもの。

賦形藥とは丸藥錠劑をつくるに形狀をつくるために用ふる混合藥のことである。

丸藥・錠劑・膠囊劑の服用。

(1) 豫め口中を水又は微溫湯にて濕し、舌背におき水と共に一氣に嚥下すること。

(2) 口中にて嚙まざること。

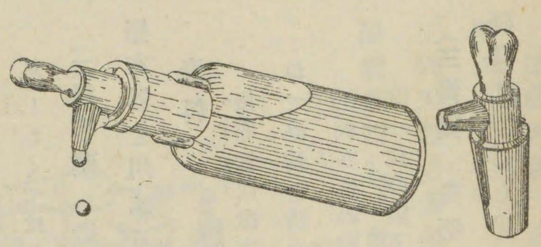
(四)滴劑　醫師に命ずる滴數を誤ることなく、水又は砂糖水に混じて服用すべし。滴瓶を用ふるを便なりとす。

資料

(1) 滴劑は劇毒藥なること多きにより滴數を誤らぬやう注意すること。

(2) 滴瓶を用ふるのが安全である。

(3) 多くは揮發性のものであるから、滴下後直に飲まなくてはならぬ。藥瓶は直に密封するを要する。



(五)油劑　最も多く用ひらるゝリチネ油の如きは服用し難きものにて嘔氣を催すこと多きを以て茶・砂糖水・サイダー等に浮べて飲むをよしとす。強く攪拌し鼻をつまみて其の儘一氣に飲み乾すも可なり。

外用藥も其の種類頗る多し。重なる種類及び用法を左に示さん。

(一)塗布藥　藥液を患部に塗布する方法にして例へば、皮膚に沃度丁幾を塗るが如し。藥液の適量を別器に移し、毛筆又は脫脂綿にて塗るべし。決して毛筆を藥瓶中に入るべからず。

資料

塗布　或る藥物を毛筆又は綿球に浸し、皮膚又は粘膜面に塗布するのである。近來毛筆は皮膚及び齒齦に限られ、多くは綿花を以てするのが普通である。毛筆は如何に

消毒するも其の都度新鮮なる綿花を用ふるに若かざる爲めである。所要液を小皿に分ち原液に毛筆を入れないといふのは、全液を汚さぬ爲めである。

塗擦　或る藥物を皮膚の表面から擦入し、皮膚の深部に透達作用せしめるものである。ガーゼ又は綿花を丸めて球形とし、適當の分量の藥物を塗擦すべきである。塗擦法を行ふ前、術者は手指を清潔に洗ひ、溫湯で適度に暖め、塗擦の終つた時は石鹼水で清洗しなくてはならぬ。

(二)撒布藥　撒布藥を毛筆又は脫脂綿に含ませ、指頭にて彈き患部に撒布す撒布器を用ふるを便なりとす。

資料

撒布法は、撒布藥を皮膚若くは粘膜にふりかけ其の部の炎性を收斂し、又は消毒し、兼ねて濕潤を防ぐ目的に用ひられる。

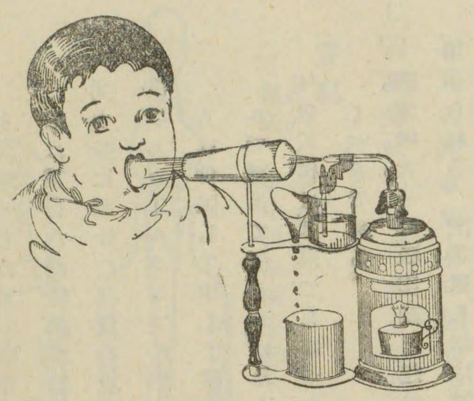
(1)表在性の微傷にはデルマトール、ビオフオルム等を撒布す。

(2)小兒の腋下股間等に濕疹の生ぜざるやう亞鉛華澱粉を撒布す。

(三)膏藥　膏藥には軟膏と硬膏とあり。軟膏はガーゼに塗りて患部に貼り硬膏は少しく暖め軟かにし紙に延ばして貼るべし。何れも其の上を繃帶又は絆創膏にて支ふべし。

(四)吸入藥　藥液を蒸氣と共に吸入するものにして、咽喉氣管支等の疾患に用ふ。

吸入器の蒸氣罐には熱湯を約三分の二位入るべし。湯の分量多き時は熱湯吹き出して危險なり。



吸入器

吸入に際しては、油紙又はタオル等を胸肩一面にあてゝ、寢具衣服等を濕さゞるやう注意すべし。

吸入藥の分量・回數等は醫師の指圖に從ふべし。

資料

吸入法　主として呼吸器の疾病に用ひられるもので藥液を細霧狀又は蒸氣形として鼻口より吸込ましめ、咳嗽・咯痰を容易ならしめ、呼吸器內の消毒消炎をはかる爲めに行ふものである。藥液には種々あるも通常は二%重曹食鹽水を用ふ。

(1)吸入を行ふには主として蒸氣吸入器を用ふ。アルコールの燃燒により、小釜の水を沸騰せしめ、其の強き噴出により同時に藥液を誘出飛散せしめるのである。藥液は重曹水、硼酸水、食鹽水が多く用ひられる。

(2)小釜に三分の二位の水を入れる。多きに過ぐると熱湯を噴出することがある。

(3)アルコールランプに點火し、完全に噴出するを見定めて後吸入すべきである。病人は仰臥して少しく横に向はしむるか、又は座位とし、床上、衣服等を油紙又はタオルで被ふて置かねばならぬ。吸入器と口との距離は約一尺とす。

(4)吸入後は、溫湯でしぼつた手拭で病人の顏、頸等を拭ひ、吸入器は使用後拭淨しておくべきである。

酸。素。吸。入。　呼吸困難を起せる時又は重病人に用ひられる。小兒などには殊に多く用ひられる。酸素吸入器は特別の裝置を有し、鼻口から吸入せしめるのである。

(五)含嗽藥　口中又は咽喉内に病ある時、食鹽水(一乃至二%)硼酸水(三%)、過酸化水素(三%)等の藥液にて患部を濕すものなり。藥液の適量を別器に移し、口内に含み頭を少しく仰向け、暫く口内に留めて含嗽すべし。

幼者などには含嗽せしめず、布片又は毛筆に藥液を浸して口内を拭ふことあり。

資料

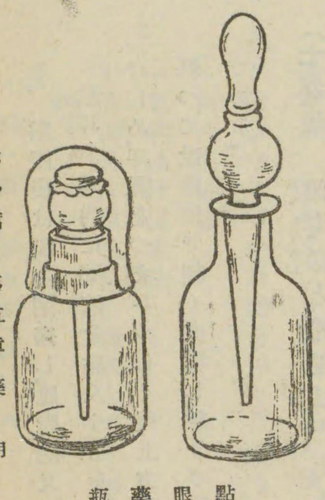
口腔、咽喉に疾患ある時、其の部を消毒又は洗滌する爲めに行ふ。

(六)點滴藥　眼又は耳に藥液を點滴す。點眼の際は病人を仰首又は仰臥せしめ、左手にて瞼を開き、右手に點眼瓶栓又は點眼管を持ち、其の護謨を壓して藥液を外眦に點ずべし。

點耳の際は病人の頭首を肩上に傾けしむるか、又は側臥せしめ、藥液を點滴し、約五分にして頭首を直位に復し、流出する藥液を拭ひ綿にて栓塞す。

資料

點。眼。　眼中に藥液を點入するをいふ。點眼瓶に附着せるピペットを使用する。ピペットは小硝子管の一端が狹尖となりたるもので、他端に護謨の小帽を附したるものである。護謨帽を壓して藥液中に挿入し、指を放てば藥液は管中に上昇する。拇指と示指で上下の眼瞼をひらき結膜囊をあらはし、ピペットの護謨帽を輕く壓すと、藥液は點滴となつて管の尖端から滴下す



點眼藥瓶

る。點眼後は眼を閉塞し、脱脂綿又はガーゼで外眥部から内眥部に向つて拭ひ去る。

點耳。　耳内に藥液を點入するをいふ。病人の頭部を側方に患耳を上にして首を傾けしめ、耳翼をつまみ、少しく後上方に牽引し、藥液を充せる點耳管から靜かに點入す。終つて脱脂綿で輕く充塡し、數分の後藥液を流出せしめ拭つた後綿栓を入れておくのである。

(七)罨法　溫罨法と冷罨法とあり。

溫罨法は、熱湯にてしぼりたる手拭又は湯煮せる蒟蒻を布に包みて局所を溫むるを普通とす。巴布とて大麥を搗き碎きたるものに熱湯を加へ、攪拌して軟塊と爲し、布片に包みたるものを患部に貼ることあり。

溫罨法の一種にプリスニッツ氏罨法なるものあり。木綿、フランネル等の布片を微溫湯に浸し、輕くしぼりて患部にあて、油紙を以て之を被ひ、水蒸氣の發散を防ぎ、其の上を綿又は乾布にて纏ひ、更に木綿を以て固定するものなり。頸部、胸部、腹部等の疾患に用ひて有效なり。

冷罨法には通常氷を用ふ。氷を適宜の大さに碎き布片にてつつみ、之をもみて角を潰し、氷嚢又は氷枕の半を充たし、空氣を出し口を密閉すべし。

氷嚢又は氷枕と皮膚との間にはタオル又は手拭を挾むべし。

冷水を以て罨法を行ふには、手拭又は布片を四重八重にたゝみ、冷水に浸し輕くしぼり、患部にあつべく、別に同樣の布片を冷水に浸しおき、二三分毎に取り換ふべし。

資料

罨法の種類
- 溫罨法
  - 乾性……湯婆、懷爐、溫石、燒鹽、砂囊
  - 濕性
    - 單純濕性溫罨法
    - プリスニッツ氏罨法
    - 巴布
- 冷罨法……冷水罨法、氷罨法

溫罨法　全身又は身體の一部を溫めて疼痛を減じ又は血行をよくして他の部の充血を誘導する等の目的を以て行ふものである。

(一)濕性溫罨法

一、單純濕性溫罨法

(1)溫湯又は溫暖なる藥液をガーゼ、タオル、フランネル等に浸し、輕く絞りて患部に貼す。

(2)濕布の上は油紙又は防水布等にて被覆す。
(3)二三十分毎に交換し、同一溫度をなるべく長く保たしむ。

二、プリスニッツ氏溫罨法

(1)ガーゼ、木綿等を溫湯又は藥液に浸し、水の滴下せざる程度に絞りて患部に貼し、其の上に油紙を被ひ、更に其の上を布片若くは繃帶で輕く固定するのである。
(2)本法の特長は、皮膚と油紙との間で絶えず水蒸氣が存在し、恰も患部は蒸氣浴を爲すが如き狀態となる。
(3)濕布を體溫で自然に溫むるためには、乾燥せざるやう二三時間毎に換へねばならぬ。

三、巴布　米粉、麥粉に水を注ぎて攪拌し、煮沸して粥狀となし、直に布片に包み、適度の大さとして患部に貼す。患部には豫め油類を塗りおくか、亞麻仁油紙を敷いておかねばならぬ。巴布を貼したる上は毛布又は布片で被覆し、度々交換し冷却せぬやうにしなくてはならぬ。一日數回二時間以内行ふべきである。

注意

(1)火傷を起さゞるやう熱度に注意すること。
(2)清潔に取扱ふこと。
(3)毎回新らしく製するをよしとするも、腐敗せざるものは再用するも差支ない。
(4)使用後は腐敗し易きにより室外に出すこと。
(5)蒟蒻を熱湯中に溫め巴布に代用することもある。

(二)乾性溫罨法

(1)一局部の痛みを治するに用ひ、或は全身に其の效を及ぼす爲めに用ふ。腹痛、關節炎、衰弱せる病人等に用ふ。
(2)懷爐、瓦、溫石、湯婆、熱砂、熱鹽等を患部に貼す。
(3)瓦、溫石等は火中で熱した後一且水中に投じ幾重にも布片にて包む。然らざれば火傷を起すおそれがある。湯婆は陶器製、ビール壜等に熱湯を八分目入れ、口には栓を紙か布か又は昆布で卷いて挿入し、熱湯の漏れ出でて患部に火傷を受けしむることなきやう注意しなくてはならぬ。

冷罨法

身體の或る部の炎症、充血、疼痛等を去り、或は熱性病者の熱度を低減する爲めに用ひらる。輕度のものは冷水を用ひ、强度を要するものには氷を用ふ。

(一)冷水罨法

(1)冷水をガーゼ又はタオルに浸し、輕く絞りて局部に貼し、頻々交換して局部を冷却

せしむ。冷水をゴム嚢・膀胱等に入れてもよい。

(2)夏季冷水を得難き時は、氷に鹽類又は醋を入れて用ふるがよい。

(二)氷罨法

(1)氷を氷嚢に入れ局部を冷却するに用ふ。

(2)嚢内に約半分胡桃大の氷を入れ、空氣を驅逐して口を緊括し、患部には布片を敷いて其の上におく。氷は布片で包み少しく揉んで角を去つておかねばならぬ。

(3)氷嚢の重壓及び滑脫を防ぐ爲め嚢に紐を附し、氷嚢吊天井等に吊らねばならぬ。

(4)氷罨法久しきに亘る時は局部に疼痛を感じ、時に凍傷を起すことがあるから注意しなくてはならぬ。

(八)灌腸法　滋養灌腸と催下灌腸とあり。滋養灌湯は飲食物を嚥下すること能はざる病人に行ふものにして、少量づゝ徐々に注入するを要し、催下灌腸はグリスリン・石鹼水等を用ふ。灌腸後はなるべく長く安臥せしめ、藥液を腸内に保たしむるを要す。

グリスリン座藥は器械を要せず危險なくして便利なり。

資料

灌腸　灌腸器により肛門から大腸内へ藥液又は其の他の液體を注入するをいふ。

目的による區別

(一)催下灌腸　腸内の糞便を排泄せしむる方法で、通常石鹼水・グリスリン水等を用ふ。

(1)一%〇石鹼水二百乃至三百瓦。

(2)グリスリン水　グリスリンを二倍に稀釋したるもの。二十乃至四十瓦。(小兒は三倍に稀釋したるもの五瓦乃至十瓦又は二十瓦)

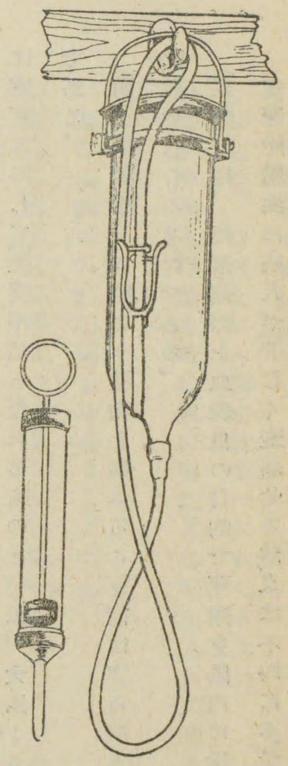
(二)止痢灌腸　下痢ある患者に收斂劑を用ひて便通を止むるものである。大腸のS字狀部以下の部分には効力があるが小腸カタルのための下痢には効力が少ない。一%の單仁水百瓦を用ふ。

(三)滋養灌腸　食道狹窄・胃疾其の他の疾患で飲食物を口腔より攝取し得ざるもの、又は重病人にして榮養不足となれるものに行ふ。大腸より滋養分を吸收せしむるものである。

(四)藥液灌腸　口腔より藥物を與ふること能はざる病人に肛門より與へ、大腸をして吸收せしむるものである。

(五)其の他　興奮・鎭靜・止血・殺虫の目的で藥劑を腸内に送入することがある。

食鹽注腸法は病人が著しく衰弱せる時、又は不時に多量の外出血などのあつた時、補



灌腸器

血として多量の食鹽水を腸内に注入する方法で、大なる効果があるものである。

灌腸器　硝子製注入器ゴム球、イルリガートル等を用ふる。前二者は少量の液を注入するに用ひ、イルリガートルは大量の液を注入するに用ふ。

灌腸器の使用法

(1)床上にゴム布を敷きたる後、病人は仰臥又は側臥せしめる。

(2)肛門にはワゼリンを塗り、嘴管にもワゼリンを塗つた後に肛門内に挿入すること約一寸。

(3)イルリガートルは高さは三尺位の所に保持し、液を流下せしめる。

(4)灌腸を終つた時は器を靜に抜き去り、病人を安臥せしめ液をなるべく長く腸内に留まらしめる。約十五分間。脫脂綿で肛門部を壓迫しておかねばならぬ。

(九)芥子泥　芥子(からし)に溫湯を加へ之を搔きまぜて泥狀と爲し、之を亞麻布又は美濃紙の上にのばし、更に其の上を紙又は布にて被ひ患部に貼るなり。皮膚赤くなり、疼痛を覺ゆる時は、之を除き、濕布にて拭ふべし。芥子の力を弱むるにはメリケン粉を加ふ。

資料

芥子泥　新鮮なる芥子末を器に入れ微溫湯を徐々に注ぎつゝ攪拌し、泥狀となつたものをリント又は布片に約一分の厚さに塗つて貼用するのである。

(1)芥子泥は誘導又は刺戟亢奮の目的に用ひられ、卒倒、假死又は疼痛ある病人殊に小兒肺炎に應用せられる。

(2)貼用後十分乃至十五分にして皮膚發赤し、疼痛を訴ふるやうになれば剝離して微溫湯に浸した布で拭淨しなくてはならぬ。

(3)剝離後なほ疼痛を訴ふる時は、ワゼリン、グリスリン等を塗り、又水泡を生じた時は微溫湯で洗ひ、硼酸末又は亞鉛華澱粉を撒布すべきである。

第六章　應急手當

不意に疾病を發し、又創傷を受けたる時は、徒に狼狽して何等爲す所なく、治

療上の障害を來すことなきやう、平素より應急手當法を心得おくを要す。

資料

救急法守則

(1)落付て手早く行ふこと。

(2)方法と順序とを誤らざること。

(3)慈愛誠實を旨とし、言語擧動を愼むこと。

(4)小事をも忽にせず大事にも慌てざること。

(5)清潔と消毒とに注意すること。(伊藤季雄氏 Die erste Hilfe)

(一)打撲　直に冷罨法を施し、充血腫起を防ぐべし。骨の折れたる時は患部を動かさぬやうにし、直に醫師を招くべし。

資料

症狀

(1)皮膚は破れず皮下に出血し膨隆す。暗紫色を呈し、疼痛を感ずる。

(2)頭部、四肢の如く骨が外表に近い所に受けることが多い。

(3)腹部の打撲は內出血內臟震盪を起し易く危險である。

處置

(1)始めは溫罨法後には冷罨法を行ふこと。

(2)傷が大であるとか、又部位によりては醫師を招くが安全である。

(二)創傷　創傷したる時には一は創傷部より血液の漏出するを防ぎ、一は創傷部に病毒の侵入するを防がざるべからず。

血液の漏出止まざる時は、危險なるを以て速に醫師を迎ふべきも、其の出血を止むるには直に創口より心臟に近き部分を緊縛し、消毒液に浸したるガーゼを以て創口を壓迫し、冷水又は氷にて冷罨法を施すべし。

止血後は消毒ガーゼを當て油紙を被ひ、脫脂綿をあてゝ繃帶すべし。

資料

種類	原因	症狀	手當
切創	銳利なる器物(刀劍、小刀、硝子破片)によりて起る。	創口は哆開し、創緣銳利にして、出血多く、疼痛强し。	(1)止血法を施して繃帶す。(2)創口大なる時は縫合を要す。
割創	(1)稍銳き器物(斧、鉞)。(2)骨の體表に近き所に鈍器が强く當りたるとき。	創緣鈍く創口哆開し、疼痛强し。	切創に同じ。

刺創	尖りたる物體（針・錐・鎗・劍・尖りたる竹木）。	創口は小なるも深し。出血は少き也異物・細菌を深部に送り込みて危險多し。創は化膿し易く又破傷風を起し易きにより消毒を嚴にし、必ず醫療を受くべし。	創口を清潔にし、異物を檢し、容易に除去し得るものは除くべし。		
射創	銃丸による。（砲彈は強ければ組織全部を破壞し、弱ければ挫創を生ず）。	盲管銃創は射入口のみにして丸は體内に止り、貫通銃創は射入口と射出口とを有す。初めは出血少く疼痛輕きこと多きも後に大出血を來し、疼痛を增すこと多し。	(1)創口を清潔にし繃帶を施す。 (2)強て銃丸を取出すの要なし。		
挫創	鈍體が烈しく衝突するによりて起る。（棒にて打ちたるとき・重き物體が落下したるとき・砲彈）	創緣不規則にして汚れ、出血割合に少く、疼痛は初め輕く、後强し。	(1)創面を清潔にし繃帶を施す。 (2)骨折を兼ぬること多し。副木繃帶を施し、醫師を招くべし。		
裂創	組織の一部が過激に牽引せらるゝことによりて起る。	出血少きも、激痛あり。	(1)縫合を要すること多し。 (2)防腐繃帶をなし醫師を招くべし。		
擦過創（皮膚のみの創なり）。	(1)摩擦。 (2)銃丸。	(1)疼痛輕く、毛細管出血なし。 (2)連續したる摩擦により、上皮は皮下組織と離れ、水泡をつくることあり。	(1)防腐繃帶。 (2)水泡は第二度の火傷に同じ。		

（井口乘海氏看護法教科書による）

(三)火傷　熱湯又は火熱の爲めに火傷したる時は患部を空氣に觸れしめず胡麻油・椿油又はオレフ油等を塗るべし。硼酸軟膏・ワセリン等を塗るも可なり。

水泡を生じたる時は消毒せる針を以て水泡を刺し、水を壓し出したる後、硼酸軟膏を消毒布に塗りたるものを貼りおくべし。決して皮膚を剝ぐべからず。

衣服に火のつきたる時は速に床上又は地上に倒し、毛布・蒲團等にて之を被ひ、火を消し、然る後多量の水を注ぐべし。

衣服を脫せしむるには、先づ健康部を脫せしめ、患部を後にし、之を着せしむるには之と反對にすべし。

資料

火傷　火熱・熱湯・熱蒸氣・熱固体たるを問はず、すべて熱によつて來る外傷をいふ。症狀により左の三つに區別する。

第一度火傷　皮膚の單に發赤充血し、疼痛灼熱ありて輕く腫脹せるもの。

第二度火傷　皮膚處々に剝脫して水泡を作り中に漿液を含むもの。（水疱性火傷）。

第三度火傷　皮膚一部全く燒盡し、灰白色・褐色・黃色又は黑色炭化樣の痂皮をつくり感覺を失ひ、或は其の部の潰爛せるもの。

火傷は度の進みたる程危險なるも、生命上には侵された面積の方が大なる關係を有するのである。即ち身体の三分の二以上侵された時は生命に關する危險がある。

救急處置

(1)火中の人を救ふには、衣服を着けたる儘全身に水を浴び、且つ頭部にも厚い布を水に浸して被り進入すること。

(2)衣服に火の燃えつゝある人を救ふには之を地上に倒し、蒲團又は毛布の類で被ふこと。

(3)衣服の火を消し止めた時は、水を灌ぎ冷却せしめた後脫衣せしむること。脫衣困難なる時は鋏を以て剪みとること。

(4)石油に火のついた時は水を注がぬこと。

火傷の手當

第一度火傷　油類の塗布及び冷濕布を行ひ、患部の疼痛を緩解すること。

第二度火傷　水泡を消毒針にて破り液を漏出せしめ、冷濕布を行ふこと。表皮のはげたときは硼酸軟膏を貼布すること。

第三度火傷　防腐繃帶を施し、速に醫師を迎ふること。

すべて火傷者は甚だしく渴を訴ふるものであるから、氷片又は清凉飲料を與ふるがよい。衰弱せる者には亢奮劑を與ふべきである。

凍傷　寒冷刺戟による身體組織の外傷をいふ。凍傷は心臟を遠ざかる部分即ち指趾・手・足・鼻尖・耳翼等に起る。

第一度の凍傷　單に皮膚の暗赤色となり、腫脹するもの。(紅斑性凍傷)

第二度の凍傷　皮膚暗赤色に兼ねて少しく青色を帶び局部に水疱を帶び局部に水疱を生ぜるもの。水疱中には漿液又は血液を混ずる液を含んで居る。(水疱性凍傷)。

第三度の凍傷　局部の血行全く止まり、暗赤色を呈し、水疱及び痂皮を以て覆はれ、一部の組織は蒼白となり、知覺を失ひ、數日にして黑變し、其の部の壞死するもの。(腐痂性凍傷)。

救急處置　初期には雪塊を以て摩擦し、快溫を覺ゆるに至れば十倍の樟腦軟膏・コロヂウム・イヒチオール等を塗布し、或はカンフル丁幾・ヨードフォルム・コロデウムを塗布するがよい。

(四)咬螫傷(かうせきしやう)　毒蟲に螫(さ)されたる時は手早く創口より毒を吸出すか又は搾出し、薄きアンモニア水にて洗ひ繃帶を施すべし。毒性劇しき毒蛇に咬(か)まれたる時は、患部の上下の血行を止むる程に紐にて緊縛(きんばく)し、毒液のひろがるを防ぎ

醫師を招きて適當の手當を受くべし。狂犬に咬まれたる時は速に醫師の手當を受くべし。

資料

昆虫刺螫　蚊・蚤・南京虫・虱・蜂等の刺傷にかゝるもの。一種の毒物が體内に注入せられ、之がために中毒するのである。皮膚發赤・腫脹・苦痒・灼熱を兼ねたる炎症を起す。アンモニアを塗擦すること。

蛇咬傷　ハブの如き毒蛇の咬傷により、甚だしき局處の疼痛炎症を起し、重症なる全身症狀を來し、死ぬることがある。被咬部四肢なる時は上部を緊縛し、中央に向ふ血行及び淋巴流を杜絶し、同時に口又は吸引器を以て創口から毒物を吸引すること。

鼠咬傷　家鼠の咬傷で鼠毒症を起すことがある。咬まれてから若干日を經て發熱其の他種々なる全身症狀皮膚の紫赤色斑等を呈し、浮腫を來すことがある。咬まれた時は速に醫師の手當を受くべきである。

狂犬の咬傷　狂犬に咬まれた時は、狂犬病となる。嚥下困難・呼吸器痙攣・躁狂狀發作等を來す。病毒は病犬の唾液中に在り、人體に侵入するもので潛伏期は十八日乃至六十日である。狂犬に咬まれた時は速に醫師につき豫防注射受くべきである。普通の犬に咬まれた時は五百倍昇汞水又は二十倍の石炭酸水で嚴重に消毒しなくてはならぬ。

血清療法　抗毒素・抗菌素等を含める血清卽ち免疫血清(完成免疫體)を注射して免疫狀態に達せしめ、疾病を治癒する方法である。

狂犬の咬傷と其の手當　狂犬病は恐水病とも稱せられるもので、狂犬其の他罹患動物(犬の外に狼、或は他の溫順な家畜卽ち牛・馬・綿羊・山羊・猫・狐・鹿・兎等でも狂犬病に罹つて居れば危險である)の咬傷によつて其の病毒が傳搬されて發病するものである。尤も犬に咬まれた人は悉く狂犬病に罹るとは限らないが其の犬なり狼なりが狂犬病毒を保有して居ると咬まれた傷口から病毒が入り込んで比較的長い潛伏期(一ヶ月半―二ヶ月)を經て危險なる症狀を起して來るものである。咬傷の部位から云へば顏とか頭などに受けた深い咬傷が最も危險(約八〇%の死亡率)である。手とか上體の咬傷は之に次ぎ、下肢の輕い咬傷は危險が少い。一般に厚い衣類の上から咬まれた場合には其の危險が甚だ少いと云はれて居る。

犬に咬まれて狂犬病毒を受けるときは一旦其の傷口は治癒つてしまつてもかなり長い潛伏期を經て後に種々なる危險症狀を起して來る。其れは初めに發揚狀態となるが咽頭及び呼吸筋が發作性に痙攣を起すもので、其の發作は水其の他の液體を飲まんとすると誘發されて嚥下困難・呼吸困難・チアノーゼ等を現はし子供は非常に苦しむ

ものである。かう云ふ發作は次第に頻繁となり水などを飲まなくとも之を見るとか其の話を聞くと前の様な發作を起して來る。(卽ち恐水症)此の發揚が過ると麻痺の狀態に移つて身體の一部とか半身又は全身の麻痺を起して斃れてしまふものである。

狂犬若くは疑はしい犬に咬まれた場合には速に手近の醫師にかけつけて傷口の手當をしてもらふことが必要である。傷口に附着した病毒を撲滅するには負傷後の經過時間が短かい程有利であるから急速に事を運ばなければならぬ。尙ほ一面には其の傷を受けた犬を警察官吏に引渡して狂犬であるか否かを鑑定してもらうが宜しい。

狂犬病は不治の病であるけれども難有い事には之を豫防し得るものである。狂犬の咬傷を受けた後發病する迄には相當の長い潛伏期がある。其の長い潛伏期を利用して其の間に種々なる處置を施して適度に減弱された狂犬病毒(狂犬の腦を取り之を兎の頭蓋內に注射して發病させ其の病毒を幾つかの兎に注射移植して最後の兎の脊髓を取る)を皮下に注射接種して免疫力を得させて狂犬病を未發に防ぐのである。此の狂病豫防接種は毎日一回宛注射して約十八日を要するものであるが、途中で中絕してはならぬ。何故かと云ふのに注射を完結しなければ其の免疫の發生が不充分で狂犬病の豫防が不確實となるからである。(長尾醫學博士)

(五)出血　出血には左の三種あり。

(一)衄血　靜かに仰臥せしめ、頭を少しく高くし、鼻翼の上部を暫時兩指にて摘む時は止血することを得。酢又は明礬を加へたる冷水にて鼻腔を洗ひ、前額・鼻上等に冷罨法を施し、脫脂綿をつめ壓迫すべし。此の際嚏(くさめ)を爲し、暴に鼻汁をかむべからず。

(二)咯血　咯血は肺臟・氣管支の出血にして、其の色鮮紅色を呈し、泡沫を交へ咳嗽に伴ひて咯出せらる。此の場合には直に横臥せしめ、聲を發せしめず、少許の水に食鹽を加へて之を飲ましめ、次に冷水を與ふべし。胸部には冷水又は氷を以て冷罨法を施すべし。

(三)吐血　胃中の出血にして其の色暗褐色又は暗赤色を呈し、凝固して絮狀を爲す。此の場合には成るべく安靜に就褥せしめ、水又は氷を少しづつ飲用せしめ、且心窩に冷罨法を施すべし。

資料

衄血　鼻の出血である。

(二)原因　頭部顏面鼻粘膜等の充血による。常習なるものもある。急性傳染病心臟

病・外傷等の場合にも來る。女子は月經の代償として來ることがある。

(二)處置

(1)頭部を高くし、衣服を寛解して仰臥せしむ。或は上半身を高くせしむること。

(2)額及び鼻根部に氷嚢を當て或は冷罨法を行ふこと。

(3)拇指と示指にて鼻を摘み壓迫すること。

(4)以上の方法にて止血せぬ、時は綿花又はガーゼを細長き形とし鼻孔に挿入すること。

(5)頭部を前屈し、鼻をかみ、洗滌する等のことは不可である。

喀血。

(一)原因　肺疾患、劇しき咳嗽等により咳と共に出血する。其の色は鮮紅色で流動し泡が交つて居る。

(二)處置

(1)衣服の緊縛をゆるめ、少しく上身を高くして臥せしめ、談話運動を禁ずること。

(2)胸に疼痛を訴ふれば其の部に冷罨法を施し、一茶匙位の食鹽を水に溶かして飲用せしむること。

(3)患者は血を見て驚き、亢奮するにより救護者は患者の精神を安靜ならしむるやうつとむること。

吐血。

(一)原因　胃・食道から出血する。其の色は暗黑色又は黑褐色で泡がなく、多くは凝結して居る。

(二)處置

(1)衣服の緊縛を寛め、少しく上身を高くして褥中に臥せしむること。

(2)心窩部(胃部)に冷罨法を施し、飲食を禁ずること。強く渴する時は冷水又は氷片を少しづつ與へ吐き出さしむること。嚥下させてはいけない。

(3)喀血・吐血の際は醫師に急報し、喀出物吐出物は醫師の檢査を受くること。

(喀血)

(1)出血部位　肺臟より出づ。

(2)出血時　咳嗽によつて來る。

(3)既往症　肺臟・心臟の疾患あり。

(4)出血前　胸內苦悶感あり。

(5)色　鮮紅色。凝固性を有せず。

(吐血)

胃より出づ。

嘔吐によつて來る。

胃・肝臟の疾患あり。

嘔氣及び上腹部の壓迫感あり。

暗赤色時に黑色凝固して團塊を爲す。

(6)混在物　空氣を交へ泡沫あり。往々粘液、膿汁を混ず。往々食物の殘片あり。

(7)持續期間　一定時持續して漸次消失す。突然に來り持續短し。

(六)溺沒　頭部を低くし、俯臥せしめ水を吐かせ、次で仰臥せしめて衣服を解き、かみより羽毛等にて咽喉、鼻中をかき、濕布を以て胸部を打ち、なほ回復せざる時は人工呼吸法を施すべし。

資料

溺沒。　溺沒は一種の窒息死で、水或は泥の氣道中に入りて空氣の流入を妨げ、酸素の供給を得ざるより發するものである。溺沒者に對する救急處置は左の如し。

(1)溺沒者に對しては速に濡れたる衣服を脱がせること。

(2)指に布片を纏ひ深く口中に入れ、泥土其の他の汚物を拭ふこと。

(3)伏臥の位置とし、溺者の腹を救助者の膝の上に當てるか、衣服を卷き丸めたるもの又は枕樣のものを腹部にあて此の部を高く、胸を低くし、一方の手掌で溺者の前額部を支へ頸部をそりかへらしむること。かくすれば氣道及び胃中の液體は自然口の方へ流出する。

(4)更に胸部に一定の壓迫を加へ肺臓内の液體を出すこと。

人工呼吸法。

(一)目的　人工呼吸法は一時呼吸が廢絶したときに、人工的に肺臓に空氣を出入せしめて生活作用を持續せしめおき、其の間に身體器官の働を恢復せしめ、蘇生せしむる方法である。

(二)場所　新鮮なる空氣中に於て行ふがよい。戸外ならば木蔭の涼しい所、室内ならば換氣良好なる室を選ぶべきである。

(三)準備

(1)患者を仰臥位とし、衣服の緊縛を解き、特に上半身は裸出せしめ、背部に低い枕を置くこと。

(2)舌は布片に包み口外に引き出し、助手をして保持せしむるか、其の布片の端を左右に分ち頤部より項部に廻はして結んでおくかどちらかしなくてはならぬ。

(4)溺死したるものには水を吐かしめ、縊死したるものには紐を解く等は勿論のことである。

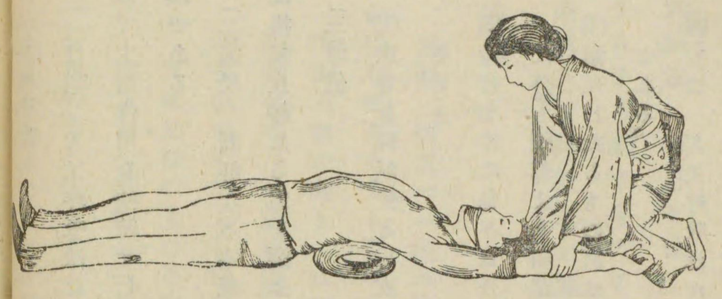
(四)方法　人工呼吸法にはジルヴェステル氏法と稱し、術者は患者の手を利用して胸部を壓する方法と、ホワード氏法と稱し、術者の手を以て直接患者の胸部を壓する方法とがある。

(一)ジルヴェステル氏法

(1)術者一人にて行ふ法　術者は患者の頭邊に坐し、腕を伸ばして患者の前膊の上部を握り、次に靜に患者の肘を引上げ、上膊が頭部の兩側に沿ひて擧上したる如くにして止り、暫時休止す。之れで胸廓は擴げられ吸息を行ふ。次に患者の手を曲げ、上膊を以て胸廓を壓迫する如く行はしむ。之れにより呼氣を起す。斯の如き働作を反覆するのである。

(2)術者二人にて行ふ法　術者は一人宛患者の兩側に坐し、各一方の臂を握り、一二三の合圖によりて前と同樣の働作を行ふのである。

(二)ホワード氏法　術者は患者の大腿を跨ぎて跪坐し、自己の兩手掌を、患者の胸部に當てゝ徐々に壓すのである。此の際術者は臂を自己の胸肋部に支ふる如くし、且つ身體を俯屈し、體重を以て壓迫を助ける。患者は此の時呼氣を行ふ。



人工呼吸法

次に術者は手を放ち、身體を起す。此の際吸氣を行ふ。以上の操作を反覆するのである。

(五)注意

(1)人工呼吸法は術者が疲勞し易いものであるから數人交替して行ふこと。

(2)人工呼吸法を行ひつゝある間は一方下肢を摩擦して血行を助くること。

(3)幼兒の場合には暴に過ぎないこと。時々肋骨骨折をなすことがあるからである。

(4)人工呼吸法は急速に過ぎてはならない。成るべく自然の呼吸數と一致せしむべきこと。

(5)持續時間は死の確徵の表はるゝ迄は數時間に亘り之を行ふべきこと。

(井口乘海氏看護學教科書による)

(七)人事不省　甚だしき出血、突然の激痛、驚愕、腦貧血、腦充血等より起る。顏色蒼白、精神朦朧となり遂に卒倒するを常とす。手當の方法は、病人をして靜かに平臥せしめ、且つ其の衣服を緩むべし。其の顏色の蒼白に變じたるものは、頭首を低くし、特に室內の空氣を新鮮ならしむべし。

暫時にして舊に復するものなれども、症狀によりては醫師を招くべし。

腦充血は顔色紅色となり、眼光鋭く鼻息あらし。頭を高くし氷を以て冷罨法を施し、脚湯を與へ、速に醫師を招くべし。

極暑の時、激しく日光に照されたる爲め人事不省に陷ることあり。かゝる場合には凉しき所に頭を高くして臥せしめ、衣服を脱せしめ、多量に冷水を與ふべし。

資料

人事不省　過激の勞働、烈しき精神感動、外傷、打撲、飢餓、腦充血、腦貧血、虚脱、又は腸チフス、發疹チフス、疫痢等の經過中精神機能の一時廢絶することをいふ。卒倒とは起立又は跪座せるものが人事不省に陷りて倒るゝことをいふのである。

(一)人事不省の症狀

(1)頭痛、眩暈を感じ、精神朦朧となり、聽力衰へ、惡心、嘔吐あり。瞳孔散大、呼吸淺表、脈搏細小となる。

(2)更に進む時は、顔面蒼白、四肢厥冷、冷汗を流し、脈搏細小頻數となり、意識全く消失す。

(3)遂に假死に陷る。

(二)人事不省の處置

(1)適當なる位置に臥せしめ、衣服の緊縛を解くこと。

(2)顔面に冷水を吹きかけ、頭部心臟部に冷罨法を施すこと。

(3)エーテルを嗅かしむること。

(4)呼吸廢絶したる時は人工呼吸法を行ふこと。

(5)呼吸するに至れる場合には左の處置をとること。

(イ)赤酒又は溫かき茶等を與ふること。

(ロ)身體を心臟の方に向つて摩擦し、湯婆等にて體溫の回復を促がすこと。

(ハ)患者の催眠を防ぐ爲め、嗅藥、紙捻子、羽毛等にて刺戟すること。

腦貧血　大出血、烈しき精神感動、溫度の激變、急性下痢、過激なる運動、睡眠不足、飢餓等より誘發せられる。

顔面蒼白色となり、冷汗を流し、生あくびを發し、惡心、嘔吐を催し、眩暈、視力乏失の前兆あり、遂に知覺を失ひ卒倒す。瞳孔散大、呼吸緩徐、淺表、脈搏頻數細小となる。

腦貧血の處置法は左の如くである。

(1)換氣良好にして溫暖に過ぎざる室に仰臥せしめ、頭部を低くすること。

(2)衣服の緊縛を解き呼吸を容易ならしむること。

(3)呼吸廢絶したる時は人工呼吸法を行ふこと。

(4)患者恢復せば、一定時間安臥せしめ精神を安靜ならしむること。

(5)赤酒、日本酒等興奮性飲料を與ふることもよい。

腦充血　多血質の人にして精神興奮したるとき、烈しき勞働、急性アルコール中毒等より起る。顏面潮紅、結膜充血し、顳顬動脈努張す。患者は頭痛、眩暈、嘔吐を訴へ、不眠、耳鳴を覺え、眼前閃輝を感ず。重症に在りては痙攣を發し、時に失神す。

腦充血の處置法は左の如くである。

(1)換氣良好なる室に臥せしめ頭部を高くすること。

(2)衣服の緊縛を解き、呼吸を容易ならしむること。

(3)頭部に冷罨法を施し、足部をあたゝむること。

(4)呼吸廢絶したる時は人工呼吸法を行ふこと。

(5)恢復せば安靜ならしむること。

(八)中毒　毒物には麻醉性のものと刺戟性のものとあり。阿片(あへん)、魚毒等の麻醉性の中毒にかゝりたる時は身體の麻痺、精神の昏瞑等を發するを以て其の徵候とす。

硫酸、苛性カリ、苛性ソーダ等の刺戟性の中毒にかゝりたる時は、口腔、腸胃に激痛を感じ、或は吐血することあり。此等の治療は醫師に托すべく、毒物を嚥下したることを知りたる時は速に之を吐かしむべし。指を咽頭に挿入する時は、大抵嘔吐を催すものなり。

又非常に多量の飲料を與へる時は、吐氣を催し、同時に毒氣を稀薄ならしむるものなり。

資料

中毒。藥品、食物、瓦斯等の化學的作用に、より種々なる病狀を發し、時には死に至ることがある。

(一)症狀

(1)卒然烈しい嘔吐、胃痛、下痢を發し、時に吐血、下血を見る。腐蝕性毒物にありては口內、咽頭、食道、胃等を腐蝕し、疼痛が甚だしい。

(2)脈搏細數、不整、結代を呈する。

(3)頭痛、眩暈、痙攣等を起し、昏睡、人事不省に陷る。

(4)呼吸が困難となる。

(5)皮膚は發疹、紅斑を呈し、時に搔痒を覺ゆ。

(6)其の他、體溫下降し、虛脫に陷り、死に至ることがある。

(二)處置

一、體內に這入つた毒物を排除すること。

(1)咽頭部に手指、羽毛等を挿入し嘔吐せしむ。

(2)胃洗滌を行ひ、灌腸をなし、又は下劑を用ふ。

二、毒物を中和して無害とすること。

(1)硫酸、硝酸、石炭酸等の酸類の中毒には、石灰水、白堊水、重曹水、石鹼水等のアルカリ劑を與ふ。

(2)苛性カリ等のアルカリ中毒には稀鹽酸、稀醋酸、又は酸味の果汁を用ふ。

(3)砒素、昇汞、重クロム酸加里の中毒には卵白、牛乳、石灰等を用ふ。

(4)亞砒酸には砒素解毒劑、硝酸銀には食鹽水を用ふ。

三、患者の苦惱を緩和すること。

(1)疼痛あらば冷罨法を行ふ。

(2)衰弱の兆あらば亢奮劑を與ふ。

(3)呼吸作用停止せんとする時は人工呼吸法を行ふ。

(九)眼、耳、鼻、食道の異物

(一)眼內異物

(1)塵埃、炭末、煤煙、木片等の這入つた時は眼瞼を摩擦せず、徐に瞬動(まばたき)をする時は涙液によつて內眼眥の方へ流れ出て來る。

(2)出ない時は、眼瞼を翻轉し、脫脂綿又はガーゼを濕して靜に拭ひ去ること。

(3)石灰、酸類及び强き藥品の這入つたときは百倍位の食鹽水で十分に洗滌すること。

(二)食道內異物　咽頭又は喉頭に食物其の他誤嚥物が閉塞せるをいふ。

(1)手指でかき出すこと。

(2)口蓋、咽頭を指頭、羽毛、毛筆等を以て刺戟し、嘔吐、咳嗽を誘發せしむること。

(3)患者を俯臥せしめ、心窩に枕を當て、手掌を以て背部を敲打すること。

(4)魚骨等尖端を有するものなる時は、パンの一片、飯塊等を咀嚼せずして嚥下せしむること。

(三)耳腔內異物

(1)蚊、虻、蜂等は暗室內にて其の耳の前に燭光を照すこと。効なくば油、酒精を入れて殺したる後微溫湯で洗滌すること。冷水を用ふる時は、眩暈を發する恐れがある。

(2)豆類は耳を机につけて一寸頭を叩き試みること。酒精を入れ容積を縮小せしむること。水を入るれば膨脹す。

(3)鉛丸等は少しく油を入れ、其の方の耳を下にして臥せしむること。

摘出困難なるものは醫師に托すべきである。

第七章　日常罹り易き疾病の手當

日常罹り易き疾病には、口腔カタル・胃カタル・腸カタル等消化器系統に屬するものと、鼻カタル・咽喉カタル・氣管支カタル・流行性感冒等の呼吸系統に關するものとあり。其の手當を怠るべからず。

資料

消化器系統の疾病……口腔カタル・胃カタル・腸カタル。
消化器の攝生。

(1)精神を爽快にし、消化液の分泌をよくし、口内で十分に咀嚼すること。
(2)食事の際は勿論、其の前後にもなるべく湯茶を用ひず、消化液の作用を十分ならしむること。
(3)食事の時間を定め、食物の分量を適度にし、消化器に一定の休養を與へること。
諺に曰く、腹八合醫者いらず。腹八合病なし。大食短命。
(4)食事の前後は精神を安靜にし、消化を妨げざるやうにすること。
(5)齒の攝生につとむること。

(一)口腔カタル　口腔粘膜にカタルを生ずるものにして、多くは消化器の影響より來る。蜂蜜をカタル部に塗布するか、五十倍の硼酸水又は之に十分の一のグリスリンを加へたる液にて含嗽せしむべし。流動食を可とす。

(二)胃カタル　急性と慢性とあり。急性胃カタルは所謂胃痙攣にして、胃に激痛を起し、胸部に苦悶を感じ、嘔吐を催す。多くは食物の不攝生より來るも食後の過度の勞働より起ることもあり。

病の發生したる後は衣帶を緩め、胃部を熱湯に浸したる手拭又は巴布にて溫め、或は芥子泥を貼り、飢餓療法を行ふべし。發作止みたる後も、薄き葛湯・お湯等の外飲食を禁じ、安臥せしむべし。

慢性胃カタルは、食物咀嚼の不良・食事時刻の不定・飲酒・過度の勉强及び心勞運動不足等より起る。なるべく消化よき食物を選び、飲料を多く用ひず、食後消化劑を服用し、適度の運動を爲すべし。

資料

胃カタル。　胃の粘膜の炎症である。暴飲・過食冷熱度に過ぎた飲食物の攝取・寢冷等か

ら起る。食欲不振・嘔吐・胃病等を起すものである。

(三)腸カタル　急性と慢性とあり。急性腸カタルは飲食物の不攝生・不良飲食物等より來る。食欲減退・腹部雷鳴し、水瀉的下痢を爲し、時には嘔吐を催し甚だしきに至りては貧血虚脱に陷るべし。ブリスニッツ氏罨法を施し、芥子泥を貼り、又は飢餓療法を行ふべし。

慢性腸カタルは過勞の結果又は急性腸カタルの後に起るものにして、屢〻下痢を爲すものなり。腹部を溫め、消化し易き食物を選びて食すべし。

資料

呼吸器系統の疾病……鼻カタル・喉頭カタル・氣管支カタル・流行性感冒。

呼吸器の攝生

(1)不潔なる空氣を呼吸せず、新鮮なる空氣を呼吸すること。

(2)室内の空氣は換氣につとめ、乾燥したる時は、水蒸氣の發生をはかること。

(3)鼻から空氣を吸ふこと。急に寒冷なる空氣を吸はぬやうにすること。

(4)常に姿勢を正しくし、呼吸運動がよく行はれるやうにすること。

(5)衣服の着用に留意し、胸部を壓迫せぬやうにつとむること。

(四)鼻カタル・喉頭カタル　頭痛を覺え水鼻の出づるものは鼻カタルにして咳嗽を發し、咽喉の痛みを感ずるに喉頭カタルなり。

なるべく身體を冷さぬやうにし、咽喉の痛みには濕布繃帶を爲すべし。含嗽劑を用ひて含嗽すべし。

(五)氣管支カタル　發熱・咳嗽・頭痛を起し、時としては、氣管支炎・肺炎に變ずることあり。吸入を行ひ、胸・背部にかけて濕布を施すべし。就寢の際發汗劑を服用し、發汗せしむるを可とす。

資料

氣管支カタル　直接の原因は、塵埃又は惡い瓦斯等を吸入することから起るが、榮養不良や肺結核の素因あるもの、及び感冒が誘因となるものである。チフス・インフルエンザ・麻疹・天然痘・心臟・肺臟等の病氣からも續發する。

(六)流行性感冒　傳染性の感冒にして、接觸又は空氣中の細菌が呼吸器中に侵入するより起る。多くは、喉頭カタル・氣管支カタル・肺炎等を起し、心臟に異狀を呈し、重症に陷ることあり。食物は流動食とし安臥溫保するを要す。

資料

(一)原因　病原菌はフワイフェル氏流行性感冒菌で病人の咳等により吐き出され、鼻口等から入つて傳染するのである。

(二)症狀　惡寒・戰慄により體溫上昇し、三十九度乃至四十一度に昇り、二三日乃至六七日にして下降する。

(1)呼吸器系　鼻腔・咽頭・喉頭のカタルを生じ、殊に扁桃腺の腫脹を來し、咳嗽・咯痰・咽頭痛等あり。時に毛細氣管支炎・肺炎・肋膜炎を起す。(カタル性インフルエンザ)。

(2)神經系　病の始めから頭痛・腰痛・四肢痛あり、時に譫語(うはごと)を發し、痙攣を起し、人事不省となることがある。(神經性インフルエンザ)。

(3)消化器系　食思不振・舌には苔を蒙り、時に嘔吐・腹痛・下痢を來す。(胃腸性インフルエンザ)。

(三)經　過　有熱期は一週間以內であるが、全く恢復するには比較的長くかゝる。

(四)併發症　氣管支カタル・肺炎・肋膜炎・心臟麻痺を起し、肺結核を貽すことがある。

第八章　傳染病及び豫防消毒

第一節　傳染病の種類

傳染病とは、病原體が人體內に侵入し、發育繁殖して、其の結果起り來る疾病にして人より人に傳播蔓延するものなり。

資料

傳染病　傳染病とは、其の病原となるべき生物即ち病毒が人體內に侵入し、發育し、其の結果病的症狀を起すものをいふ。其の病原體は、患者の身體から出でて更に他の健康者を侵すものである。

傳染病には左の四つの條件が具備せられて始めて成立するもので、其の一を欠くときは傳染は成立するものではない。(病原體・病原體保有物並に經路侵入門・素因)。

(一)病原體　毒性の强いもの程傳染力が大である。又其の數の多い程傳染力は大である。

(二)病原體保含物並に人體に來るの經路

(1)病者の體內　病毒が體外に出でると傳染病の危險は大である。

(2)快復期患者　傳染病の種類によつては、病狀去り健康者と異るなきに至るもなほ病毒を保有し或は之を排泄することがある。

(3)保菌者　病的症狀を起すことなく、糞便等に病毒を排泄するものをいふ。病者の如く監視を受けないから病毒傳播上に大影響がある。

(4)動物　動物にして人類傳染病の病毒を保ち、之により人類傳染病の原因を爲すものがある。

(イ)動物も人類と同一の病にかゝり體內に病毒を含有するもの。鼠のペスト、犬の狂犬病の如きは卽ちこれである。

(ロ)動物自身は病となるや否や不明なるも病毒を體內に保ち刺傷等により人に傳ふるもの。ペスト發疹チフス等を傳搬する蚤蚊の如きは卽ちこれである。

(ハ)動物の體內に入り、一定の發育をして人に來るもの。マラリヤの蚊體に於けるが如きは其の例である。

(ニ)單に動物の體の表面に附着し、直接に人を侵し間接に食物等に送られ人體に入るもの。コレラ、チフス、赤痢の蠅等の媒介により傳染するが如し。

(5)食物　食物には元來病毒を含むものがある。牛肉、牛乳中に結核菌があり、豚肉に條虫の如き寄生虫あるが如きは卽ちこれである。然し多くのものは他より附着し、其の儘保存せられ、其の中に發育增加して傳染するのである。消化器より侵入するものは特に危險である。

(6)患者の排泄物。

(7)汚水、塵芥　患者、病獸等の排泄物の混入することがある。

(8)水　井水、河湖水等の中には病毒を含有する。排泄物浸入し流行病の原因となる。

(9)土壤　排泄物等により汚され、病毒を保つことがある。

(10)空氣　病毒を保ち之により傳染するものがある。肺ペスト、肺結核、インフルエンザ患者の咳嗽の如きに不用意に接近すると傳染する。

(11)衣服用具、家壁、床　患者の使用した衣服、用具其の他住居する家屋の壁、障子、襖、床等には病毒の附着は免れない。

(三)侵入門

(1)呼吸器、消化器、皮膚竝に粘膜等から侵入する。病毒中には侵入門の單に一に限られるものと二以上の侵入門を有するものとがある。例へばコレラ、チフス、赤痢の如きは口のみから入るが結核菌、ペスト菌等は呼吸器、消化器、皮膚からも襲來するが如し。

(2)吾々の身體には病毒の侵入門あるも健全なる場合に於ては自然防禦裝置があつ

て容易に病毒の外襲を許さないのである。

(四)素因

(1)年齢男女の別。個人の體質。

(2)體內に於ける抵抗力の强弱。

(3)侵入門の健否。

素因少きものでも身體の狀態により感受性を增すことがある。一時的健康を害したる場合、婦人の姙娠したる場合、饑餓疲勞の甚しき場合の如きは何れも素因を增すものである。

流行。同一傳染病患者の同時に多數發生することをいふ。傳染病の流行は病の種類によつて差異あるも左の條件によりて其の程度を異にする。

(1)病毒の毒性　毒性の强くないものは傳染しない。

(2)素因　素因を有する多少。

(3)氣象の關係　不順にして一般人體の健康を害し、又其の氣象が病毒を媒介する動物の發生增加に關係ありや否や。

(4)季節　消化器を侵すものは、消化器の障害される夏に多く、接觸傳染を爲す傳染病は冬季一家に籠居する時季に多い。

(5)土地の素因　汚物・汚水の排除方法の良否及び傳染病毒媒介動物の有無。

(6)社會的關係　(一)住所家屋の良否。(二)貧富の差。(三)教育の程度。(四)迷信の有無竝に其の程度。(五)職業の種類。(六)健康を害する風俗習慣(例へば飲酒の如き)。(七)人の健康を害する出來事・戰爭・饑饉・水害。(八)衞生防疫規定の有無其の程度と實施の狀態。

傳染病は、其の種類頗る多し。痘瘡・實扶垤利亞・猩紅熱・發疹窒扶斯・ペスト・赤痢・虎列喇・腸窒扶斯・パラ窒扶斯・流行性腦脊髓膜炎等は其の重なるものなり。何れも傳染性極めて猖獗にして、此等の病に罹りたるものは直に其の筋に屆出でざるべからず。

資料

傳染病の分類。

(一)法定傳染病
- (1)腸チフス
- (2)パラチフス
- (3)赤痢
- (4)コレラ
- (5)デフテリア
- (6)流行性腦脊髓膜炎
- (7)猩紅熱
- (8)發疹チフス
- (9)痘瘡
- (10)ペスト

- 傳染病
  - (一) 非法定傳染病
    - (1) 痲疹
    - (2) 百日咳
    - (3) 流行性感冒
    - (4) 格魯布性肺炎
    - (5) 水痘
    - (6) 破傷風
    - (7) 狂犬病
    - (8) 丹毒
    - (9) 黄疸出血性スピロヘータ病
    - (10) 痲拉利亞
    - (11) 再歸熱
  - (二) 慢性傳染病
    - (1) 肺結核
    - (2) トラホーム
    - (3) 癩病
    - (4) 花柳病

病名	潜伏期	傳染方法	傳染期間	隔離期間
コレラ	數時間乃至五日間	糞便及び吐物との接觸に因る。亦間接に飲食品・被服用具等を介して傳染す。病原體保有者に注意すべし。	コレラ菌の存在する間、發病後平均二週後には消失す。	菌存在期間（平均二週間）。病原體保有者に注意すべし。
赤痢（疫痢）	二日乃至七日	コレラに同じ。病原體保有者に注意すべし。	赤痢菌の存在する期間。	菌存在期間。病原體保有者に注意すべし。
腸チフス・パラチフス	二週乃至三週	糞・尿・血液・膿汁・飲料水食品殊に生魚。病原體保有者に注意すべし。	最強傳染第三週。菌の存在する間。	菌存在期間約五週間。病原體保有者に注意すべし。
痘瘡	十日乃至十四日	接觸に因る。又健康者・器具を介して傳染す。	最強傳染は化膿期。痂皮剝離終了に至る期間。	痂皮剝離に至るまで。
發疹チフス	四日乃至十四日	蚤・虱・南京虫・毒虫。	表皮剝脱期間。	全治に至るまで。
猩紅熱	二日乃至七日	接觸又は健康者の媒介に因る。	約四十二日間。又は夫れ以上。	通常四十二日又は表皮剝離の終るまで。
ヂフテリア	二日乃至五日	接觸又は間接に飲食器具及び其他の器具を介して傳染す。病原體保有者に注意すべし。	最強傳染期間初發五日乃至六日。ヂフテリア菌の殘存する間。	二日の間隔を以て三回檢査をなし無菌なることを證明するまで（平均三週間）
流行性腦脊髓膜炎	二日乃至四日	同前	菌存在期間。	全治に至る迄菌の鼻腔咽頭に存在せる間。
ペスト	三日乃至十日	排泄物・患者の被服用具及び蚤・昆虫の媒介。肺ペストは飛滴傳染をなす。鼠族は傳染媒介の魁をなす。	最強傳染期は高熱時。咯痰及び膿汁・血液中に菌の存在する間。	全治に至るまで。
百日咳	三日乃至五日	接觸・飛滴傳染。	最強傳染期は加答兒期。痙咳持續期間。	醫師の安全と認むるまで。
痲疹	八日乃至十四日	直接接觸又は用具による間接傳染に因る。	潜伏期及び發疹期。約三週間。	四週間。
流行性感冒	一日乃至八日	直接、間接、空氣介立者無生活者體により媒介せらる。	菌の存在する間。一週乃至二週間。	全治に至るまで約一週乃至二週間。病原體保有者に注意すべし。

流行性耳下腺炎	八日乃至二十二日	飛滴傳染に因る。又健康者器具等により媒介せらる。	耳下腺腫脹存在する間。	全治に至るまで約一乃至二週間。
風疹	十六日乃至二十日	接觸・空氣其の他間接傳染。	潛伏期及び發疹期。約十四日。	四週間。
水痘	十四日乃至二十一日	同前。	發疹期前より痂皮剝離の終結に至るまで。	痂皮剝離に至るまで。約三週間。
破傷風	一日乃至六十日	黴菌土中にあり。故に不潔なる創傷より傳染す。初生兒は臍の創より傳染す。	健全なる皮膚よりは感染せず。	——

腸チフス。

(一)原因　チフス菌である。菌は病の始めには組織及び血中にあるが、第二週から漸次腸内に寄生する。糞尿によつて排泄せられる。

(二)傳染經路　病人又は保菌者の糞尿によつて汚された水、飲食物、手指物品蠅等の媒介によつて健康者の口腔に入る。保菌者とは外觀健康なるも身體内に病原菌を保有し、之を排泄しつゝあるものをいふ。

(三)症狀

(1)固有の熱型がある。即ち第一週は階段的に上昇し四十度内外に達し、第二週第三週の半迄は持續し、第三週の後半から弛張しつゝ下降し始め、第四週の終には平熱となる。

(2)脈は熱に比して少ないのが特異點である。

(3)舌は乾燥し舌苔を蒙り、煉瓦色を呈し、振顫する。

(4)廻盲部壓痛雷鳴あり、便は始め秘結し漸次下痢を起す。

(5)精神朦朧となるか又は躁狂狀を呈する。

(6)第一週の終に薔薇疹があらはれることが多い。但し其の數は少い。

パラチフス。

(一)原因　パラチフス菌で排泄經路、傳染經路は腸チフスと同じである。

(二)症狀　腸チフスに類似して居るが、輕症で經過は短く、熱に固有の熱型なく、多くは弛張する。脈は熱に並行する。

赤痢。

(一)原因　細菌性赤痢は赤痢菌、アメーバ赤痢は赤痢アメーバが原因である。菌は常に大腸中にあり、排泄路は糞便である。健康者の口から消化器に入つて傳染するのである。

(二)症狀

(1)熱は餘り高くはないが、脈搏は多い。渴を訴へ時に吃逆嘔吐に苦しむことがある。

全身早く脱力する。

(2)便通頻數一日數回乃至數十回であるが、一回の便量は少い。

(3)排便時は腹部雷鳴し、腹痛を發し、裏急後重(便意の窘迫すること)がある。

(4)便の性質は粘液血液を交へ、時に膿汁を混ずる。

(一)原因　コレラ菌で病人の糞便及び吐出物によつて傳はり、口から消化器に入る。

(二)症狀

(1)前驅症狀は腹痛と腹部雷鳴により多量の稀薄なる便を排泄する。

(2)熱は却つて下降することが多い。

(3)下痢頻數、便は米泔汁様で、嘔吐頻回なるも苦痛はない。渴を訴ふ。

(4)水分の缺乏症狀を呈する。即ち皮膚は皺襞多く眼窩陷沒し、四肢は厥冷し、脈は頻數微弱である。聲はかれ遂に失音し、無尿となることが多い。

(5)四肢に痙攣性の疼痛がある。

ヂフテリア

(一)原因　ヂフテリア菌である。

(1)菌は病人及び保菌者の咽頭、喉頭に存在し、唾痰鼻汁中に排泄せられる。

(2)觸接殊に飛沫から傳染することが最も多い。物品を媒介とすることもある。

(3)鼻腔又は口腔から入つて扁桃腺に寄生し、又咽頭、喉頭、喉腔に存在することがある。

(二)症狀

(1)咽頭ヂフテリア　病人は突然食欲不振、全身倦怠、頭痛、嚥下困難を感ずると共に發熱し來り、次で扁桃腺肥大、義膜形成を見へ喉頭ヂフテリアを併發するか、突然心臟麻痺によつて死亡することがある。治癒する時は一二週間の經過である。

(2)喉頭ヂフテリア　咽頭ヂフテリアに續發することが多い。義膜は聲帶の上に生じ、喉頭の狹窄症狀を起して窒息せしめることがある。病人は不安を感じ苦悶する。

(3)鼻腔ヂフテリア　鼻粘膜腫脹し、分泌過多となり、鼻道閉塞し、鼻粘膜には義膜を生ずる。本症は敗血症を起して死亡することがある。

流行性腦脊髓膜炎

(一)原因　流行性腦脊髓膜炎菌である。菌は病人の腦脊髓液又は病人及び保菌者の咽頭中に存在して居る。排泄路は唾痰である。鼻腔及び咽頭から進み腦膜に侵入するのである。傳染經路は觸接殊に飛沫傳染が多い。

(二)症狀

(1)熱は始め急昇して四十度内外に達し、經過中弛張することが多い。脈は初め緩なるも後頻數となる。

(2)烈しい頭痛、脊髓痛、眩暈、嘔吐を訴へ、筋痙攣を起す。

(3)瞳孔左右不同、時に斜視を呈し、腹部は船底狀となり便秘を來す。

(4)精神朦朧譫語を發し、第一二週に於て腦及び心臟麻痺により死亡するものが多い。然し六週以上を經て治することもある。治癒しても白痴、盲目、聾啞となることが多い。

猩紅熱

(一)原因　不明である。病毒は、病人の血液、分泌物及び落屑の中に存在すといはれて居る。接觸殊に飛沫傳染によることが多い。物品を媒介とすることもある。

(二)症狀　惡寒戰慄により三十九度以上に發熱し、頭痛殊に嘔吐を訴へ、咽頭炎を發する。次で頸部、四肢、軀幹の順序に發疹を見、五六日間持續して解熱と共に落屑を始め、約二週間で終る。

發疹チフス

(一)原因　不明。本病毒は病人の血液、唾痰中に在りといはれて居る。觸接殊に飛沫傳染、虱の媒介物品を介することがある。

(二)症狀　突然惡寒戰慄を以て體溫四十度内外に上昇し、呼吸器のカタル症狀あり、頭痛、筋肉痛烈しく、第四乃至第六病日位から先づ軀幹次に四肢に發疹する。顏面には表はれない。疹の數は比較的に多い。精神朦朧となり、心臟衰弱し、カタル性肺炎を起して死ぬることあるも、輕快すれば熱は十二日位で下降する。

發疹チフスには特異の熱型がある。即ち發病當時突然三十九度乃至四十度に上昇し、十日間稽留し、後二三日間に弛張しつゝ下降する。

痘瘡

(一)原因　不明。病毒は痘疱内容物及び痂皮中に存在して居る。觸接又は物品を媒介として傳染する。殊に遠き空氣傳染を爲し、二三町の處にも達することがある。

(二)症狀

(1)發病當時熱は三十九度乃至四十度に上昇する。第四病日に熱は下降し、發痘する。第九病日に熱は再び上昇し、痘は化膿する。第十二病日から熱は下降し始め痘は結痂を始む。

(2)痘は全身一齊に出で、圓形にして痘臍を有し、瘢痕をのこす。

ペスト

(一)種類　ペストには激しい肺炎症狀を主とする肺ペスト、淋巴腺の腫脹を主とする

腺ペスト皮膚に癰をつくる皮膚ペストの三種ある。

(二)原因　ペスト菌。菌の所在は左の如くである。

(1)ペスト病人　肺ペストは咯痰中、腺ペストと腺腫の內容物、皮膚ペストは癰の內容物中存在して居る。三種共敗血症を起した時は血液及び屎尿中にもある。

(2)有菌鼠の血液、屎尿中及び蚤の體內にも存在して居る。

(三)傳染經路

(1)肺ペスト　觸接殊に飛沫傳染が多く物品を介することもある。呼吸器からも侵入する。

(2)腺ペスト、皮膚ペスト　病人の分泌物、排泄物及び之に汚されたる物品、有菌鼠の屎尿及び之に汚されたるもの、蚤及び南京虫により、皮膚の小傷から侵入する。

(四)症狀

(1)熱は突然戰慄により急昇し四十度以上に達する。經過中は弛張する。脈は頻數で肺ペストの如きは百五十を算する。強い全身倦怠、頭痛、眩暈、嘔吐を訴へ、眼球結膜は充血し、精神朦朧となる。

(2)肺ペストは胸部絞窄の感あり、胸痛烈しく呼吸促迫して五十を數へ、咳嗽あり、多量の咯痰を出し時に咯血する。

(3)腺ペストは股腺、鼠蹊腺が最も多く侵される。腋窩腺、顎下腺も之にかゝることがある。腺腫の大さは不定で激痛あり、化膿することは稀である。

(4)皮膚ペストは菌の侵入部位に癰をつくる。癰は始め發赤隆起し、次に水疱となり化膿し結痂するか、又は潰瘍となることがある。

肺結核　結核桿菌によつて發する呼吸器の慢性傳染病である。

(一)病毒の所在　患者の分泌物、排泄物就中咯痰中である。

(二)傳染經路

(1)空氣と共に吸入せられる。

(2)結核菌を含める飲食物による。

(3)口より口に。衣服寢具から。皮膚の損傷から。

(三)症狀　本症は初期咯血、消化障碍、貧血、熱等を以て發する。其の症狀は咳嗽を以て主徴とし、咯痰あり、熱を發する。肺結核患者の熱は特異性であつて、初期は常に三十七度五分乃至三十八度內外の熱を保ち、末期には、午前は常溫なるも午後に至ると三十九度乃至四十度に達する。其の他盜汗、全身貧血、筋肉羸瘦等の諸症を呈する。精神感應は末期に至るまで侵されないのが常である。

(四)處置

(1)患者の咯痰は病毒含有の源泉である。消毒を十分にすること。
(2)氣候善良なる土地に轉地せしめ衞生的食餌を與へ榮養療法・日光療法等により、患者の體力保全を企てなくてはならぬ。
(3)多くは慢性に經過するものであるから、看護上に於ても忍耐を要し、患者を慰問慰藉し絶望の域に陷らしめないやうにつとむべである。

傳染病の傳染經路は病原菌の種類によりて異なり。(一)空氣により呼吸器内に入りて傳染するもの、(二)病人の排泄物が口より消化器に入りて傳染するもの、(三)飲食物の媒介によりて口より消化器に入りて傳染するもの、(四)直接病人に接觸するによるもの等あり。腸窒扶斯・赤痢・虎列刺等は病人の排泄物中に病原菌を有し、飲料水又は食物に附着し口より入りて傳染し、痘瘡・猩紅熱・實扶的利亞等は直接接觸又は空氣によりて傳染し、流行性腦脊髓膜炎・流行性感冒・肺結核等は空氣により鼻又は口より入りて傳染するが如し。又ペストは主として皮膚及び粘膜の小さき創口より入りて傳染す。

蚊・蠅・鼠等は傳染病毒を媒介するものなれば之を驅除することをつとむべし。

資料

侵入門。

(1)消化器(口腔)より入るもの　腸チフス・パラチフス・赤痢・コレラ。
(2)呼吸器(吸氣)より入るもの　デフテリア・流行性腦脊髓膜炎・肺ペスト。
(3)皮膚(傷)より入るもの　腺ペスト・皮膚ペスト。
(4)侵入門明らかならざるも恐らく呼吸器なるもの　猩紅熱・發疹チフス・痘瘡・發疹チフス。

第二節　傳染病の豫防

傳染病を豫防するには、日常身體の健康を保ち、病毒に對する抵抗力を養ふこと肝要にして、其の流行時には特に攝生に注意せざるべからず。

資料

(1)全身殊に手指を清潔にすること。
(2)寢冷せぬやう腹卷をすること。
(3)流行地に於ては豫防注射を爲すこと。

(4)異狀あらば速に診療を乞ふこと。

(二)飲食物

(1)水は必ず煮沸して用ふべし。煮沸する時は黴菌は殺滅せられ安心して用ふることを得べし。

資料

(1)水道水は安全なるも開放式の井水又は川水は危險である。生のまゝ飲用せざること。

(2)暴飲せぬこと。

(2)食物は消化し易きものを選び、生食は之を避け、且つ其の分量を適當にし調理法を清潔ならしむべし。

資料

(1)生食を慎み、過熟、腐敗せる果物を食せぬこと。

(2)暴食せぬこと。

(3)食器は時々熱湯にて消毒すること。

(三)衣服住居の清潔　衣服は屢々洗濯して清潔ならしめ、又日光消毒を施し住居は掃除を怠らず、常に清潔を保ち、家屋の床下、周圍及び厠等には時々石灰乳の消毒藥を撒布し、病毒の發生、侵入等の危險を豫防すべし。

資料

(1)糞池へ蠅の出入せざるやうにすること。

(2)下水は浚渫すること。

(3)塵埃は一定の容器に入れ蓋をすること。

(4)蠅の發生を防ぎ又驅除につとむること。

(三)隔離消毒　不幸にして法定の傳染病患者を出したる時は法の規定する所に從ひ直に傳染病院に入らしむべし、隱蔽すべからず。其の他の傳染病患者は自宅療養を爲すべし。但し傳染せざるやう十分の注意を要す。

自宅療養の場合にありては、なるべく離れたる室を選びて病室とし、一定の看護人の外は猥りに出入を禁じ、食器衣類寢具等病人に觸れたるものは散亂せしめざるやうにして消毒し、排泄物吐出物は嚴重に消毒始末すべし。

資料

消毒。

(1)屎尿・吐物・義膜・落屑の剝離したるもの・咯痰・含嗽したる水等は三%石炭酸水又は三%のクレゾール水を同容量加へ二時間以上放置すること。

煆製石灰末ならば三〇分の一以上・二〇%石灰乳又は五%クロール石灰水ならば五分の一以上を投じて攪拌すること。燒却することもある。

(2)衣服寢具は蒸氣消毒を爲し・攝氏百度で一時間以上行ふ。フォルムアルデヒード瓦斯消毒を行ふ時は七時間以上密閉すること。三%石炭酸水・三%クレゾール水中に二時間以上浸漬するか・又は石炭酸水・クレゾール水・〇・一%昇汞水・一%フォルマリン水等を撒布することもある。煮沸消毒は沸騰後三十分以上行ふこと。價値なきものは燒却するがよい。

(3)食器類は煮沸消毒を爲し・時に三%石炭酸水又は二〇%石灰乳中に浸漬し・後清水にて洗ふこと。

(4)病室は消毒藥の撒布又は拭淨を爲し・又はフォルムアルデヒード消毒を爲し七時間以上密閉すること。

(5)井水・下水は煆製石灰末五十分の一又はクロール石灰水五百分の一を投じ十二時間以上放置すること。

(6)塵埃箱には三%石炭酸水又は二〇%石灰乳を注ぎ・塵埃は燒却すること。

(7)便所には消毒藥を撒布し・糞池には煆製石灰末又は二%の石灰乳を投入すること。

交通遮斷隔離期間

(1)コレラ・赤痢　滿五日間

(2)發疹チフス　滿七日間

(3)ペスト　滿十日間

傳染病の豫防　傳染病の成立には・病毒・病毒含有物・經路・侵入門素因なる一つの連鎖がある。其の一を欠く時は傳染は成立しない。豫防の主旨は之に基づくのである。

(1)患者を早期發見することは防疫上最も必要なることである。多數に蔓延しない中に撲滅ができる。

(2)患者・疑似患者並に傳染嫌疑者の隔離を爲すこと。

(3)無益に患者に接近せざること。

(4)消毒法を勵行すること。

(5)病獸竝に媒介者たる動物を驅除すること。

(6)豫防接種を爲すこと。チフス・ペスト・コレラ等の豫防接種竝に種痘の如き卽ちこれである。

(7)保菌者は・之を患者同樣に取扱ふこと。數年に亘り病毒を排泄するものは當人に

理解せしめ、一定の場所以外に排便せしめず、且つ排便は直に消毒せしむること。

(8)身體外に於ける病毒に注意すること。水・汚水・汚物・食物・土地・空氣等に病者の體内より移行せしめざるやうに注意し、既に移行した時は此等のものから更に健康者を侵さぬやう注意すること。

(9)身體の健康をはかること。吾々の人體には天與の抵抗力あり、身體强健なれば病に對する抵抗力は强い。傳染病流行時には强健を保つことが特に必要である。

(10)衞生思想の涵養につとむること。

第三節　傳染病の消毒

消毒とは、傳染病の傳播を防ぐ爲めに人工的に病原體を殺滅する方法なり。

資料

消毒。病原體を撲滅することである。各種の消毒方法は菌體内の蛋白質に變化を起さしめることによつて奏効するのである。

消毒に關する注意。

(1)消毒作用の確實なること。消毒確實ならざるものは豫防の効がない。

(2)消毒は迅速に施行を結了し得ること。消毒物品は多くは日用品であるから、速に消毒してしまはなくてはならぬ。

(3)消毒の方法は簡單容易に行ひ得べきこと。

(4)消毒に用ふる原料は安價にして至る所容易に手に入るべきものたること。

(5)消毒に用ふる原料は、小量なれば人體の健康を害することなく、消毒後久しく物品に附着せざること。

(6)消毒の方法は消毒物品を毀損せざること。

(一)燒却　病人の寢衣・寢具・繃帶等はすべて燒却するを以て安全なりとす。

資料

燒却法は病毒に汚染したる物件を燒却する方法である。此の方法は殺菌力が大で極めて確實である。左の如きものは此の方法による。

(1)動物の死體・塵芥・傳染病患者の屎尿・吐瀉物其の他の排泄物。

(2)消毒後再び用ひざる物件。

(3)消毒費用に比し廉價なる物件。

(二)煑沸消毒　消毒物を沸騰せる熱湯中にて半時間以上煮沸す。

資料

煮沸消毒は水中に消毒物を浸漬しおき之を沸騰せしめ殺菌する方法である。沸騰後三十分間煮沸しなくてはならぬ。此の方法によるものは左の如くである。

(1)屎尿吐瀉物其の他の排泄物。
(2)衣類寢具敷物布片等。
(3)陶器硝子器鑛製品竹木製品等にして熱に堪ふるもの。

(三)蒸氣消毒　攝氏百度以上の氣熱にて消毒すれば一時間にして黴菌は斃死すべし。

資料

蒸氣消毒法　高熱なる蒸氣の殺菌力を利用し病原體を殺滅する方法である。流通蒸氣を用ひなるべく消毒器内の空氣を排除し、一時間以上攝氏百度以上の濕熱に觸れしむること。

(1)衣服寢具敷物布片等。但し消毒により褪色の虞あるものは蒸氣消毒を避け他物に染着の虞あるものは他物と混同して蒸氣消毒を行はざること。
(2)硝子器陶器鑛製品竹木製品等にして氣熱に堪ふるもの。
(3)衣類は豫め袖又は衣嚢を檢索し爆發又は發火し易き物件ある時は之を取出しておかねばならぬ。

(四)藥物消毒　石炭酸水昇汞水石灰乳クロール石灰水クレゾール水フォルマリン等を用ふる方法なり。

資料

藥物消毒
- (1)石炭酸
- (2)クレゾール石鹼液
- (3)昇汞
- (4)煆製石灰
- (5)フォルマリン
- (6)フォルムアルデヒード
- (7)酒精
- (8)硼酸
- (9)過滿俺酸加里

理想的消毒藥の條件
- (1)殺菌力大にして人體に害少きこと。
- (2)材料の得易きこと。
- (3)廉價なること。
- (4)取扱方簡便なること。
- (5)消毒物件を損せざること。
- (6)不快臭なきこと。

消毒液の調合法

(1)石炭酸水。　石炭酸　三　水　九七

(2)昇汞水。　昇汞一　食鹽一　水一〇〇〇
(3)石灰乳。　生石灰二　水八
(4)クロール石灰水。　クロール石灰五　水九五
(5)クレゾール水、　クレゾール石鹼液三　水九七
(6)フォルマリン水。　フォルマリン一　水三四

消毒の方法。

(1)排泄物　石炭酸、クレゾール水の同容、又は石灰乳、クロール石灰水の五分一容を加へて攪拌し二時間以上其のまゝにしたる後に燒くこと。
(2)手指　石炭酸水、クレゾール水又は昇汞水にて洗ふこと。
(3)衣類、夜具　石炭酸水、クレゾール水、フォルマリン水等に二時間以上浸すこと。
(4)硝子器、陶磁器、竹木製品　石炭酸水、クレゾール水、昇汞水、フォルマリン水にてふくか、又は之に浸すこと。食器、玩具、金屬器具は昇汞水を用ふべからず。
(5)皮革類、塗物類、ゴム類、セルロイド類　石炭酸水、クレゾール水にてふき、又は之を振りかくること。
(6)室内　石炭酸水、クレゾール水、昇汞水、フォルマリン水にてふくこと。密閉し得る室ならば、容積一〇〇立方尺につきフォルマリン四〇瓦以上を霧の如く噴出せしめ、又はフォルムアルデヒード一五瓦以上を發生せしめ、同時に水蒸氣一〇〇瓦以上をみたし、七時間以上密閉し置くこと。

(五)日光消毒　黴菌は日光に直射し乾燥せしむる時は死滅するものなり。されば病人に接觸せざる寢具も時々日光にさらして消毒すべし。

資料

日光消毒の注意。

(1)日光に曝露すると共に十分に空氣の流通をはかること。
(2)日光の強度、消毒物件により數時間乃至數日間繼續すること。
(3)日光の殺菌力は直射せる場合に限る。短時間に在りては効用なし。

各種細菌の日光に對する抵抗力。

(1)結核菌　咯痰と共に布片に附着し、直射日光に對し、約二十分乃至三十分間にて死滅す。
(2)チフス菌　直射日光に對し、約一時間乃至六時間にて死滅す。
(3)赤痢菌　直射日光に對し三十分間にて死滅す。
(4)コレラ菌　直射日光に對し、二時乃至三時間にて死滅す。

(5)肺炎球菌　咯痰と共に布片に附着し、直射日光に對し、十二時間曝露するも死滅せず。

第九章　繃帶

繃帶は創口を保護し、外用藥を保持し、脫臼・骨折を固定する等其の用途頗る廣し。

繃帶には卷軸帶と繃帶巾とあり。繃帶巾には四角巾と三角巾とあり。而して普通に用ひらるゝものは卷軸帶と三角巾の二なり。

卷軸帶は白木綿を裂き細く卷きたるものにして、三裂・五裂・六裂・八裂等あり。之を用ふるには大さの同じき所は毎行相重積して螺旋狀に纏絡すべく、大さの同じからざる所は、細少なる部分より始め、二三回同所を環行し、後卷軸を斜上より下、下より上へと交叉せしむべし。

屈伸を要する關節等は運動の自由を妨げざるやうに卷くを要す。何れの部分に於ても、始端と末端とは同一部を數回環行せしめて脫落を防ぐべし。

資料

繃帶法。

(1)蓋護繃帶　布片を以て創傷部及び傷害部を被覆し、外部より諸種の病毒及び壓迫其の他の障害を防禦するものをいふ。

(2)保持繃帶　外用藥等を貼布したる場合に其の滑轉脫落を防ぐものをいふ。

(3)壓迫繃帶　創緣を輕く壓迫し、創口を集合せしめ、或は局部の出血を止むる用を爲すものをいふ。

(4)安定繃帶　身體の弛緩せし部分或は損傷部を支持保定するものをいふ。

(5)固定繃帶　骨折・脫臼等の場合に適當の位置に整復した後、位置の移動を防禦するが爲め堅く之を固定するものをいふ。

(6)牽引繃帶　身體中就中四肢に於ては一定の重量を附して牽引することがある。

繃帶材料の必要條件。

(1)創面に對し、直接觸れしむるものは、分泌物等の吸收佳良なるべきこと。

(2)被覆に用ふるものは、病原菌の侵入を防ぐに足るべき密度を有すべきこと。

(3)消毒を施し易く、且つ消毒により變質・破損の恐れ少きものなること。

(4)反復使用に堪ふるものなること。

(5)材料の求め易きこと。

(6)價格の廉なること。

(7)刺戟作用の少なきこと。

重なる繃帶材料。ガーゼ・綿花・木綿(卷軸帶繃帕等)・亞麻仁油紙等を重なるものとす。

其の他特種の目的の爲め左の如きものを用ふ。

(1)硬性の物質　副子・安保裝置に用ふ。鐵材・木材・硬護謨・ボール紙等。

(2)硬化物質　固定繃帶に用ふ。ギプス・水ガラス・膠等。

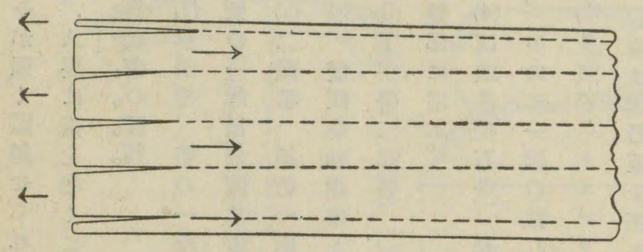
(3)彈力性物質　止血輸血・牽引等の目的に用ふ。護謨管・護謨帶等。

(4)膠着性の物質　固定牽引等の爲めに用ふ。コロヂウム・絆創膏等。

繃帶材料
- 軟性物質
  - ガーゼ(綿紗)……粗ガーゼ・脫脂ガーゼ。
  - 綿花　普通の綿花・脫脂綿花。
  - 木綿　卷軸帶・三角巾等。
  - 亞麻仁油紙
  - 其の他　フランネル・メリヤス・絹布・麻布・ゴム布等。
- 硬化物質
  - ギプス・水樣ガラス・セルロイド・グッタペルカ・セラック・膠・澱粉等。
- 硬性物質
  - 彈力性物質……ゴム管彈力發條。
  - 膠着物質
    - コロヂウム・グッタペルカ。
    - 絆創膏。

卷軸帶。最も必要な繃帶である。布片を卷き一定の圓柱狀としたもので被覆・保護・壓迫・保持等の目的を達する爲めに用ひられる。材料としては晒木綿・ガーゼ・金巾・麻布・フランネル・絹布等を用ふ。晒木綿ガーゼが最も多く用ひられる。ガーゼは最もよく目的を達するものであるが再三使用することができない缺點がある。

卷軸帶は晒木綿を半反の長さに切る。次に種々の廣さの切れ目を其の一端に入れ布の耳をも除き去るやうに切れ目を入れる。かくて其の截端を交互に二人で把持して強く一氣に兩方に引くと欲する廣さの布片を得ることができる。耳を除くのは患部の一方



繃帶の裂き方

のみが強く緊縛せられるのを防ぐ爲めである。繃帶は二裂・四裂・五裂・六裂・八裂等とする。八裂は指を卷くに用ふる。裂いたものは手又は器械で卷くのである。

卷軸帶の種類

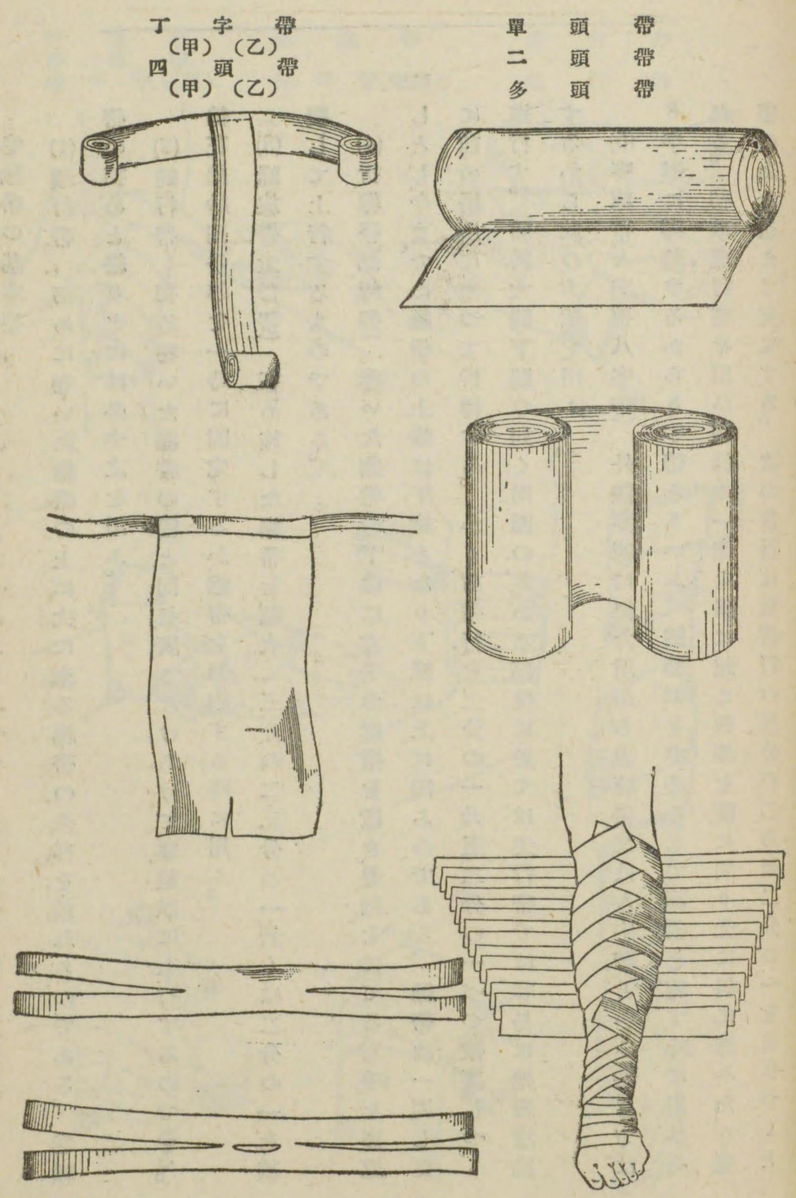
(1)單頭帶　帶の一端から卷き軸狀と爲したるもの。繃帶の一端は卷軸の中心に位し、他の一端は外圍に遊離して居るのである。

(2)二頭帶　繃帶の兩端から同一樣に捲き、兩頭は同大の卷軸となり、中央で共に連るもの。雙頭卷軸繃帶ともいふ。頭部などに用ふ。

(3)丁字帶(三頭帶)　一帶の中央に他帶の端を固定せしむるもので、丁字狀をして居る。骨盤部に用ふ。

(4)四頭帶(投石帶)　長さ約一米位の繃帶の兩端より縱に裂き中央の一部を殘したもの。中央に一個の截れ目を入れたものもある。

(5)多頭帶(スクルテット氏繃帶)　多數の短帶より成り、長さは患部を一周半し得るやにし、幅は四乃至十糎ある。軀幹四肢等に使用し、一々全身又は局部を動かさずして繃帶するに用ふ。



卷軸帶の基本型

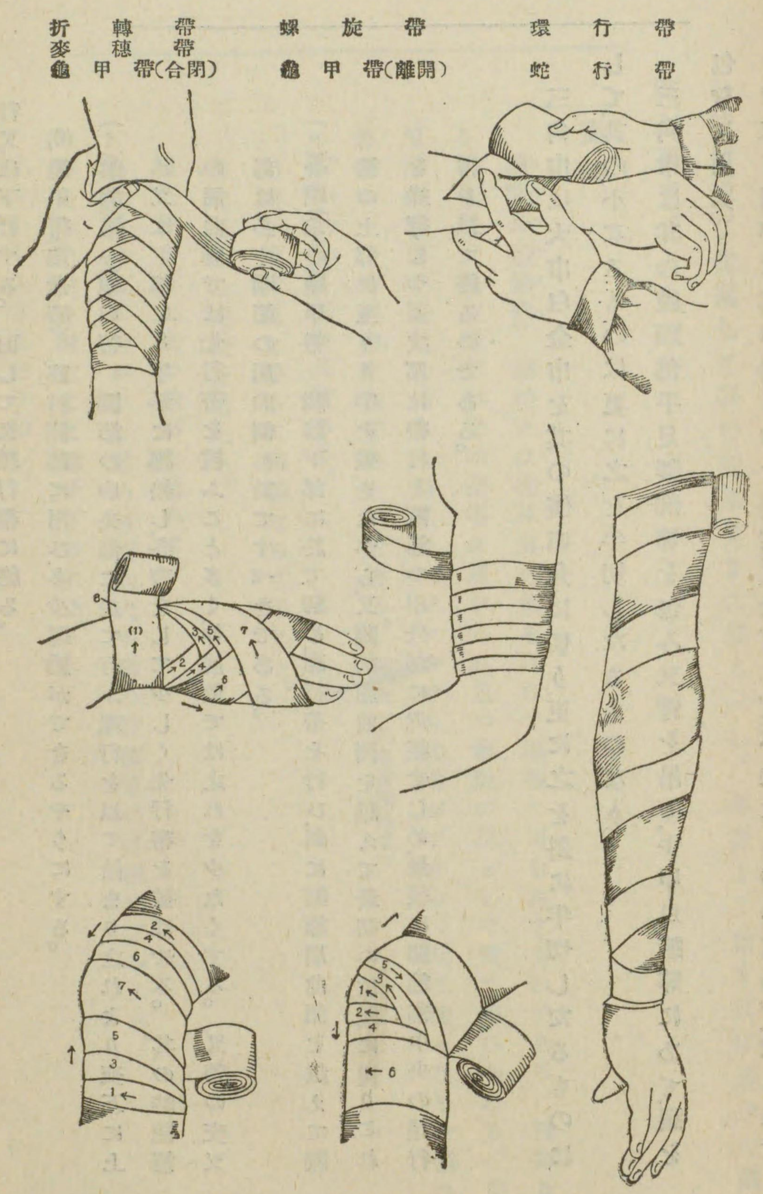
(1)環行帶　初めに卷いた繃帶の上に次に來る繃帶の全部を重ねるのである。卷軸帶の初めと終りとには必ず之を用ふ。

(2)蛇行帶　初め卷いた繃帶の幅と同じ廣さだけあけて螺旋狀に上行するのである。綿花綿紗副子等を一時に固定するか繃帶を節約する時に用ふ。

(3)螺旋帶(走行帶)　初め施した繃帶を順次に三分の二三分の一若くは二分の一を被覆して上行するものである。

(4)折轉帶(翻轉帶)　卷いた繃帶の下緣に左手の拇指を置き卷軸を持てる右手を裏返しとし今までの繃帶の上緣は下緣となり下緣は上に向ふのである。繃帶は一周し更に前の場所に來つて折轉する。かく前帶行を三分の一乃至二分の一づつ被覆しつゝ進行す。前膊大腿下腿の如く周圍の差ある部位に於ては走行帶では容易に弛緩滑脫するから此の方法を用ふ。

(5)麥穗帶(人字帶八字帶)　外觀麥穗に似た所から麥穗帶又は人字帶といひ卷き方は8字形に纏絡するから8字帶ともいふ。關節部を中心として繃帶を施す時に用ひられる。初め環行帶を用ひ關節の一側を斜に超え他側を横に周り先に斜に進みたる繃帶の上を超えて交叉する。次の帶行は前帶行の三分の二乃至二分の一を被ひつゝ上



行又は下行する。而して又環行帶に終る。

(6)龜甲帶(扇狀帶)　膝肘關節に用ひ、多少運動ができるやうにする。

(イ)離開(遠心)龜甲帶　關節の中央部に於て行ふ環行を以て始まり、之れより交互に上部又は下部に8字形に纏絡し、各帶をして少しく先行帶を被はせる。其の時關節の屈曲側では先行帶を被ふこと多く、伸展側では之れを少なくする。又帶の交叉部は必ず關節の屈曲側に於てすべきである。

(ロ)合閉(求心)龜甲帶　關節下部に於て初め、環行帶を行ひ、斜に關節屈曲側を越えて關節の上部に至り8字を畫きながら、又關節屈曲側を越えて最初の位置に戻り、これを繰返しつゝ次第に帶行を關節の中央部に近接せしめ、最後に關節部中央の環行帶を以て終るのである。

三角巾は大巾白金巾を其の儘四角に切り、更に之を斜に半切したるものにして、其の小なるものは更に之を半切したるものなり。

三角巾は其の儘頭部手足腰部等を包み、又臂を吊り、手甲足蹠等にあて、眼を包むに用ふ。

すべて繃帶は其の巻き方を適當にせざれば、不快なるのみならず、或は血行を妨げ、或は脫落して其の效果なきに至るべし。手際よく施すには多少の熟練を要す。

資料

繃帶布帕(繃帕)　繃帕とは布片其の物を用ひて、繃帶の用を施すものである。簡單なる被覆壓定固定繃帶の補助帶等に用ひられ、且つ救急の用として廣く用ひられる。使用法が簡便で、隨所に得られ、時にはハンケチでも代用ができる。なほ種々なる身體の部位に一時的繃帶を施すことができる。(柳壯一氏繃帶學提要)

繃帶布帕は左の長所あり。

(1)到る所材料を得るに困難ならざること。

(2)使用法の簡便なること。

然れどもまた左の缺點を免れず。

(1)被覆が稍不完全なる爲め無菌的大手術の被覆等には適せざること。

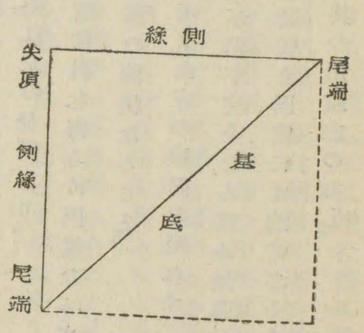
(2)長時間强き固定には適せざること。

而して其の用途左の如し。

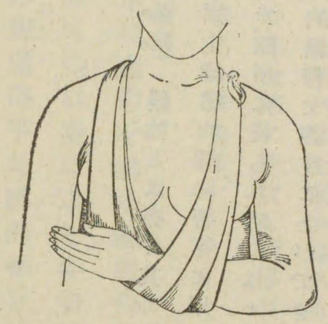
(1)簡易なる被覆壓定固定繃帶の補助。

三角巾のつくり方

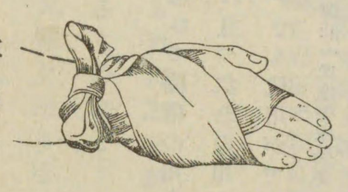
三角巾の折り方



三角巾と四角巾の用法一例

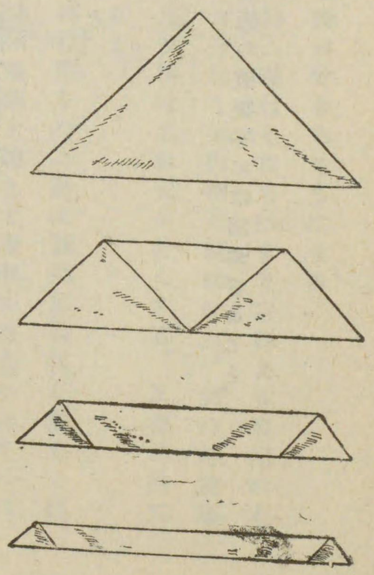


三角巾



三角巾

四角巾



(2)救急處置。

繃帕の種類　繃帕の材料としては洋白布が最もよい。其の他木綿天竺木綿などを用ふ。形狀により、三角巾、四角巾、矩形帶等に分ける。

(1)三角巾　三角巾は普通一米四角の布巾を對角線を以て二分したものである。更に之を二分したるものを小三角巾といふ。

(2)四角巾　各邊約一米なる四角なる布巾である。三角巾よりも應用の範圍が狹い。

(3)矩形帶　木綿又は金巾の半幅を適當の長さに切り、之を二枚に折り重ねたものである。軀幹に於ける濕布繃帶の支持等に用ふ。

繃帶纏絡法通則

(1)繃帶は常に環行を以て初まり環行を以て終るべきである。最初の環行で繃帶は固定する。

(2)繃帶の終りは其の末端部を適宜の長さに縱に裂き之を結んで固定する。結び目が創傷の直接上部又は臥床患者に於て下になる所につくらぬこと。

(3)繃帶二個以上を連續して卷く時は、第二帶の端を少しく第一帶の端の下部に入れて卷き始めるがよい。除帶の際に第一帶の端を見出すに便である。

(4)卷軸帶纏絡を施すには、術者の左方より始め右方に進むこと。即ち術者は繃帶の

始端を左手に摘み、卷軸は右手に持ち、其の儘卷きつくるのである。

(5)繃帶は原則として體の末梢部から初めて中樞部に進むべきである。

(6)繃帶を行ふ際或一部を強く壓する時は縟瘡等を起すおそれある故注意を要す。

(7)繃帶纏絡の緊緩の度は適度なるべきこと。強きに過ぐれば血行障害を起し、弱きに過ぐれば容易に滑脫するおそれがある。

(8)繃帶を除去するには、捲き戻しを爲すこと。時には繃帶剪を以て切除することがある。

繃帶施行時の要件

(1)繃帶材料は成るべく無菌なるべきこと。殊に創面に直接するものにありて然りとす。

(2)創傷面及び其の周圍は完全に被はれ、外部より病菌の侵入しないやうにすること。なほ器械的の刺戟をも受けないやうにすること。

(3)體裁よく且つ經濟的に施行すること。

(4)繃帶を行ひ又は之を解くには迅速なるべきこと。

(5)患者に苦痛を與へない方法を選ぶこと。

繃帶の交換

(一)交換の條件

(1)繃帶の弛緩したるとき。弛緩すれば繃帶の用を爲さぬからである。

(2)繃帶の汚染したるとき。即ち內部より膿汁又は血液で汚れたるとき。繃帶の濕つた時は、外部より細菌の侵入容易なるによる。外部より汚染した時は汚染した部分のみを交換すればよい。

(3)繃帶が惡臭を放つとき。患者不快を感じ、且つ病毒を過重に見る傾きがあるからである。

(4)出血あり繃帶に浸出したるとき。

(5)末梢部に異狀を呈したるとき。繃帶の緊縛度に過ぎたる場合に疼痛を感じ、又末梢部紫藍色を呈し、時に浮腫を來すことがある。

(6)創傷傳染の疑ある場合。發熱と局部の疼痛が創傷傳染の主なる徵候である。

(二)繃帶交換の注意

(1)創傷部位を出來得る限り動かさぬこと。

(2)患者になるべく苦痛を與へぬこと。

(3)迅速に行ふこと。

(4)患者は可及的橫臥せしむること。

(5)創傷の如何にかゝはらず常に無菌的に行ふこと。（柳壯一氏繃帶學提要による）

第十章　回復期・危篤者の取扱

第一節　回復期の注意

病人の疾病漸く癒え、回復期に入りたる時は、特に其の養生に注意すべし。

(一)食物　回復期は食欲盛となり、動もすれば過食に陷り、消化器を害し、回復上に一頓挫を來すことあれば、食物の種類分量等につきては大に注意を要す。

(二)運動　醫師に許されたる範圍内に於て適度に之を爲し、決して過度に陷り、身體の衰弱を加ふるが如きことなきやう注意すべし。

(三)精神の慰安　精神の慰安は治病に極めて密接なる關係を有す。徒に精神を勞するは回復の妨害となるべし。

(四)轉地　轉地は環境をかへ、心身の保養に大なる效果あるものなれば醫師に相談して決定すべし。

第二節　危篤者の取扱

病人の容態は病症によりて同じからず。然りと雖も(一)呼吸不規則となり、呼氣多く吸氣少なく、或は雷鳴樣の音を發し、(二)脈搏は不整にして微弱となり、數へ難きに至る。(三)顏面蒼白となり、下瞼及び下顎は下垂して面貌變異し、(四)手足の運動に力なく、兩便失禁し四肢冷却す。

かゝる徵候あらはれたる時は、直に醫師に通じ、周圍を靜かにして、最も懇切に看護し、安全に其の命を終らしむべし。

病人死したる時は醫師の診斷を受け、消毒藥を以て全身を拭ひ、身體を整へ眼を閉ぢ口を結ばしめ、被衾を薄くしおくべし。

醫師の診斷書を添へ其の筋に届け出で、死後二十四時間を經て埋葬に附すべし。

傳染病にて死亡したる時は迅速に其の筋に届出で、消毒・火葬等すべて法規に從つて處理するを要す。

資料

瀕死の徴候

(1)呼は淺表遲徐となり呼吸困難の狀を呈すること。
(2)脈搏は頻數微弱となること。
(3)鼻翼蠢動し、喘鳴を帶ぶるに至ること。
(4)顏面は蒼白又は青色を呈し、顏貌著しく憔悴異變すること。
(5)鼻尖鋭くなり、眼球は陷沒し、眼瞼は半ば開き閉鎖十分ならず、口吻弛緩し前額に冷汗を流す。
(6)四肢厥冷最後の下顎運動により絶息し瞳孔散大す。

死の徴候

（眞　死）

呼吸　呼吸廢絶す。口鼻前に鏡をかざすも曇を生ぜず。火焔羽毛を致すも動搖せず。

心動　停止す。

眼　瞳孔散大し、角膜溷濁し觸るゝも反應なし。

皮膚　反應消失す。

（假　死）

呼吸停止せるが如き外觀あるも全く廢絶せず。鏡面に曇を生じ、火焔・羽毛動搖す。幽微なるも心動を聞く。瞳孔散大せず。角膜透明にして觸るれば反應す。反應す。

顏貌　蒼白色となり、死相を呈す。

死の確徴　强直死斑を呈し、腐敗現象を呈す。

眞死と假死の徴候

（眞　死）

(1)眞死に在りては心臟運動及び脈搏全く絶止す。故に血行は廢絶す。
(2)眞死に在りては呼吸機能全く廢絶す。肺運動の止まるによる。
(3)眞死に在りては反射機能（紙捻を鼻孔に入るゝやくさめを發する如き）を有せず。
(4)眞死に在りては皮膚を摩擦するも發赤せず。皮膚に熱き蠟を點下するも熱灼の反應なし。
(5)眞死に在りては皮膚粘膜に蒼白色を呈す。
(6)眞死に在りては死後八時間乃至十二時にして屍斑を生ず。
(7)眞死に在りて死冷あり。

（假　死）

(1)假死に在りては微弱ながら之を有す。
(2)假死に在りては然らず。
(3)假死に在りては反射機能あり。
(4)假死に在りては發赤熱灼の反應あり。
(5)假死に在りては然らず。腦貧血の場合蒼白色を呈するも他に生活反應あり。
(6)假死に在りては然らず。
(7)假死に在りては然らず。

蒼白となれるも眞死程著しからず。

（井口乘海氏看護學教科書）

(8)眞死に在りては瞳孔散大す。
(9)眞死に在りては死後强直を呈す。

(8)假死に在りては然らず。
(9)假死に在りては然らず。

（長尾肱齋氏新纂看護婦學）

死亡の確徵　生體に來ることなく、死體に於てのみ見る徵候をいふ。

(1)死斑　死後數時間にして病臥時下方に在りたる體部に青點乃至暗黑色の斑點ができる。

(2)死後の强直　死後少時にして身體の强直となるをいふ。電擊で死んたものゝ外すべて之を見る。

(3)眼球の軟化、角膜の乾燥及び皺襞の形成。

(4)腐敗現象。（原田醫學博士）

死亡時の處置　醫師の診斷により死亡確實となつた時は、顏面を白布で覆ひ屏風を立てまはし、全身の衣帶を盡く除去し、アルコール又は昇汞水で身體諸部を清拭し、鼻・口・肛門等の孔口に消毒綿を充塡し、後清潔なる白衣を着せしめ、仰臥せしめ、眼瞼は輕く壓迫し、口を閉ざさしむ。傳染病患者は法規に從つて處置しなくてはならぬ。

診斷書　死亡診斷書をいひ、從來診療せし醫師より與ふるものである。

檢案書　死體檢案書をいひ、死體を檢診した醫師より與ふるものである。

死亡に關する法規　（戸籍法第四章第十三節拔萃）

第百二十五條　死亡者ありたる時は屆出義務者が其死亡を知りたる日より五日以內に左の諸件を具し、醫師の診斷書若くは檢案書又は警察官の檢視調書の謄本を添へて之を屆け出づるを要す。

一、死亡者の氏名、出生の年月日、男女の別及本籍地。
二、死亡の年月日時刻及場所。
三、死亡者が家族なるときは戸主の氏名族稱及戸主と死亡者の續柄。

前項の屆出期間は衞生のため特別の必要ある時は命令を以て之を短縮することを得。

第百二十六條　左に揭げたるものは其順序に從ひ死亡の屆出をなす義務を負ふ。

第一戸主、第二同居者、第三家主、地主又は土地若くは家屋の管理人同順位の屆出義務者數人あるときは其中の一人より屆出をなすを以て足る。

第百二十七條　死亡の屆出は死亡地又は死亡者の本籍地若くは寄留地の戸籍吏に之を爲すことを要す。

第十一章　養老

老人は既に社會國家に對して其の義務を盡し、一家經營・子女教育等の本務をも果したる最も尊敬すべき人なり。すべて人は老年期に入れば其の身體諸機關の作用衰へ、新陳代謝も鈍く、氣候の變化にも犯され易く、疾病に對す抵抗力も弱きものなれば、身體の保護に細心の注意を要す。其の精神作用に至りては、老人特殊の傾向を有するものなり。其の主なる點を擧ぐれば左の如し。

(1)老人は記憶力弱し。過去の古き事實は、比較的に明瞭に記憶するも、新らしき事實の記憶は特に鈍し。

(2)聯想作用單純にして、同一の事を繰返す風あり。

(3)思考の範圍は自己中心にて、自說を固執せんとする傾向あり。

(4)感情變化し易く刺戟性を帶ぶ。

此等の精神現象は、老人の神經中樞が既に老衰を來し、其の細胞の破壞せられたるに原因するものにして、常人の如く取扱ひ難きは當然なり。細胞の破壞は最早恢復すること能はざるものなり。されば老人の精神を過勞せしめず細胞破壞を防ぐは養老の根本問題なりといふべし。家族たるものは老人のいふ所稍〻不合理の點あるも、誠意同情を以て之に事へ、最も安らかに餘生を樂しましめんことを要す。

資料

老人の生理上心理上の特徵

(一)生理上　吾々人間は生理上から見て左の三期に分つことができる。

(1)成長期　新らしい器械の如く、各器官の活動盛にして、體質を消耗する分量よりも遙に多量の養分を體內に取り込む。體質を增加するを成長といふ。二十一歲乃至二十五歲頃までつゞく。

(2)壯年期　人生の最も重要なる時期で、其の活動の性質と分量とは、個人の運命と國家の運命とを支配するものである。

(3)老衰期　各器官のはたらき衰弱し、取り込む養分よりも排泄する老廢物の量が多くなり、體力銷沈する時代である。五十歲乃至六十歲頃から始まる。

老衰期になると、組織の組成分に變化が起る。即ち骨は無機鹽類の增加により脆くなり、軟骨は次第に硬く石灰質性となり、眼の水晶體は次第に其の彈力性を失ひ、筋肉は其の生氣を失ひ、毛髮は色素を無くし、神經細胞の核は小さくなる等の變化を起す。生活の建設作用は不完全となつて來る。

有機體は極めて複雜なもので、其の全體が平均的に老衰して死することは滅多にない。一部の機關の廢頽によつて全體の死を招くものである。他の部分の組織は適當の榮養さへあればまだ生存を全うし得るに、他に一部老衰した所があれば、まきぞへを蒙り全體の死を來すものである。最初に仆れる機關は心臟、血管、腎臟及び肺臟である。

老衰を豫防する方法（寺澤醫學士の說）

(1) 新陳代謝につき榮養の量と質とにつき科學的注意を拂ふこと。榮養の質につきては蛋白質を過食せず、含水炭素を主とし動脈の硬化を避くること。分量を適當にすること。排泄機能を十分ならしむること。

(2) アルコール及び煙草の爲め慢性中毒、白粉の爲め鉛中毒は動脈硬化の原因となる故之を避くること。

(3) 心身活動を適度ならしむること。身體の細胞は適度に働かせることにより若々しく保つことができる。

(4) 甲狀腺及び生殖腺の內分泌が老衰に關係あるものなれば、長く其の機能を旺盛ならしめるやうに注意すること。

(5) 精神を常に若々しくもつこと。

(二)心理上

(1) 記憶力が減退する。新らしい事項の記憶は鈍く過去に牢記せられた記憶は明確に再現する。

(2) 聯想作用が單純で同一事實をくりかへし、思考の範圍は狹く自己中心的にして固陋である。

(3) 感情が變化し易い。

年齡に伴ふ精神的變化　老齡に達すると精神作用は其の能率低下し、更に頑固といふ現象が起る。新らしい思想を理想的に了解したやうでも表面だけの理解で舊思想中に同化することができぬ。從つて感情も伴はず、實行にも現はれて來ない。

(1) 頑固は生れつきな人もある。此の種の人は教育の効果が少く進步も著しくない舊概念の改造に人一倍の骨が折れる。一旦改造されると又基礎が堅固で暗示に感じにくい。記憶は遲いが確實である。

(2) 習慣による。經驗の範圍が狹いと習慣は全く固定し概念が流動しなくなる。鑄

型にはまり込んでしまふ。新らしい境遇に順應することができぬ。

(3)年齢による。木は若い間は枝ぶりをなほすことが容易であるが、老いると中々撓められない。強ひて撓めやうとすると折れてしまふ。これは植物の有機組織の硬化する爲めである。人類に於ても、年をとれば有機體全體特に神經系も硬化する。神經の傳達なども遲緩になる。之に應じて精神方面にも融通がきかなくなる。即ち概念が硬化してしまふのである。

(1)舊時代を謳歌して現代の醜惡を罵る。

嫁と姑の態度一家の波瀾は此の心理に基づく。

(2)自ら時勢推移の必然的趨勢を自覺し、到底之に伴ふことの不可能なるを知りあきらめんとするもの。

(3)努力して時勢に順應せんとするもの。(中略)

老齢に伴ひ頑固になるのは人性の必然である。老齢にして頑固でないものは精神的に若いといつてもよい。之に反し若くして頑固なのは、精神的に老いて居るのである。(上野陽一氏能率の心理)

高島平三郎氏「家庭心理學講話」に曰く

(1)皺がよる、黒子(ほくろ)が出來る、背がかゞむ、頭ははげる、毛は白うなる。

(2)手はふるふ、脚はひよろつく、齒はぬける、耳は聞えず、目はうとうなる。

(3)くどうなる、氣短になる、愚痴になる、思ひつくこと皆古うなる。

(4)聽きたがる、死にともながる、淋しがる、出しや張りたがる、世話燒きたがる。

(5)又しても同じ話に孫ほめる、達者自慢に人を侮る。

老人は年々歳々親交ある朋友を失ひ、世に出でて爲すこともなければ常に無聊を感ずるものなり。さればなるべく其の心を勵まし、詩歌・音樂・書畫・骨董等の嗜好あらば之を樂ましめ、又時々舊友を招き接待饗應し以て其の樂を盡さしむべきなり。又新聞雜誌を好める人には之を讀み聞かせ徒然を慰むるも一法なり。

老人は經驗に富めるを以て、家政上の事件につき相談を爲し、其の判斷を請ふべく、殊に老婦人には家事に携はるを好むもの多きを以て其の意の存する所を察し、其の好意を受くべし。何事にも干與せしめざるを以て心を安んずる所以なりと思ひ誤りて除外するは、却つて老人の感情を損し親愛の情に悖

るものなり。但し、要なき心配事は徒に精神を勞せしむるものなれば知らしめざるをよしとす。

資料

我が美風を捨るか

日本では新婚の若夫婦は舅姑の古參の夫婦と別居するのを以て理想とする。その理由に曰く。

「舅姑は過去の人。その思想や頑迷固陋總て退嬰主義。新婚の若夫婦は將來の人その抱負や廣遠偉大到底古老の窺ひ知る所にあらず。故に新舊別居して思想の衝突を防ぐに若くなし。先進の西洋に於て已に然り。」

と、私も今の今まで左樣に信じて居ました。自分の娘を他に嫁せしむる時は、その新舊の別居を唯一の條件となさんと、滿身の勇を雙の腕によせて力んで居た。そして先進の西洋見物に出かけた處、これはしたり、老いたる父や老いたる母を、乳母車に乘せて新婚の若き夫婦が後を押して公園を散歩するのを見る。時によると、デパートメント・ストアーにてさへ見る。さても不思議と、これを彼の國の識者・學者・教育家・宗教家などにきいて見れば、

「あれは近年の新らしい試みだ。」と答ふ。然らば、

「善い試みか惡い試みか」ときくと、

「それやよい試みだ。」と答へる。然らば、

「今後盛んになるであらうか。」ときくと、

「盛になるであらう。是非盛んにしたいものだ。」

と答へる。おや〳〵日本では新夫婦はなるたけ舅姑に遠ざかるやうにすることこそ思想の衝突を避けてお互に幸福を得る最新最上の策とするのであるがといふて見たかつだ。

老親を乳母車に乘せて若夫婦が押しまはる西洋の新らしい試みは、日本では老父母の手を若い夫婦が左右から取つて寺參りをする古い式だ。彼の國では新らしい試みだといふが、日本では珍しい型でない。けれども日本では此の美風が次第に減じて往くに西洋では新らしく流行しかけて居る。此の勢ひで進めばあちらでは次第に新舊夫婦が別居するのが少くなるであらうに日本では或は次第に別居論が勢力を得るかも知れない。（岸邊福雄氏　親のため子のため）

老人の身體的方面の奉養に對しても心得べき點頗る多し。

(一)衣服　老人は生活力鈍く、從つて體溫を發すること少なく、寒氣を感ずるものなれば、其の衣服は輕くして暖かなるをよしとす。襯衣の如きはフラン

ネル又は軟かなる木綿類を適當とし、其の他の衣服は絹織物を可とすれども、經濟上許さゞる所にては木綿類中其の地質の軟かなるものを選ぶべし。

(1)老人の衣服は常に清潔ならしめ、決して垢つき、汚れたるものを用ひしむべからず。

(2)老人は容貌引立たざるものなるを以て、外貌の整正に一層の注意を拂ひ衣服の色合・柄合等は老人の意に適するものを選ぶべし。

(3)肩掛・頭巾手袋・足袋等も老人の好む所に從ひ不自由なからしめんことを要す。

(二)食物　榮養に富み消化し易き食物を選び、其の嗜好に適するやう調理するを要す。

(1)食品は老人の嗜好にもよれど、蛋白質を多くするよりも、寧ろ粉質性のものを多くすべし。

(2)老人は一回に多量を食するよりも、適度の量を數回に食するを好むものなれば、三食の外に適當なる間食を與ふるをよしとす。

(3)刺戟性の飲食物を過量に用ひしむるは害あるものなれば、其の適量を用ひしむることに注意すべし。

資料

六十歳を過ぎると生活機能に衰退の徴候を現はす。故に食物は其の成分に於ても分量に於ても注意を要する。壯年期の如く多量の食物を攝り、或は美食に耽る時は之を處理する力に乏しい爲めに消化管内に於て長く食物が停滯することゝなり、醱酵腐敗し、有害物質の產出を多からしめるやうになる。吸收した養分を同化する機能も減退して居るので同化せざるまゝ堆積し、諸機關の活動を鈍らせる。肝臟病・腎臟病・動脈硬化症等の老衰病の發現を早からしめる。肝臟・腎臟・血管等を刺戟する成分を多量に含める獸鳥肉等を少くし、酒は避ける方がよろしい。

(三)居室　(一)居室は閑靜にして日當りよく、庭園に面したる所をよしとす。(二)二階は昇降に不便なるのみならず、危險の伴ふものなるを以て之を避くべし。(三)室内の裝飾には老人の嗜好を察し、風雅優美にして適當なる裝飾品を選び消閑の具に供すべし。(四)便所は必ず居室の附近に設けざるべからず。

(四)運動　老人は常に運動不足に陷るものなるを以て、朝夕近隣を散歩し、又花見・納涼・觀月・神社佛閣の參詣等に時々誘引し、外出の機會を多からしむるは

心身の保養上に大切なることなり。

其の他、子守・家事に關する事等自ら之を執らんとせば、喜びて之を托すべし。之れ運動の爲めにも無聊を慰むる上にも有效なればなり。

(五)睡眠　睡眠は心身の休養に缺くべからざるものなればなるべく多くの時間を與ふべし。

老人は眠り難かるものなれば被衾を輕く暖かに調製し、敷布は屢洗濯し氣持よく寢に就かしむべし。

資料

老人に對する奉養

- 精神的
  - (1)敬愛　溫情を以て仕へ、敬愛の誠を致す。
  - (2)同情　持殊の心理的傾向あるも之を抱容しさからふことなく同情を以て之を迎ふ。
  - (3)娛樂　新聞雜誌・演劇其の他の趣味に應じ娛樂的欲求の滿足をはかる。
  - (4)相談　家事上のことを相談し干與せしむ。
  - (5)安心　家運の發展につとめ老人をして心を安んぜしむ。軟くして保溫性に富めるもの。
- (1)衣服　榮養に富み消化し易く嗜好に適するもの。
- (2)食物
- 身體的
  - (3)居室　閑靜にして日當りよく眺めよろしき所。
  - (4)運動　庭園・近隣の散歩神社佛閣の參詣等。
  - (5)睡眠　氣持よく睡眠するやう夜具に留意すること。
  - (6)入浴

孝道

- 從順
  - (敬の精神に基づく)　…誠意命令訓誡を奉ず。
  - (愛の精神に基づく)奉養
    - 心養
      - 對父母…志を奉じ心を安んぜしむ。喜憂を共にし不善を諫む。
      - 對自己…身を修め業を勵み志を遂げ廣く社會の爲めに貢献す。
    - 體養
      - 常時…衣食住・嗜好・娛樂を十分ならしむ。
      - 非常時…病氣の看護。老後の扶養。

第二篇　育兒

第一章　婦人衛生

女子の身體は男子と異なり、母たるべき骨骼及び機關を有す。女子の成熟し、嫁して妻となり、母となるに至る特別期間を左の三期に分つ。

(一)青春期　普通十二歳より十九歳までの間(平均十四五歳)に於て月經通じ來る。

(二)成熟期　身體の各機關は二十歳より二十二三歳の間に於て成熟す。姙娠は三十二歳前後に最も多し。

(三)更年期　四十五歳乃至五十歳前後の排卵作用・月經機能の全く消滅する時期をいふ。

資料

女子の身體　女子は身體の割合に頭が大きく、胴は比較的に長く、脚と腕とは短く、腿は太い。臀部の直徑及び其の周圍は比較的に大である。腿の內面に傾いて居るのは

骨盤の廣い爲めである。毛は或る部分に集中して居て一般に長い。內臟の如きも胸部內臟は男子に劣るが腹部內臟は女子の方が大きい。かくいろ〳〵の差異があるが男子と女子との身體の根本的區別は生殖腺の差異によるのである。之を第一次の性徵といふ。此の第一次の性徵から身體的に精神的に各種の區別が生じて來るのである。女子の生殖器は之を大別すると內生殖器卽ち骨盤の內に潛在する部分(膣・子宮・喇叭管・卵巢)と、外生殖器卽ち外陰部と及び乳房とから成立して居る。

成熟期　破瓜期ともいふ。女子十三歳乃至十四歳になれば幼年期に於ける習慣を脫し、其の性質が一變する。卽ち全身著しく脂肪の蓄積を來して肥滿し、臀部は甚だしく大きくなる。外陰部は豐隆して疎毛を發生し、乳房は著しく變化し、子宮體部も肥大し月經の來朝を來す。精神上にも異性に對する感情を變じ、戀愛耻羞の念を生ずるやうになる。月經の初めて來る時期を初經又は初潮期といふ。我が國の婦人は平均十四年八ケ月乃至十ケ月である。初潮の年齡は種々の事情でちがふ。

(1)氣　候　寒冷地は遲く溫暖の地方は早い。

(2)生活狀態　一般に上流社會の婦人は初經早く下層社會の婦人には來ることが遲い。

(3)風　俗　都會の住民は田舍の婦人よりも早い。

(4)體　格　弱い人は比較的に早く農婦の如き體格佳良なるものには遲く來る。

（調査者）	（調査人員）	（初經平均年齢）
濱田氏	一〇一五人	十四歳八ケ月
緒方氏	一八八七人	十四歳九ケ月
東京帝大	一〇一五人	十四歳十ケ月
楠田氏	一二五〇人	十四歳七ケ月
山崎氏	一五八五人	十四歳十一ケ月

閉經期　更年期ともいふ。生殖器萎縮に傾き月經閉止する。月經閉止の時期も亦一定せず。四十年乃至五十年である。一般に初經の早かつた人は閉經期が遲い。月經の發現より閉經期の間は生殖期間で、其の期間は三十年乃至三十五年である。女子として最も重要なる期間である。

女子としての特別なる生活は、排卵及び月經機能の發達と共に始り、又其の閉止と共に終る。其の期間約三十年にして、其の持續の長短は人種・氣候・遺傳體質・榮養狀態等によりて同じからず。

凡そ人の生涯中何れの期間と雖も輕重の別あることなし。然れども此の特別期間は心理的にも生理的にも女子の特質を發揮する最も意義ある期間なりといふを得べし。而して其の身體の健否は家庭の安寧・幸福に關すること大なるのみならず、延いては國運の隆盛に深き關係を有す。されば女子たるものは、平素より其の健康の增進に注意するは勿論月經開始前より特別の攝生法に通ずるを要す。

資料

成熟期に近き女子の特別攝生法。

(1)此の時期の子女はなるべく居室から出でて外氣・日光の下に肉體的運動を規則的に行はしむるがよい。但し既に全身に大變化が起りつゝあり容易に疲勞するものであるから、運動遊戯の弊に陷らざるやう調節するを要する。

(2)生活法に關しては、出來得る限り之を規律的とし、就床・離床・飲食の時間等は之を一定して勵行せしむること。

(3)慢性便秘の豫防としては、左の諸件を守らしむるがよい。

(イ)一定の時間に必ず上圊せしむること。

(ロ)糞便量を增す爲めに植物性食餌を主とし、肉類・卵・牛乳・蛋白質に富む食餌は之を

副とすること。

(八)飲料としてはアルコール・コーヒ・茶等を禁じ、單水・單湯・牛乳等を與ふること。

(4)衣服は寛濶なるものを用ひ厚著せしめず、コルセットなどは用ひざること。就眠時には全然寢卷と取替へしめ、寢具は清潔なるべく時々日光にさらすこと。

(5)十三歳前後に至らば月經に關する知識を與ふること。

(一)月經　月經は二十八日卽ち四週間毎に毎月繰返して起る所の子宮出血にして生理的現象なり。

資料

月經の型。　月經は二十八日毎に反覆せられるのが常規であるが、生理的に多少の動搖がある。

(1)整調　一定の週期を以て反覆するもの。

(2)前進型　週期が二十八日より短きもの。

(3)後進型　週期が二十八日より長きもの。

持續時間。　平均三乃至四日である。

月經血の性狀。　暗赤色で常に體部・頭部・陰部の分泌物・剝落上皮及び細菌等を混じ、含水量は靜脈血より多く、一種特有なる臭氣がある。凝固し難い。

月經の生理的意義。　未だ確定說はない。重なる說は左の二つである。

(1)月經前の腫脹は、受胎せる卵子の著床準備なりとし、卵子受胎せざる場合に於ては其の粘膜より出血卽ち月經を來し、其の著床準備を破壞するものであるとするもの。(受胎せざる卵子の流產)

(2)月經時に子宮粘膜に創面を生ずるは受胎せる卵子の著床に好都合であるとするもの。(卵子の著床に對する自然の切開)

月經時の症狀。

(1)全身的症狀　時に却つて心身爽快を覺え、活動力寧ろ增加することあるも、多くは不快の感・疲勞・倦怠の感・神經過敏・頭重・偏頭痛・憂鬱又は興奮狀態・氣分の變化等の症狀を呈す。犯罪的又は異常行爲をする傾向がある。

(2)局所的症狀　下腹部の重感・緊張感・膀胱及び直腸の壓迫感・薦骨又は下腹痛・分泌增加等が其の著しいものである。

(3)隔遠症狀　乳房の腫脹・乳嘴及び乳暈の著色・唾液分泌增加・食欲亢進又は不振・惡心・嘔吐・口內異臭・下痢・腸內瓦斯の發生增加・心悸亢進・脈搏不整・發汗・四肢厥冷・關節痛・鼻粘膜及び甲狀腺腫脹・視神及び聽神障碍・生殖慾興奮等が其の著しいものである。

(白木醫學博士婦人科學による)

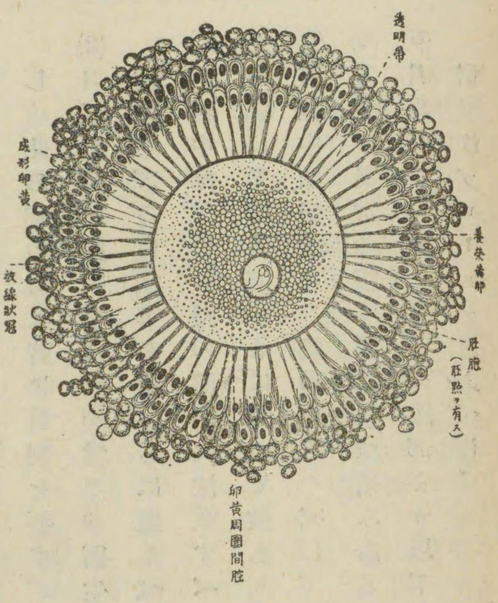
(二)排卵　月經豫定日の少しく前より成熟せる卵が、卵巣中の卵胞を離れて排出せらるゝ作用なり。

凡そ卵が成熟して排卵の期に近づく頃には子宮内に於ては、其の卵を止めて孕育せんが爲め、子宮粘膜は著しく肥厚し、其の血管は充血して粘膜は柔軟となる。成熟して卵巣より排出せられたる卵は喇叭管に入るも姙孕せざる時は子宮内に充血したる血管は破れ、粘膜の表面を破りて子宮外に流出す、これ卽ち月經なり。かくて四五日乃至一週間を經過せば粘膜は充血去りて舊態に復す。而して姙孕せざる卵は月經血に混じて消失するも、姙孕したる卵は子宮内に止まり發育して胎兒となる。

女子たるものよく此の理を明らかにし、不攝生のことなきやう注意するを要す。

資料

排卵機能。　卵巣から卵子の排出せられる機能をいふ。卵巣皮質にあるグラーフ氏濾胞が漸次成熟すると、其の濾胞液の增加によつて卵巣表面に隆起し、濾胞壁は益〻緊張して菲薄となり遂に破裂するのである。さうすると卵子は濾胞液と共に腹腔内に出



卵子

で喇叭管の蓐絲によつて受容せられ、遂に喇叭管を通じて子宮内に輸送せられる。

排卵と月經との時間的關係。

種々の研究の結果從來殆んど一般に承認せられて居た排卵と月經とは時間的に全然又は殆んど相一致するとの說は否認せられ、今日に於ては排卵は月經時以外の一定の時期に於て起るとの說が承認せられるやうになつた。然し此の一定の時期については諸說が未だ一致して居ない。其の重なる說は左の如くである。

(1)月經開始後第十一日乃至二十六日迄の期間平均十八九日目なりとするもの。

(2)月經直後より第十四日迄の期間なりとするもの。

(3)月經開始後第十四日より第十六日目迄の三日間なりとするもの。

萩野博士は、排卵の時期は豫定月經前第十六日より第十二日迄の五日間とし、就中第

十三日前後に於て最も屢行はれると主張されて居られる。

以上何れの說も兩月經期の中間に起るものであるとする點に於ては大體一致して居る。

婦人衞生上注意すべき點左の如し。

(1)月經前は多少體溫に變動あるを常とす。從つて寒冒に犯され易し。故に大に注意を要す。又月經時には感情激し易く從つて判斷を誤る人多し。此の種の人は特に自制を要す。

(2)月經時には脫脂綿及び適當なる衞生帶・丁字帶等を用ひて處置すべし。消毒せざる塵紙等を用ふるは避くべし。

(3)月經中は持に身體の清潔に注意すべし。長き入浴は禁ずべきも、新らしき湯に暫時入浴するは却つて效あり。

(4)月經中は過激なる運動を避くべし。殊にダンス等は避けざるべからず。

(5)月經中異常の腹痛・頭痛及び惱みあるものは專門醫の診斷を受くべし。

(6)月經時ならずとも常に腹部より以下を冷さぬやう學校に於ては必ず股引又はヅロースを用ふべし。

(7)少女長ずるに從ひ、乳房・臀部急速の發達を見る時は月經期の近づけるを示せるものなり。されば母たるもの豫め月經の意味其の衞生法につき敎示する所なかるべからず。

資料

月經時の攝生

(1)精神を安靜ならしむること。月經時には普通精神的緊張力遞降するものであるから精神的安靜に留意しないと全身狀態及び生殖機能に障碍を來すことがある。

(2)身體を安靜ならしむること。肉體的の緊張力が減退して居るからである。

(3)外陰部を淸淨ならしむること。但し膣洗滌を行ふべからず。

(4)月經帶の淸淨なるは勿論、外陰部に直接するガーゼ又は綿花は無菌的なるを理想とし、且つ陰挺を刺戟せざるやう留意すること。

(5)テニス等强き運動を避くること。(白木醫學博士婦人科學科・盤瀨醫學博士新撰產科學による)

月經時と犯罪　月經時には肉體的に種々の變化を生ずるのみならず、精神上にも變化を來し、神經過敏となり、興奮し易く、自制心を減ずるに至るは周知の事實である。然るに斯の如き生理的・心理的變化は犯罪と密接なる關係を持つて居ることに注意

しなければならぬ。佛人某氏の統計によれば、或年、巴里の都で行はれた貴婦人の萬引(窃盗)五十六人中の三十五人は月經中の女であつて、更に其の内十人は月經初期者であつたと云つて居る。伊太利の學者某氏の調査によると、警察の厄介になつた八十八人の女の中、月經時で無かつた者は僅かに九人に過ぎなかつたと云ふことである。

此等の統計を以て見ても、月經時と婦人犯罪には頗る密接なる關係のあることが判明するが、月經中に萬引をなす者の多くは、生來の不良者では無く月經時の一時的變調の結果、刺戟に抵抗する力が弱くなり、殊に女の注意を惹き易い裝身具、衣服等に誘惑され易く、殆んど夢幻的狀態で犯罪行爲すに至るのであるから、此の時期に於ける婦人は特に注意を必要とする。

月經の直ぐ後には性慾の昂進するものであるから、異性の誘惑に對する抵抗力が弱い。從つて私通、姦通等が行はれ易い。殊に月經の閉止期に於ける婦人は、身心に種々の變調を來し、強烈な性慾の興奮を見るのみならず、財物に對する欲望も強い年齢であるから、性慾關係の犯罪と財産關係の犯罪の双方を犯し易いのである。

(大久保靜平氏婦人の法律と經濟)

第二章　姙　娠

姙娠とは姙孕卵(にんようらん)が子宮内に包容せられ、胎兒として發育する狀態をいふ。女子が姙娠する時は身心に種々の變化を來すものなり。身體的方面の變化の主なるもの左の如し。

資料

姙。娠。　姙娠とは婦人が受精せる卵子即ち生殖作用を營みたる卵子を自己の體内に包藏する狀態をいひ、其の婦人を姙婦といふ。而して姙娠は卵子と精虫との結合即ち受精(受胎、受孕、姙孕)に始り、其の卵子の排出に終る。(磐瀬醫學博士新撰産科學)

姙。娠。の。徵。候。

(一)不確徵　姙娠でなくともかゝる現象を起すことがあるから、此の現象ありとて直に姙娠なりと斷定することはできぬ。

(1)惡心、吐逆、嗜好の變化、唾液分泌の增加、便秘、呑酸等。

(2)頭痛、眩暈、全身倦怠、精神憂鬱、神經痛、齒痛等。

(3)皮膚の着色、姙娠線、浮腫、靜脈瘤等。

右のうち有力なる徴候は惡心・嘔吐・嗜好の變化等である。

(二)半確徴　前者よりも有力なる姙娠徴候である。

(1)月經の閉止。

(2)子宮の增大其の硬變彈力性減少。

(3)子宮膣部及び膣粘膜の鬆粗柔軟となり、帶紫赤色に著色すること。

(4)乳房の變化卽ち肥大、乳暈乳嘴著色、初乳の分泌等。

(三)確徴　胎兒の心音の聽取胎動の感知等姙娠の確實なる徴候である。

姙娠の徴候ある時は、產科醫に診察をして貰ふがよい。後分娩に至るまでの間も時々診察してもらつて其の發育狀態の順當なりや否や、又位置等に變動なきや、大に注意すべきである。

(一)惡阻　早朝空腹時に於て水の如きものを吐き、又時として毎食時に吐逆す。其の他平素嗜好せる飲食物を嫌ひ、却つて好まざりしものを喜びて食す。之を惡阻(つはり)といふ。

惡阻は姙娠初期末卽ち第二ヶ月に現はれ、長くも三四ヶ月にして減退す。時としては姙娠後半期に及び甚だしきは少しも攝食するを得ず、爲めに衰弱に陷ることとあり。

資料

姙娠の消化器に及ぼす影響。

(1)食欲は增進するが常である。殊に姙娠後半期に於て然りとす。然し時としては食欲不振を來すことがある。

(2)嗜好の變化　平素嗜むものを嫌惡し、酸性の食物を好むに至る。

(3)惡心　早朝空腹時に惡心を來すことは一般である。姙娠前半期に多く且つ强い。

(4)嘔吐　早朝空腹の際に起ることが多い。又食事に際して來ることがある。初姙婦に殊に多い。姙娠後半期に達すれば多くは消失する。通常此の嘔吐の爲め榮養及び食欲の障害を來すことはない。然し時としては嘔吐の頻繁なるより榮養障害を來し、所謂惡阻に移行することがある。

惡阻。　つはりといふのは「言海」などには選食の義なりとある。女子が姙娠して食物に好惡を生じ、酸味のものを好むことを意味して居る。姙娠して惡心・嘔吐を起すのを通常つはりといつて居るのである。それが一層增進すると、食後に嘔吐するのみならず、空腹時に食物を見るとそれで吐逆し、身體の衰弱日に加はり渴を訴へること甚だしく、下腹が舟狀に陷沒して疼痛を覺え、發達し、脈膊は頻數細小となり、精神朦朧として譫語を發するやうになり、死に至ることがある。

(二)皮膚の變化　一般に浮腫せるやうに見え、顏面少しく痩せ、其の色蒼白にして黃色を帶び、眼窩の周圍に暗色の輪を生じ、顏面及び胸部に雀斑を生ずることあり。人によりては平日と異ならざるのみならず、却つて肥滿し活潑となることあり。

資料

(1)皮膚の各所に色素が沈着する。例へば乳暈が暗黑色となるが如きである。

(2)皮膚靜脈は乳房、下肢、肛門、腹壁等に於て開張し、時としては靜脈瘤を形成することがある。

(3)姙娠後半期には壓迫症狀として下肢及び外陰部に浮腫を來すことがある。

(三)月經閉止　姙娠中は月經閉止するを通例とす。

(四)乳房の變化　乳房に輕き疼痛を覺え、乳腺次第に發達し、之を搾れば薄き水の如きものを生じ、漸次乳暈を見る。

資料

(1)姙娠二ヶ月頃から充血腫脹し、腺組織も亦漸次肥大增殖し索狀又は結節狀となり乳房は甚しく緊張するに至る。之を壓搾すると漿液性の液を漏出する。之を初乳といふ。

(2)乳暈は暗黑色となり、其の大さ擴張し其の內に多數の皮脂腺が隆起する。

(3)興奮性增加し、少許の刺戟にも容易に乳嘴が勃起する。

(4)乳嘴は著しく腫脹し、强度の色素が沈着する。

(五)胎動　姙娠五ヶ月以後は胎兒の運動を感知するに至る。

(六)其の他　以上の外頭痛、齒痛、腰痛等身體各部の疼痛を覺え、便通は秘結又は下痢し、口腔には潰瘍を生じ、齒齦炎を起すことあり。尿意頻繁となることあり。

資料

秘結　便通數日間停滯し排便困難なること。

潰瘍　口腔粘膜の一部が浮腫しつぶけること。

齒齦炎　はぐきが腫れて炎症を起すこと。

尿意頻數　小便にさい〳〵行きたいこと。

姙娠は又精神上にも種々の變化を來し、平素活潑なる人が憂鬱となり、沈着

なる人が快活となることあり。概して氣分變化し易く、容易に怒り、泣き、笑ひ又著しき原因なきに神經をなやますことあり。

資料

女子は感動し易し　女子は男子よりも、特に精神に身體の影響され方が一層強い。これを女子の感動性といふ。例へば、赤面は女子の方がよくする。これは血流の嵐であつて、外來の刺戟に血管運動神經が興奮され易いためである。又女子は男子よりもよく笑ひ、よく泣く。これも神經の發作的作用で、詰り感じ易いからである。女子はよく口を尖らしたり、額に皺を寄せたり、色々に顏を動かすものであるが、これも顏面運動神經が刺戟され易いからである。喫驚することも、女子の方が強い。大抵の娘は蛇など見ると、大聲を揚げて逃げ、動悸もひどい。又よく恐ろしがつて、氣絕することがある。神經病の一なるヒステリーも女子に多い。天氣や氣候の工合も、女子の氣分に強く徹へる。

斯樣に女子の感動性は男子よりも強く、精神の影響が強く身體に徹へる。其の理由は左の如くである。

(1) 女子の血液は男子ほどに濃厚でない。血液中精力を蓄ふる赤血球の數が、男子では一立方ミリメートルに凡そ五百萬といふのに、女子のは四百五十萬位である。

隨つて女子には多少貧血の傾がある。この事は女學校の式場などで、生徒の倒れることがよくあるのでも分る。加之月經や出產も血を失はれる。かやうに女子は貧血の傾があるから、從つて男子よりも神經が稍薄弱で、感じ易いのである。

(2) 男子は生理上言はば平坦な道を歩るいて居るが、女子は波形に歩く。月經はその波動の頂に達した時である。血液の濃度も、年齡により、又月經のある時と、ない時とによつて違ひがあつて、男子よりも波瀾がある。從つて、女子は男子よりも氣分が動搖し易く、機嫌が變り易すい。特に月經時は身體も精神も其の影響を受けて感動性も一層強いのである。

(3) 胃とか腸とかいふ腹部の臟腑の工合が惡るいと、餘程感情に徹へるものであるが女子は男子よりも腹部の臟腑が割りに大きい。これが又女子の感動性を強からしめる一つの有力なる原因である。就中女子の生殖機關は、大に之に與つて力あるものである。それで生殖機關を取つて除けると、女が男のやうな性質になる。即ち生殖機關は、心身ともに、女子を女子たらしむる主要な原因である。

妊婦は特に感動し易し。

(1) 妊娠中は「我が血の溫き波より生の芽は出づ」といはるゝ如く、我が血で胎兒の身體を作り上げるので、母體の精力は大に其の方に吸收されるから、一體に妊娠中は身

體が弱り眼は落ち、頰はこけ、體軀は痩せ、神經も薄弱になる。其の上に常よりも餘計に、腹に子といふものが潛んで居るからそれだけ餘計の刺戟影響を身體は受けることになる。それ故、唯さへ感動性の強い婦人が、姙娠中は一層感易じくなるのである。從つて平常の時には平氣で居られたやうな他人の言動も、姙娠中には氣になつたりして、心を痛め、身體にさし響く。

(2) 身體の機關中、生殖機關は特に感情や想像の影響を受け易いものである。挑發的の小說などは、想像を促がして、青年を墮落さすことは珍らしくない。女子でいへば、何か心配があると、月經が止まつたり、喫驚すると生殖機關に痛みを覺えたり、出血が强くなつたりする。又子宮病はヒステリーの原因たるよりも、結果たる方が多いと云はれて居る。

又乳房は生殖機關と密接な關係があるもので、姙娠すると、乳房の內部に變化が起つて、膨れ、出產すると乳が出る。それで、乳房は生殖機關の一部であると云つて居る學者もある程である。この乳房は、精神の變動から、隨分大なる影響を受けるものである。乳は、母の精神が平隱でないと、良く出ないものである。

精神の變動は唯乳の分量を變ずるのみならず、また其の成分を變ずることがある。

生殖機關と密接の關係ある、又は其の一部とせられる乳房がこの通りであるとすれば、生殖機關が如何に强く精神の感動を受けるかは、推測するに難くあるまい。生理上女子の女子たる所以は、其の生殖機關にありといつてもよい位で、女子の感動性の强いのも、この機關が預つて大に力のあるものである。生殖機關が女子の强き感動性の原因たるのみならず、感情は又生殖機關に大に影響するのである。即ち、餘り心配したり、悲しんだり、喫驚したりすると、流產することがある。流產せぬまでも、胎兒にはそれだけの利目はあるので、流產といふ形に現はれないでも、出來た子に好くない影響を及ぼす。これに反し、精神がいつも愉快で、平和であれば生殖機關も順當に働いて、胎兒も順當に育つ譯である。（下田文學博士胎教）

姙娠の持續日數は四十週即ち二百八十日を普通とす。姙娠の一ヶ月は太陽曆の一ヶ月と異なり、二十八日を以て一ヶ月とす。故に四十週は姙娠十ヶ月に相當す。之を基礎として分娩の時期を算し得るなり。

最終月經の第一日より起算し、二百八十日に相當する日を分娩豫定日とす。推算に便利なる爲めには通常最終の月經の第一日に九ヶ月を加ふるか、又は三ヶ月を減じ七日を加へて分娩期日を豫知するなり。例へば五月四日を最

終月經の第一日とせば翌年二月十一日は分娩豫定日なるが如し。

資料

分娩豫定日を計算する法

(一)胎動を自覺せる初日より計算する法　胎動の自覺は初姙婦は第二十週卽ち五ケ月の終に於て始めて知り、經產婦は之より一二週早く自覺するものである。故に此の自覺より約二十週卽ち曆日の四ケ月と二十日の後を以て分娩の豫定日なりとするものである。然し胎動の自覺は、人によつて異るものであるから、之による推定は不確實である。

(二)最終の月經日より計算する方法　最終月經の第一日から起算して、分娩日に至るまでを通常二八〇日として居るのである。分娩の時日を算出するには最終月經の月數から三ケ月を減じ、又は九ケ月を加ふる時は出產月を知ることが出來、最終月經の第一日に七日を加へると其の出產の日を知ることが出來る。

(例一)　最終月經が十月七日の人の分娩豫定日

10月　7日
−3　+7
7……出產月　14……出產日
卽ち七月十四日が分娩豫定日である。

(例二)　最終月經が二月五日の人の分娩豫定日

2月　5日
+9　+7
11……出產月　12……出產日
卽ち十一月十二日が分娩豫定日である。

東京帝國大學醫學部で六千六百九十六人の產に就ての統計によれば、

豫定日に一致したるもの　八%

豫定日の前後一週間內に生れたるもの　五三%

で、之を通計すると、一〇〇人中六一人となるわけである。(磐瀨醫學博士新撰產科學)

第三章　胎兒の發育

姙孕卵が子宮粘膜に固着するや、粘膜は卵を包被し、卵は外面の絨毛より榮養分を攝取す。二ケ月末には絨毛消失し胎盤形成せられ、胎兒は其の腹壁より胎盤に通ずる臍帶と稱する紐により榮養分を攝取し、排泄物を返還す。

胎盤は其の質海綿の如く、鬆粗(すうそ)にして、扁平なる圓形又は楕圓形を爲し、胎兒

に對しては呼吸・消化の二作用を掌るに極めて大切なるものなり。

臍帶は胎兒の臍輪より出でて胎盤の胎兒面に附着し、其の長さは普通胎兒の身長に等しく、二個の臍帶動脈管と一個の臍帶靜脈管とを有す。臍帶動脈管は胎兒の體内を循環して暗赤色となりたる血液を胎盤に輸送す。胎盤にては毛細管となり、血液は其の中を流るゝ間に、母體より酸素及び滋養分を攝取し不必要なる成分を母體の血液に與へ鮮紅色となりて臍帶靜脈管に集まり臍輪より胎兒の體内に入り、循環して胎兒の發育を遂げしむるものなり。

卵膜中の液を羊水といふ。羊水は初は透明なる水の如き液なるも、後には胎兒の排泄物により混濁するに至り、一種の臭氣を有し、姙娠末期には胎兒の皮膚に生ずる胎脂を混じて白き粘を絮片を混ず。其の量は大約五合五勺あり。

羊水は胎兒及び胎盤に受くる壓迫を防ぎ血液循環の妨げなからしめ、又胎兒の運動を自由ならしめ、且之を母體に柔かに感ぜしめ、胎兒の皮膚の密着せる處又は胎兒と卵膜と密着せる所に於ける癒着を防ぐ。分娩に際しては其の粘滑の性によりて胎兒の產道を通過することを容易ならしむるものなり。

資料

胎兒の情態　胎兒は、初めは肉眼では見ることの出來ぬ位小さいのであるが、日を經るに從ひ漸次大きくなり、遂に生れる時の情態になるのである。胎兒は、卵膜の中に居て、羊水中に生活し、腕は胸の所で組合せ、下肢は腹の方へ曲げて居る。胎兒と母體との連絡は胎盤で保たれて居る。胎盤は一方は母體の子宮内面に連絡し、他の一方は臍帶によつて胎兒に連絡して居るのである。胎盤の附屬物は四つある。卵膜、胎盤、臍帶、羊水即ちこれである。

卵膜　卵膜は、脫落膜、脈絡膜、羊膜の三つから成り、胎兒と羊水とを包む。

(一)脫落膜　受胎した卵子が子宮腔内に著床すると、子宮粘膜は肥大增殖し、鬆粗柔軟となり、非常に肥厚するものである。此の增殖肥厚し、卵子を圍繞せる子宮粘膜を脫落膜といふのである。脫落膜は之を左の三に分けることができる。

(1)床脫落膜　卵子の附著せる部分で增殖最も甚しく、脈絡膜と共に胎盤を構成するものである。基底脫落膜ともいふ。

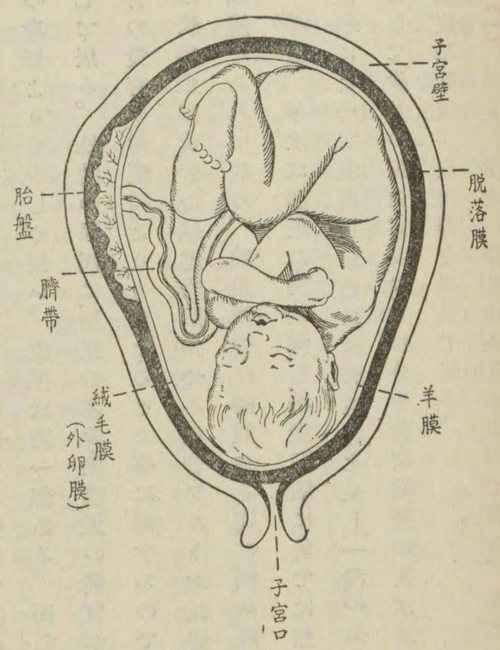
(2)包被脫落膜　卵子の子宮腔内に隆起せる部分を包圍するもので、翻轉脫落膜ともいふ。

(3)壁脱落膜　子宮内面を一般に被ふ增殖せる子宮粘膜をいふ。壁脱落膜は、姙娠第二ケ月時には、厚徑一糎に達する赤色の膜であるが、胎芽の發育に從ひ、壓縮せられ包被脱落膜と癒合し、一乃至二粍に壓縮せられ胎兒分娩の際、共に排出せられ、一部分は産褥中に惡露と共に出づるのである。壁脱落膜は又眞脱落膜ともいふ。

(二)脈絡膜　絨毛膜ともいふ。脱落膜と羊膜との中間に位する膜で、羊膜と共に胎兒に屬する卵の外被である。受胎した卵子が子宮内に來ると、其の粘膜が著しく增殖し卵子を圍繞するのであるが、卵子の全表面には小さな絨毛が生ずる。其の狀恰も栗のイガの如く、此の絨毛は、床脱落膜及び包被脱落膜内に樹根狀に進入する。而して姙娠第三週頃からは、微細なる毛細管を傳導して母體と胎兒との血液交換即ち榮養を司るのである。此等の絨毛は中間膜なる絨毛膜即ち脈絡膜の初めとなるものである。絨毛中包被脱落膜の部は萎縮消耗するも、床脱落膜の絨毛は枝梢の如く分岐し、子宮粘膜の卵子の發育部位に著しくなり、遂に胎盤を構成するに至るのである。

(三)羊膜　第三層の最内卵膜で、透明菲薄の膜である。胎兒の外腹壁の連續で胎盤の胎兒面を被ひ、臍帶の外面を被ひ、胎兒の臍部に至るものである。

胎盤。　胎盤は卵子の絨毛膜の一部分と、母體の脱落膜の一部分との肥厚せるものが相合して成れるものであつて、其の質は海綿の如く、鬆粗である。其の形狀は扁平で圓



形又は楕圓形をして居る。直徑は一五糎乃至二〇糎、厚さは中央に於て平均三糎、邊緣に於ては〇.五糎乃至一糎、重量は平均五〇〇瓦ある。重量は胎兒の大小に從つて異るもので、胎兒重量の一に對し、胎盤重量は〇.五五である。

胎盤は、子宮壁に附着せる母體面と胎兒に對する胎兒面とを區別することができる。母體面は其の色暗赤色表面は粗糙で凹凸がある。大小不等の分葉に分割せられ、其の間に溝がある。又所々に灰白色乃至淡黃色の結締織を見るべく、時としては石灰の沈着を認めることもある。

胎兒面は平滑で其の色は淡灰色である。容易に剝離することを得る羊膜で被はれ其の中央部に臍帶が附著し、此の附著點から臍動脈は放射狀に出て居るのである。

胎盤の附着部は通常子宮體の前壁又は後壁であつて、側壁に附著するものは至つて

少ない。姙娠末期に於ては、其の下縁は、内子宮口の上方五糎乃至一〇糎のあたりにまで來る。

胎盤は胎兒の發育に關しては最も大切なるものであつて、臍帶により胎兒と母體とが連結せられ、呼吸・榮養及び排泄の作用を爲すものである。即ち血液によつて榮養や瓦斯體などの交通をして居るのである。

臍帶　臍帶は胎兒と胎盤とを連結する索條で、其の長さは五〇糎乃至六〇糎、初生兒の身長よりも少しく長い。直徑は約一糎ある。而して胎兒の側から見て左方に捻轉して居る。捻轉の原因は、胎兒の運動・臍靜脈の發育が臍動脈よりも佳良なること、臍血管の發育が、羊膜鞘よりも可なること等に歸するのである。臍帶は二條の臍動脈・一條の臍靜脈・卵黄管の殘遺物・閉鎖せる尿管・ウルトン氏膠樣質等から成り、羊膜鞘によつて圍繞せられて居る。臍動脈管は靜脈血を運び、臍靜脈管は動脈血を運ぶ。

羊水　羊水は卵膜の内に滿ち、姙娠初期に於ては無色透明であるが、後には胎兒の排泄物によつて混濁し、白色又は帶黄色を呈し、一種の臭氣を有して居る。弱アルカリ性にして少量の蛋白質及び其の分解物・無機鹽類及び尿素等を含有し、姙娠末期には毳毛上皮細胞及び皮脂等を混じて居る。

(一) 分量　羊水の分量は各人によつて異る。姙娠初月に於ては胎兒の大さに比し比較的多量で、姙娠末期に於ては五〇〇瓦乃至一瓩(五合五勺)位あるのが普通である。

(二) 羊水の効用

一、姙娠中に於ける効用

(1) 胎兒・臍帶及び胎盤に及ぼす外部よりの壓迫を防ぎ、血液循環の防げのないやうにする。

(2) 胎兒の運動を自由ならしめ、母體に及ぼす影響を輕減する。

(3) 胎兒の皮膚の密著せる處又は胎兒と卵膜と密着せる處に於ける癒者を防ぐ。

二、分娩時に於ける効用

(1) 卵膜の媒介により胎胞を形成し、之によりて子宮頸管を擴大する。

(2) 胎兒・臍帶及び胎盤が陣痛によりて强壓を受くることを防ぐ。

(3) 胎盤の早期剝離を防ぐ。

(4) 產道を濕潤・粘滑ならしめ、胎兒の通過を容易にし產道の清洗作用を有す。

(三) 羊水の起源　今日なほ研究の途にあり確定說はないのである。

(1) 脫落膜内を走れる母體血管より交流作用によりて生じた浸出物なりとするもの。

(2) 羊膜上皮の分泌作用により、母體血液より構成せらるゝ分泌物なりとするもの。

以上二說の中(1)は否定せられ(2)の說が有力となつて居る。

胎兒の發育は正しき順序を逐ふものにして、其の各月の狀態は左の如し。

第一ヶ月の終　胎兒の長さ僅かに〇・九糎を出でずして、全卵の大さ、鳩卵に近し。

第二ヶ月の終　胎兒の長さ凡そ三糎・全卵の大さ鷄卵大なり。

第三ヶ月の終　胎兒の長さは凡そ七・五糎頭軀幹四肢等を分つことを得、全卵の大さ鶩鳥の卵の如し。此の時期より以後を胎兒と稱す。

第四ヶ月の終　男女の區別を爲し得、長さ凡そ一五糎あり。

第五ヶ月の終　胎兒の身長凡そ二四糎あり、姙婦は體內に於て其の運動を感ず。

第六ヶ月の終　胎兒の身長は凡そ二九糎となりて全身に極めて細き白色の毳毛を生じ、皮下に脂肪を有するに至る。

第七ヶ月の終　胎兒の身長は凡そ三三糎體重は一キロ瓦、身體の諸機關發育し母體を離るゝも辛うじて生活作用を營み得べし。

第八ヶ月の終　身長は凡そ三九糎・體重凡そ一・五キロ・瓦皮膚は赤くして瘦せたり顏貌は恰も老人の如し。

第九ヶ月の終　胎兒の身長は凡そ四二糎・體重二・　キロ瓦全身少しく肥ゆ。

第十ヶ月の終　胎兒の身長四八糎乃至四九糎體重三キロ瓦に達し、全身充分に肥滿し成熟胎兒の特徵を有するに至る。

資料

胎兒各月の發育　胎兒の發育は正しい順序を逐ふ。各月に於ける狀態左の如し。

第一ヶ月　第一ヶ月の終には、身長七乃至七・五粍あつて、體部は彎曲し、全部の大さは鳩卵に近い。

第二ヶ月　此の月の中頃になると人間の形狀がはつきりとなつて來て胎兒といふことができるやうになる。頭部は非常に大きい。此の月の終りには胎兒の身長は二・二乃至二・五糎となり、全部の大さは鷄卵大となる。

第三ヶ月　胎兒の身長は七乃至九糎となり、體重は約二〇瓦となる。全卵の大さは鶩鳥の卵位となる。外陰部によつて男女の區別を爲すことができる。

第四ヶ月　胎兒の身長は一〇乃至一七糎體重は約一二〇瓦となる。男女の區別は明瞭となる。胎盤は既に形成せられ、全身に毳毛の發生が始まる。

第五ヶ月　胎兒の身長は一八乃至二七糎、體重は約三〇〇瓦となる。兒頭は比較的に大であつて毛髮を生ずる。胎兒の運動は活潑となり、母體に於ても之を自覺するや

うになつ來る。

第六ヶ月　胎兒の身長は、二八乃至三四糎、體重は約六五五瓦、皮膚の表面は胎脂を以て被はれて居る。皮下脂肪の蓄積始まるも、皮膚にはなほ皺襞がある。此の時期に娩出するも生存することは不可能である。

第七ヶ月　胎兒の身長は三五乃至三八糎、體重は約一瓩、身體の諸機關は著しく發育す。若し此の時期に娩出する時は、稀に生命を保持することがある。

第八ヶ月　胎兒の身長は、四〇乃至四三糎、體重は約一・五瓩ある。顏面には猶皺襞を存し、皮膚は紅色を呈し、毳毛が密生する。若し此の時期に娩出する時は、保育宜しきを得ば生存する。一般に三〇週以後の胎兒は娩出されても生存の可能性がある。

第九ヶ月　胎兒の身長は四六乃乃至四八糎、體重は約二・五瓩ある。皮下脂肪組織は增加し、皮膚の鮮紅色は少しく褪色する。此の時期に娩出する時は通常生存するものである。然し保育に餘程注意せぬと死亡することが多い。

第十ヶ月　胎兒の身長は、四八乃至五〇糎、體重は約三瓩、全身肥滿し、此の月の終りには、成熟胎兒の特徵を呈するやうになる。

成熟胎兒　成熟胎兒の發育は、兩親の狀態、分娩の回數（多くなると胎兒發育よく三〇――四〇歲が最もよい）、男女の性別、分娩時期の遲速、姙娠中母體の榮養狀態、胎兒の疾病及び畸形等で差異があるが、我が國に於ては、成熟胎兒は、身長は平均四八・八糎、體重は約三瓩ある。皮膚は淡紅色を呈し、毳毛は軀幹の中殊に背部、肩胛及び上膊部に存し、皮下脂肪組織よく發育し、全身一般に豐滿し、頭髮は長さ三乃至四糎あつて黑い。鼻翼と耳廓の軟骨は、既に明瞭に觸知することが出來る。指爪は硬く指頭よりも長く挺出して居る。分娩後は直に高朗なる啼聲を發し、所謂呱々の聲をあげる。哺乳運動を爲し、四肢を活潑に運動する。尿及び胎糞を漏出する。胎糞は其の色帶褐綠色で粘稠泥狀である。

胎兒身長概算法　胎兒各月に於ける身長の概數を知る方法として、ハーゼ(Haase)氏は次の如き便法を案出した。

(1) 姙娠前半期　其の姙娠月數を自乘すれば、其の月の終りに於ける胎兒の身長の糎の數を得。

姙娠月數（姙娠月）	胎兒身長（糎）
(1) 1 × 1 =	1
(2) 2 × 2 =	4
(3) 3 × 3 =	9
(4) 4 × 4 =	19
(5) 5 × 5 =	25
(6) 6 × 5 =	30
(7) 7 × 5 =	35
(8) 8 × 5 =	40
(9) 9 × 5 =	45
(10) 10 × 5 =	50

(2) 姙娠後半期　姙娠月數に五を乘ずれば、其の月の終りに於ける胎兒の身長の糎の數を得。

小畑博士は曲尺で示す便法を案出した。

(1) 姙娠一ケ月乃至四ケ月　其の姙娠月數を自乘し、更に三を乘ずれば、各月の終りに於ける胎兒の身長の分の數を得。

姙娠月數（姙娠月）	胎兒の身長（分）
(1) 1×1×3	= 3
(2) 2×2×3	= 12
(3) 3×3×3	= 27
(4) 4×4×3	= 48
(5) 5 × 16	= 80
(9) 6 × 16	= 96
(7) 7 × 16	=112
(8) 8 × 16	=128
(9) 9 × 16	=144
(10) 10 × 16	=160

(2) 姙娠五ケ月乃至十ケ月　其の姙娠月數に一六を乘ずれば、各月の終りに於ける胎兒の身長の分の數を得。

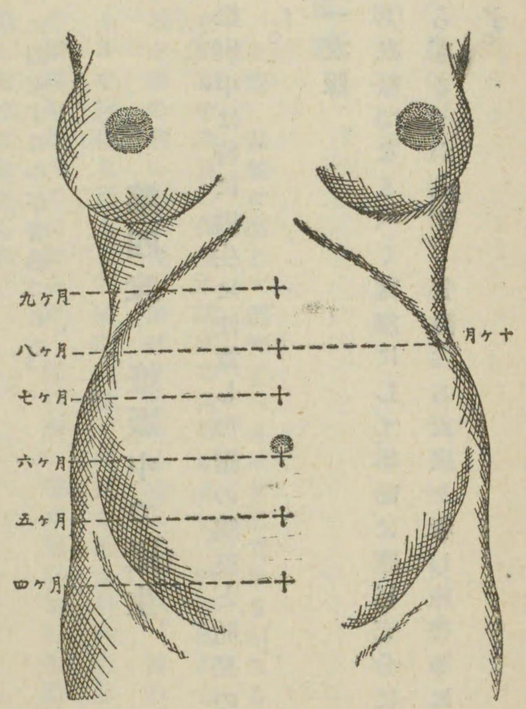
胎兒の發育と子宮及び乳房の變化

第一ケ月　子宮は少しく增大し、子宮膣部は柔軟となり、膣の分泌物が多くなる。

第二ケ月　子宮は前方に屈し、橙位の大さとなる。乳房は乳嘴の周圍の暈、次第に褐色を帶びて來る。

第三ケ月　子宮は增大し、初生兒の頭位となり骨盤より上方に進む。乳房の變化は一層顯著となる。

第四ケ月　子宮は大人の頭大となり、耻骨縫際の上から觸つて分るやうになる。子宮雜音が聽える。胎兒の心音も稀に聽える。



子宮の增大

第五ケ月　子宮底は臍窩と耻骨縫際との間に充ち少し右の方に寄る。よく注意すると胎兒の心音を聽くことが出來る。

第六ケ月　子宮底は臍の高さ迄進む。

第七ケ月　臍窩の上方、二三指を横に竝べし邊迄上る。胎兒は觸つて容易に分るやうになる。乳房は緊張し、時には稀薄な乳汁樣液を分泌する。

第八ケ月　初姙婦の子宮は心窩と臍窩との中央迄進み、腹部は膨滿し、臍窩は平坦となる。胎兒の運動（胎動と云ふ）盛となる。

第九ケ月　子宮底は心窩の處迄上り、姙婦は呼吸困難を感じ、俗に肩で呼吸をすると

云ふ狀態となる。尿意頻數となつたり、下肢に浮腫を現はしたりする。之は胎兒成長の爲め、內臟諸器官が壓迫される結果である。乳房を押せば白色或は黃色の漿液性の汁を分泌する。胎兒は骨盤口上に多少固定する。

第十ケ月　子宮は下り八ケ月頃の位置となる。故に呼吸困難は幾分か減ずるも、骨盤內の內臟は一層壓迫され、尿意頻數を來すやうになる。此の時胎兒の頭は骨盤上口に固定するのが普通である。

第四章　姙娠中の攝生

姙娠中は特に攝生に注意し、母體の健康と胎兒の健全なる發育とをはかるべし。

(一)衣服

(1)衣服はなるべく寬濶にして、季節に應じ充分に保溫の目的を達するものたらざるべからず。狹隘なる衣服を着し、紐・帶等にて胸部・腹部を壓迫すべからず。

(2)腹帶は保溫の目的と胎兒の位置を保つ爲め、廣き布片を緩かに纏ふはよろしきも、徒に舊慣にとらはれ、腹帶を强く締むるは胎兒の發育を妨ぐるものなり。

(3)腹部・脚部は常に冷えざるやう注意し、メリヤス製股引又はヅロース等を着用すべし。

資料

衣服。氣候に應じて選擇すべきは勿論であるが、なるべく寬濶にして下腹及び胸部を緊束せず、且つ保溫に適するものがよい。我が國の習俗に所謂五月帶(腹帶)を使用するが、幅の狹い布で强く緊縛するのは宜しくない。幅の廣い(木綿幅位)木綿又はフランネルで腹帶を行ふことは保溫並に胎位を保つ目的として用ふるのは宜しい。但し强く緊縛を加へてはならぬ。幅の廣い帶で腹部・胸部を緊縛することは姙娠中は大に注意しなくてはならぬ。

(二)食物

(1)平素の好みに從ひ、榮養分に富み、なるべく消化し易きものを選ぶべし。强烈なる酒類・濃厚なる茶又は珈琲其の他刺戟物等は之を避くべし。

(2)酸味强き未熟の果物を食するはよろしからず、よく熟して甘味あるもの